
間違いメール 番外編集

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違いメール 番外編集

【Nコード】

N5248A

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

『間違いメール』の番外編を集めた物語です。

はじめに

これは、『間違いメール』の番外編を集めた連載形式の小説となっています。

本編で語られなかった物語や他のキャラクターから見た物語など、様々な物語を書いていきたいと思っています。

他にどんな物語が読んでみたいとかリクエストなどあれば、メッセージください。

番外編でも面白い作品に出来る様に頑張りたいと心がけております。

それでは、番外編の方もよろしくお願いします。

番外編パート1 告白の返事は？

数枚の桜の花びらを、手の平に握り僕『倉田 雅之』はゆっくりと、重い口を開く。

「安奈……」

「なに？」

僕の声に安奈は優しく答える。

「実は……伝えたい事があるんだ……」

「伝えたい事？」

安奈は軽く首を傾げ、顎に右手の人差し指をあてる。

僕の頭の中で整理されていた、安奈への言葉はいつの間にか真っ白になって消えていた。だから、シンプルにこう言うしかなかった。

「君が好きだ」

暫く安奈からの返事は無く、僕は怖くて安奈の顔から目を背けていた。そんな僕の右手を安奈が握り締める。突然の事に僕はパニックに陥り、更に頭の中が真っ白になる。

だが、僕はその目ではっきりと見た。安奈の目から零れ落ちる透明な雫を――。

その涙が意味する事が何なのか分からなかったが、胸が痛んだ。

「じゅめん！」

僕はそう一言安奈に言い、手を振り解きその場を離れようと立ち

上がる。そして、走り出すと同時に安奈の声が聞こえる。

「待って！」

その言葉に僕の足は止まる。フラれる、そう確信し僕はゆっくり振り返った。その瞬間、安奈が僕に抱き付き涙を流しながら言う。

「やっと聞けた……。私も好きだよ……」

「エッ!？」

フラれると確信していた僕は、その言葉に何て答えていいのか分からずにいた。反応を示さない僕に、安奈は軽く口付けをする。突然の事に驚き慌てる僕は、混乱し目を回し気を失ってしまった。

その後、僕が目覚めたのは安奈の膝の上で、沢山の桜の花びらに囲まれていた。

「やっと目が覚めた？」

僕の顔を覗きこみ、安奈が優しく微笑む。僕は安奈の微笑む顔を見て実感した。僕達は両思いなんだと。ぼんやりする僕に、心配そうな声で安奈が言う。

「どうしたの？」

「別に、何でも無いよ」

「そう？ でも、キスで倒れるなんて、今度からキス出来ないね」

悲しげな瞳をする安奈に、僕は焦りながら答える。

「そ、そんな事無いよ！ さっきは、突然だったから」
「本当かな？」

僕の事をおちよくるかの様に安奈は微笑む。僕がムスツとした表情を見せると、安奈は笑いながら言う。

「冗談だよ。そんなにムスツとしないの」

「別に」。ムスツとしてないよ」

そう言った僕に、安奈がもう一度口付けをしてくれた。今度ははっきりと覚えている。安奈とのキスの事をしっかりと――。

番外編パート1 告白の返事は？（後書き）

『番外編パート1 告白の返事は？』は、如何だったでしょうか？
本編では語られなかった告白直後のお話でしたが……。わかってもらえたでしょうか？

まだまだ、番外編は続きますが長々とよろしくお願いします。

安奈編 第一通 間違いメール（前書き）

ここからは、『鈴木 安奈』の視線から進む『間違いメール』のストーリーです。本編で見れなかった安奈の友達や安奈の表情が見られるかも知れません。

それでは、楽しんで読んでみて下さい。

安奈編 第一通 間違いメール

私が目を覚ますと、携帯に一通のメールが届いていた。知らないアドレスからのメールだったけど、そのタイトルが『登録したよ』だったので、一応内容を読んでみる事に。

『あの、一応アドレス登録したけど、この後どうしたらいいのかな？ 健介の方に届いてるか不安なんだけど』

健介と言う名前を見て、これが間違いメールである事を確信した。少し迷ったが、私はメールが間違っただけだと思っている事を、相手に伝えようとメールを打った。

『あの〜。メールが間違っただけです。もう一度アドレスを確認してみてください』

その後、少し間があつたからその間違いメールから返事が届いた。『すみません。最近、携帯を持ち始めたもので、間違っただけだと思っていました。本当にすみませんでした』

この内容を軽く読み流し、私は学校へ行く準備をした。

私は鈴木 安奈。今年、高校二年になったばかり。

一時期は、陸上部に入っていたけど先輩とイザコザがあり、今はサッカー部のマネージャーをしている。成績は自分で言うのも何だけど、結構良い方。運動もまあまあ出来る方だと思う。

学校へ行く準備が済み部屋を出ると、友達の久美子が笑顔で私の事を出迎えてくれた。

フルネームは川島^{かわしま} 久美子^{くみこ}。私は『久美ちゃん』って、呼んでいる。

知り合ったのは一年の頃で、同じ陸上部に所属してた。結局、私はやめちゃったけど久美子はまだ続けている。おさがが似合う可愛い娘で、私の一番の友達。成績は少し悪いけど、運動に関しては右に出るものは居ないと噂されているらしい。

「おはよう。久美ちゃん」

笑顔で久美子に挨拶をすると、久美子も笑顔で挨拶を返してくる。

「おはよう。そう言えば、昨日はごめんね」

「昨日？ 何の事」

申し訳無さそうに両手を合わせる久美子に、私は首を傾げながら聞き返す。すると、久美子が小さな声で言う。

「ほら……。メール……」

「メール？ あっ、そう言えば、途中で返ってこなかった」

「ごめん。実は途中で寝ちゃって」

申し訳ないと手を合わせ頭を深々と下げる久美子の姿に、私は笑顔で言う。

「謝らなくていいよ。久美ちゃんは部活で疲れてたんだから」
「でも……」

まだ申し訳無さそうな表情をしている久美子。私は何とか話題を変えようと、今朝の出来事を話す事に。

「そう言えば、久美ちゃん聞いてよ。今朝、間違いメールが届いてて、びっくりしたよ」

「間違いメール？ 世の中には居るんだね、間違えてメール送る人」

先程まで申し訳無さそうな表情をしていた久美子は、瞼を閉じ腕を組みながら首を縦に振っていた。いつもの久美子らしくなってきた、私は嬉しくて自然と笑みがこぼれる。

「それで、その後どうなったの？」

「どうなったって、それっきりだよ」

私の言葉に不満そうな表情を見せる久美子。何が不満なのかわからないけど、私はこの場を切り抜け様と携帯の時計を見て言う。

「アッ、早くしなきゃ遅刻しちゃう」

そう言っただけで私が駆け出すと、久美子の声が背後で聞こえる。

「アーツ！ コラーツ！ 逃げるなっつ」

2階の一番端の教室が私のクラス。もちろん、久美子も同じクラスで、席も前後と並んでいる。

私と久美子が教室に入った時には、すでに半数の生徒が登校してきていた。勉強をしている者も居れば、お喋りをしている者もいる。そんな中、私と久美子は自分の席に着き、先程の間違いメールの

話になる。

「それで、その間違いメールの主は男？ それとも女？」

私は曖昧な記憶を辿り、その質問の答えを探す。そして、導き出された答えを久美子に述べた。

「多分、男かな」

「男か。カッコイイかな？ もう一回メールして、写メ送ってもらおうよ」

一人で盛り上がる久美子に対し、私はと言うと——あんまり乗り気じゃなかった。知らない人とメールをすうと言うのに、結構抵抗があつたからだと思う。そんな私の気持ちなど察する事無く、久美子は話を進める。

「それじゃあ。早速、メールを送るわよ！」

「送るって、私の携帯は……！？」

鞆に入れた携帯を取り出そうとした私は、鞆の中に携帯が入っていないのに気づいた。そして、ふと久美子の方を見た時、私の携帯を発見した。何かを目論む様な笑みを浮べる久美子の手の中にある私の携帯。私はハツとし、素早く携帯を奪い返すが時すでに遅し——。

携帯の画面に映る送信完了の文字に私はガツクリと肩を落とした。そして、久美子にゆっくりと言葉を放つ。

「ちょっと久美ちゃん！ どうするのよ！ これで、変な人だった私……」

「大丈夫だよ。文章からして結構、真面目な男よ」

「顔も分からないのに、真面目かなんて分からないわよ……」

不貞腐れた様に私は頬を膨らまし、久美子の顔をジッと見つめた。それでも、笑みを浮べる久美子は、「大丈夫、大丈夫」と連呼しながら自分の打ったメールを私に見せ付ける。

『これも、何かの縁ですし、よかったらメル友になりませんか？』

久美子の送ったこのメールが全ての始まりだったのかも知れない。

安奈編 第一通 間違いメール（後書き）

安奈編『第一通 間違いメール』は、どうだったでしょう。結構、全力を尽くしているのですが、イマイチ読者に楽しんで貰えているのか、わかっておりません。

安奈編はまだ続きますが、他にもリクエストがあればお聞かせください。あと、アドバイスをや指摘なども待っております。

それでは、長々と失礼しました。

安奈編 第二通 メル友 『倉田 雅之』

あの間違いメールの人と一週間ほどメールのやり取りが続いた。と、言うより無理やり久美子にやらされると、言う方が正しい。その間、お互いに自己紹介をしたため、メールをしている人の名前は分かった。

名前は倉田^{くらた} 雅之^{まさゆき}。私と同じ高校二年生らしい。らしいと言うのは、相手が本当の事を言っているかわからないから。部活とかはやってないらしく、得意な科目は無いと断言していた。逆に苦手な科目は全てと、これまた断言していた。

私の中で、倉田 雅之と言う人物がどういう人物なのかが纏められてゆく。そして、得た情報から打ち出された印象は、成績は悪く少し不気味な雰囲気を漂わせるいかにも、オタクといった印象だった。

本人には悪いと思うけど、私の中ではそう言う印象なのだ。それでも、定期的にメールを送っていた。

「お疲れ様でした」

「うん。お疲れ」

サッカー部の練習が終わり、後輩部員がマネージャーの私に声を掛けたので、私は優しく返事を返す。その後、部員の皆は足早に部室を去っていき、結局後片付けは私がする羽目になるのだ。

一人でグラウンドに散らかるサッカーボールを、軽く蹴りながら私はふと雅之にメールを送っていた。

「やっと、サッカー部の練習が終ったよ。でも、私の仕事はこれか

ら（泣）　しょうがないよね。雑用がマネージャーの仕事なんだし（笑）　それじゃあ、頑張ってくるよ』

メールを送った事を忘れ、ボールを片付けているとジャージのポケットに入れた携帯が震えだす。誰からだろうと思いつながら、私は携帯を見た。画面にはマサと映し出されている。ついでに、私は雅之の事をマサって呼んでいる。それは、久美子がマサって呼んだ方がいいよって押し切ったからだ。

私は携帯を開き、雅之からのメールを見た。

『頑張れ！　マネージャー！』

こんな短いメールの内容だけど、私はなぜか嬉しかった。多分、サッカー部員からこんな風な言葉を掛けられた事も無かったし、マネージャーなんて呼ばれた事がなかったからだと思う。

少し表情が綻ぶ私に、背後から久美子が抱きついてきた。それに、驚いた私は思わず携帯を上に向けてしまった。

「あつ、わわっ！」

何とか携帯をキャッチした私は、振り返り久美子に少々怒りを込めて言葉を飛ばす。

「もう！　久美ちゃん！　びっくりさせないでよ！」

「ごめん、ごめん。そんな怒った安奈も可愛いわよ」

笑いながら私の頬を触る久美子には、私の怒りの込められた言葉など通じていなかった。少し呆れ気味の私に、久美子は少し離れて問いかけてくる。

「それで、さつきは何してたの？ 見た感じ携帯を開いてたみたいだけど……」

「べ、別に、な、何もしてないよ」

「安奈って、分かりやすいよね。さあ、見せなさい。どんなメールを送っちゃったわけ」

焦る私に歩み寄る久美子。その手はゆっくりと私の携帯に伸び、結局携帯は久美子の手の中へと消えていった。

そして、私の送ったメールをチェックした久美子は、私を茶化すような声で言う。

「なるほど」。結構、いい感じでメール送ってるんじゃない」

「ち、違っわよ。ボーツとしてたら、勝手に送ってたの」

「携帯依存症ですか？」

「違います！ 大体、意味分かってるの！」

私はそう断言し、逆に久美子に問いかける。なにやら複雑そうな顔をして、久美子は考え込み、そして、私の問いの答えを言い放つ。

「わかっておりません。テヘッ」

軽く自分の頭を叩きニツコリと笑みを見せる久美子に、一歩踏み込み言う。

「テヘッ、じゃないでしょ！ 早く携帯返しなさい！」

私は携帯を返してもらおうと右手を差し出す。でも、久美子是不適な笑みを私に向ける。私はその笑みに怯み一歩後退した。その瞬間、久美子が私に背を向け一目散に逃げ出したのだ。

「そんな簡単に返さないよ。返して欲しけりや捕まえてみる」

まるで、どこかのガキ大将の様な口調でそう言う久美子に、私は右肩を落とし半笑いを浮べるしかなかった。

安奈編 第二通 メル友 『倉田 雅之』（後書き）

安奈編 第二通 メル友 『倉田 雅之』は、如何だったでしょう？ 僕なりに今回も精一杯頑張りました。

やっぱり、恋愛は難しいと感じております。特に女の子の気持ちなど、男の自分ではよく分からず、相変わらず梃子搦っております。何か指摘などあれば申し上げます。

長くなりましたが、以上作者の独り言でした。

安奈編 第三通 二人の後輩

五月も半ばに差し掛かり暑い日が続く。そのせいか、私はサッカー部の練習中、お茶運びで行ったり来たりと走り通しだった。そして、練習が終わり私が片づけをしていると、二人の女の子が近付いてきた。二人とも私よりも幾分背丈が低く、一人は髪を一つ結びにし、もう一人は少々長めの髪をしている。

二人とも、一年で新しく入ってきたサッカー部のマネージャー。髪を一つ結びにしてる娘が、北山^{きたやま} 桜^{さくら}。少々長めの髪の娘が大野^{おおの}香澄^{かすみ}。

桜は結構活発で、よく私の手伝いもしてくれる。一方の香澄は、人見知りをするのかあんまり私とは話してくれない。

そんな二人に、私は優しく微笑みかけ言葉を掛ける。

「どうしたの？ 手分けしてチャッチャと片付けちゃいましょう」

なぜか、ガッツポーズをする。ハツとして、握っていた拳を緩め恥ずかしさに顔がカッと熱くなる。すると、桜が噴出すように笑い出し、それにつられる形で香澄も笑い出した。

「アハハハハッ。先輩、顔真っ赤ですよ」

「フフフフ……」

「うっっ。恥ずかしっっ」

小声でそう言った私の言葉は、二人の笑い声にかき消され、二人に聞こえていないようだった。それから、ひと段落つきようやく桜が本題を切り出してくる。

「あっ、そんな事より、先輩はもうあがって良いですよ。片付けは

私と香澄でやりますから」

「エッ、でも、二人で大丈夫？」

心配する私に、桜は自分の胸を右手で叩くと、堂々とした口調で言う。

「ドーンと任せてください」

「ドーンとって、言われても……」

「任せてください。私達も早く仕事覚えたいんです」

不安そうな私の声に、暖かな可愛らしい声が返事を返す。それが、香澄の声と分かった瞬間、私は少し驚いた。まさか、香澄が私に話しかけると思わなかったし、こんなに可愛らしい声だなんて知らなかったから。多分、この時初めて香澄の声を聞いたと思う。驚く私に、香澄は首を傾げ明るい桜の声が響く。

「だから。今日から一週間は私と香澄で片づけしますよ。それじゃあ、お疲れ様です」

無理やり返される羽目になり、暇になった私は取り合えず雅之にメールを送った。

『最近はこの時間でも外は明るいね。私の性格みたい（笑）今日は疲れたわ。何度も麦茶を作られて……。全く、マナージャーは家政婦じゃないのよ（怒）』

そのメールを送り暫くし、雅之からメールの返事が届く。

『大変だね。もう、五月も半ばだからね。ずいぶん暑くなってきたから、喉が渴くんだろうね』

私もすぐに返事を返す。

『そうだよな。もうすっかり夏だよな。私も日焼けしないようにしなきゃ！ マサも日焼けしないようにね』

いつもは片づけをしながらで、返事を送るのが遅かったが、こうやってメールの返事をすぐに返せると何だか落ち着いた。それが、なぜかはわからないけど、雅之とメールをしているのが楽しかったのかもしれない。

校門前で携帯を握り締め雅之のメールを待つ私は、もう一つ待っているのがあった。それは、久美子の事だ。今日は、久美子と帰る約束をしている。まあ、同じ寮で暮らしてるんだから、一緒に帰らなくても何て私は思う。

そして、先に来たのは雅之からのメールだった。

『僕は帰宅部だから、日焼けはしないと思うよ』

と、そこに久美子が颯爽と現れ、メールの内容を盗み見て不適に笑い出す。

「フフフフフッ」

「く、久美ちゃん！ いきなり現れてメールの内容を盗み見ないでよ！」

久美子が突然現れ私の心臓は、バクバクと張り裂けそうなほど勢い良く鳴り響く。そんな私に、久美子は鋭く右手の人差し指を向け言い放つ。

「甘い！ 甘過ぎるわ！」

「あ、甘いって、私とマサはまだそんな関係じゃ！」

久美子の言葉になぜか動揺する私に、久美子は差し出した人差し指を自分の額に当てながらゆっくりと言う。

「フフフフツ。二人とも今年の紫外線の強さを甘く見すぎてるわ！」

「エッ…。し、紫外線……」

「そうよ。今年は凄いらしいのよ。気をつけるように教えてあげなさいよ」

「う…うん。わかった」

少々、ホツとする私の胸の内では、まだ心臓の鼓動が鳴り止まらずにいた。

安奈編 第三通 二人の後輩（後書き）

随分と更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。楽しみにしていた皆様には、本当に申し訳ないと思っています。次回からはもっと早く更新できるように頑張ります。

安奈編 第四通 テスト勉強

梅雨が過ぎ、一学期も残す所後僅か。私の通う高校ではもうじき期末テストが行われる。その為、部屋で机と向かい合っている。

暫くノートにペンを走らせていたが、急に雅之にメールをしたくなった。多分、少しずつ雅之の事が気になり始めてたのだ。

「マサもテスト勉強してるのかな？」

両手で携帯を握りながらふと呟く。部屋には私しかいないため返事は無い。でも、久美子が居れば大体何て言うか把握できたため、久美子と話をしているかの様に言葉が吐き出される。

「そうだよね。向こうもテスト期間中だよね。メールなんて送っちゃ迷惑だよね」

机に向ってため息を吐き、携帯を机の上に下ろす。そして、また久美子の言葉が何となく頭の中に聞こえ、私はもう一度口を開く。

「そうかな？ でも、テスト勉強の妨げになっちゃ悪いし、そのせいで成績が下がったら大変じゃない」

椅子をゆっくり回転させながら、自分の部屋の隅々までを見回す。その後も、独り言を続けた私は、意を決しメールを送った。

『もうすぐ、期末テストだよね。こっちは明日からだけど、そっちはまだかな？』

何とも不自然な内容のメールを送ってしまったと、後々後悔する

私だが後悔先に立たずと言った所だ。机にうつ伏せになりため息を吐いていると、急に着信音が鳴り響く。その音で雅之からのメールだと、気付き私はすぐさま携帯を開きメールを見る。

『こつちも明日からテストだよ。嫌だな……。一日掛けて暗記するつもりだよ……。』

このメールに、私は「へっつ」と声を出しながら頷く。と、不意にあるテレビ番組の事を思い出し、雅之にメールを送った。

『そうなんだ。でも、徹夜で勉強しても頭に入らないらしいよ。人間の集中力って、15分しかもたないらしいから。その15分置きに何度も、繰返し勉強すればいいって、何かで言ってた気がする』

そのメールにすぐさま返事が返ってくる。

『本当かな？』

私もそれに対しすぐさまメールを返す。

『もしかして、疑ってるの？ 人が親切に教えてあげてるのに（怒）』

少し雅之を困らせようと、最後に（怒）と書いた私はどんな返事が返ってくるか楽しみだった。そして、五分くらい後に着信音が鳴り響いた。

『別に、疑ってるわけじゃないけどさ……。』

そのメールを見て私はクスクスと、一人笑っていた。その後も、

メールが続き雅之のメールで12時を回っている事に気がついた。

『うわっ！ 何時の間にか12時回ってる！ 勉強してないよ！』

メールを見てすぐに時計を目視し、その目で12時を回っている事を確認して、私も勉強をしていない事に気付く。あちゃ〜と、思いながら右手で額を押さえた私は、すぐに雅之にメールの返事を送った。

『本当だ！ 今から、急いで勉強しなきゃ！ それじゃあ、また。明日はお互い頑張ろうね』

メールを送った後、携帯を机の上に置き、私はすぐさま教科書と向き合い、ノートにペンを走らせる。

そして、ノート一杯に数学の公式を書き終えた私は、ふとテストの日程を書き記されたプリントを手に取り、重大なミスに気付く。

「アッ！？ 数学は、今日じゃないよ……」

ガックリとうな垂れる私だが、すぐさま気持ちを切り替え世界史の教科書を出す。

「やっちゃったものは、仕方ない。今から世界史の勉強しなきゃ」

気合をいれ、今度は世界史のノートにペンを走らせる。そして、全て終った頃には午前3時を回っていた。

安奈編 第四通 テスト勉強（後書き）

安奈編も第四通に入りましたが、長いですよね……。番外編なんだから、もっと短くまとめた方がいいですよ。何て、思っているんですが読者の皆様はどう思っているのでしょうか？

自分では色々と纏めて本編（雅之編？）では、語られなかった話を書いているんですが、上手く纏っていないようです。

何か意見や感想、指摘などありましたらドシドシお送りくださいませ。

それでは、また次の機会に……

安奈編 第五通 雅之との初めての対面

期末テストが終ってすぐの日曜日。

私は久美子と電車に揺られていた。休みとあつて結構混み合う車内で、吊り革に捕まる私は、自然とため息をこぼす。そんな私の態度に、隣にいた久美子が呆れた態度で言葉をかける。

「何、ため息なんて吐いてるのよ」

「だって……」

「そもそも、あんたから誘ったんでしょ！ 今更、後悔しても遅いの！」

「そうだよね……」

もう一度私はため息を吐く。

私が電車に乗っているのは、実は雅之に会う為だ。その理由は、雅之にテスト期間中にメールを送ってしまい、その結果、雅之が補習になってしまったからだ。雅之は気にしなくて良いよって、言ってくれたけど……。そう言うわけにも行かないし、取り合えず雅之にあつて一言謝りたいと思ったのだ。

そして、久美子と一緒になのは、私が心細いから影から見て欲しいと頼んだのだ。久美子は謝るならメールで十分だって、言つて物凄く不満そうだった。まあ、メールでも謝ったけど直接会つて話してみたいと、心のどこかで思っていたのかもしれない。

しかし、待ち合わせの場所に近づくに連れ、不安になり落ち着きがなくなり始めていた。

「ど、どどどどうしよう！ もうすぐ待ち合わせの場所に着いちゃうよ」

慌てふためく私は、オドオドとした行動をしている。そんな私に落ち着いた様子の久美子の声が聞こえてくる。

「少し落ち着いたら？」

「わ、わわわわわかってるよ！ で、でもね……」

「はいはい。それじゃあ、深呼吸して……」

私は久美子に言われた通りに深呼吸を何度か繰り返す。すると、次第に体が楽になり、心も自然と落ち着きを取り戻していた。何とか落ち着きを取り戻した私に、久美子が携帯を見ながら言う。

「あと5分程度ね。まあ、メールの内容からすると、大した男じゃなさそうだから、少し話したらすぐに帰るよ」

「わかってる。謝るだけなんだから」

「まあ、相手に襲われない様子をつけるのね」

「マサはそんな事しないよ」

悪戯っぽくそう言って笑う久美子に、私はとっさにそう答えてしまった。その瞬間、なぜか顔がカツと熱くなり、急に恥ずかしくなった。そんな私の顔を見るなり、久美子は意味深な笑みを浮かべ、続けざまに言葉を発する。

「ほほっ。もしや、顔も知らないメル友に、優しくされて惚れちゃいましたか？」

「ち、ちちち違っよ！ そんなんじゃないよ！」

「その焦り様は凶星ですな。ホホホホッ」

そんなに焦っているつもりは無かった。どちらかと言えば、落ち着いてる風な感じで言っただけだったのだが、全く落ち着いてはいなかった様だ。甲高く私をからかう様に笑う久美子に、少し力

ンと来たが、なぜか言い返す事は出来ない。久美子の言う通り、私は少し雅之に引かれ始めていたからだ。

そして、私は膨れっ面のまま電車を降りた。隣には楽しげに微笑む久美子の姿も。

「もう、まだ怒ってるの？ ちょっとからかっただけじゃない」

「別に、怒ってなんかいないもん」

「いや……。十分怒ってるよ」

そう言う久美子に返事を返さず、私は駅を出る。駅の外には、大きな噴水とその右側に大きな時計台が建っている。そして、噴水の周りには大勢の人が集まっている。多分、この内の半分が私と同じ待ち合わせの人達だろう。

困り果て立ち尽くす私の耳元で、久美子がそつと呟く。私はその声に驚きすぐさま振り返り言う。

「く、久美ちゃん！ びっくりさせないでよ！」

「それより、メールで何処にいるか聞きなさいよ。何時までたっても会えないわよ」

「そ、そうだね」

取り合えず久美子の言う通り、メールを送ることにした私は、自分の服装を詳しくメールに書き雅之に送る。その後、暫くして雅之からのメールが届く。

『僕が探すより、安奈が探した方がいいかも……。黒い服の上に薄手の上着を着てて、黒い長ズボン……。』

私はこのメールを見た瞬間、すぐに声を上げてしまった。完全に久美子が横にいることさえ忘れて。

「あつ！　いた！」

その瞬間、雅之が私の方を振り返り、隣にいた久美子はすぐさま人混みに紛れて行く。

振り返った雅之の姿は、私の初期の想像とは遥かに違い、優しそうな顔付きで髪も意外と普通な感じだった。私よりも少し身長が低いけど、そんなの全く気にならなかった。

初対面の私と雅之の間には妙な沈黙が流れる。緊張からか、言葉が全く思いつかないが、私は恐る恐る声を出す。

「マサだよね？」

そんな私の質問に、雅之も緊張していたのか、裏返った声で返事をする。

「エッ、あつ、はい」

顔を真っ赤にする雅之は急に俯きオドオドし始める。オドオドする雅之に、私も急に不安になりそれが、言葉になる。

「どうしたの？　もしかして、会わなきゃよかったかと思ってる？」

「えっ、そんな事無いよ！」

急に大きな声でそう言う雅之は、私の顔を見て更にオドオドとする。そして、キョロキョロとしながら、雅之は口を開く。

「あ、あの……。た、立ち話も、何ですし……。あの店入りませんか？」

雅之の指差す先には結構大きめの喫茶店があった。久美子は話を
してすぐに帰るのよと、言っていたが、私はそんな言葉さえ忘れ、
雅之の言葉に軽く承諾し喫茶店へと移動した。

喫茶店に移動した私と雅之は向かい合わせに座りあっていた。雅
之は、私の顔を見ようとせず、何だか切ない気持ちになった。でも、
そんな気持ちを表情に出すまいと、必死で笑顔を向けた。

また、沈黙が続く私と雅之の間に、助け舟を出すかの様に注文を
とりに来る店員。店員はニコヤカに微笑みながら、言う。

「ご注文は？」

私はとつさに目に付いたメニューの名前を言った。

「私はチョコパフェで、マサは何にする？」

私に声を掛けられた雅之は、なにやら慌てふためきながらメニ
ュを指差す。その指差す先には、ジャンボパフェの文字が堂々と映
し出されている。結構、大食いなんだなと、少し驚いた私だったが、
ジャンボパフェが届いた時の雅之の表情は物凄く驚いていた。

その瞬間、雅之が大食いじゃないとわかった私は、心配になり雅
之に声を掛けた。

「だ…大丈夫？　こんなに食べられるの？」

「だ…大丈夫だよ……」

ぎこちなく微笑む雅之は、スプーンでパフェを口に運ぶ。一生懸命、
スプーンを口に運ぶ雅之の姿を見てみると、何だか自然と笑みが
浮かんでいた。

そして、ジャンボパフェを完食した雅之は、少し背を丸め身を震わせている様に見えた。

「うう……。か…完食……」

「大丈夫？」

「う…うん。全然……、平気だよ……」

そう言いながら微笑む雅之だけど、私にはとても大丈夫そうには見えない。その後、雅之の震えが止まったのは、喫茶店を出る前くらいだった。

安奈編 第五通 雅之との初めての対面（後書き）

少々、更新が遅れてしまいました。最近、どうも書くペースが落ちてきている様で、これから更新が暫し遅れてしまうかもしれません。愛読なさる皆様には、申し訳ないと言っしかございません。

安奈編 第六通 ストーカー

放課後、誰も居ない教室で私一人だけが、残っていた。もうすぐサッカー部の練習が始まるのだが、私は必死で探し物をしていた。私の探している物は、携帯電話だ。

今朝は、確かにあったのだが昼休みにメールを送ろうとした時には、なくなっていた。何処かに落としてしまったと思い、ずっと探しているのだが――。

一生懸命、携帯を探していた私は背後から名前を呼ばれた初めて、人が来た事に気付いた。

「ちょっと、安奈。まだ、探してるの？」

「カズちゃん」

振り返った私の目の前には、一人の女子生徒が立っていた。茶色に染めた髪は長く、耳にはピアスをしている。

彼女の名前は、宮沢 和美。私のもう一人の友達。私は『カズちゃん』と呼んでいる。

和美と出会ったのも一年の時で、一応陸上部に入っていた。まあ、私が陸上部を辞めるきっかけを作ったのが和美なのだ。見た目は派手で、少し怖いイメージがあるけど、とっても良い娘で何かと私の世話を焼いてくれる。それに、結構成績の方も良い方だとか。

「なあ、本当に寮に忘れてきたんじゃないんだよね？」

「うん。多分、鞆に入れたと思う……」

「多分じゃないよ……」

「だって」

「だってじゃない」

私の言葉に、ハキハキとした口調で答える和美。その後も、二人で教室を探し回ったが、結局見つからず教室を後にする。

「ハア……」

「何落ち込んだるのよ」

「携帯見つからなかったから……」

「寮にあるかも知れないし、そんなに落ち込むなよ」

「うん……」

覇気のない声で返事をした私を、元気付けようと和美は笑いながら言う。

「何なら、安奈の携帯に電話掛けてみようか？」

自分の携帯を取り出し、私の携帯に電話をかける和美。暫くして、和美が言う。

「ンツ？ 誰か出たみたいだぞ？」

「エツ？ それじゃあ、誰かが拾ってくれたのかな？」

「みただけど……。何にも言わないぞ？」

そう言っ、和美は私に携帯を貸す。携帯を受け取った私は、携帯に耳をあてゆっくりと口を開く。

「あの……。私の携帯拾ってくれたんですか？」

『…………』

暫く返事が返ってこない。不気味に思った私が、電話を切ろうとした時、携帯の向こうから男の声がした。

『マサって、誰だよ。僕が居るのに、他の男とイチヤイチャして……』
「エッ？」

聞き覚えの無い声に、私は首を傾げ和美の方を見る。その後も、携帯の向こうで一方的に話し続ける男に、私は怖くなり思わず電話を切ってしまった。そんな私に、心配そうに和美が声を掛けた。

「どうした？ 何怖がつてんだよ」

「い、今、男の人の声がしたの……。しかも、私の事を知っている様な口ぶりで話すの……」

「まさか、ストーカーか？」

「わかんない……」

体が震える私の肩を掴んだ和美は、優しく声を掛ける。

「安心しな。ストーカーなんて、私がぶっ飛ばしてやるからよ」

「うん……」

暫くして、私が持っていた和美の携帯が鳴る。それは、私の携帯からの電話だった。怖がる私に代わって、和美が電話に出て、大声で怒鳴る。

「あんた誰よ！ 名前を名乗りなさい！」

すぐに電話を切られたのか、和美は携帯を閉じ不満そうな顔で窓の外を見る。そんな和美に私はゆっくりと声を掛ける。

「どうしたの？」

「今、私の怒鳴り声が、聞こえたのよ。多分、近くに居る」

「それじゃあ……」

「この学校の生徒だつて事は間違いない！」

その時、廊下の角で物音がし、走り去る足音が響く。その瞬間、和美は勢い良く走り出す。私も立ち上がりすぐに和美の後を追いかける。

階段を駆け下り、保健室前を横切り外に出る。私と和美の前には、少しポツチャリとした男が走っている。右手にチラリと見える携帯が、私の物だと気付いた私は声を上げた。

「あつ！ 私の携帯！」

「やっぱり、あいつが犯人か！」

歩道橋へ駆け上る男。和美は自分の靴を脱ぐと、その男目掛けて勢い良く投げつける。靴はバコツと、音を起て男の頭に直撃。直後、男の右手から私の携帯が投げ出され、宙を舞う。ハツとする私だが、携帯は道路へと落ちていき、そのまま車のタイヤに踏みつけられてしまった。

ガツクリと肩を沈める私の傍では和美の怒鳴り声が響いていた。

「てめえが、ストーカーだな！」

「ヒイ！ す、すすすストーカーなんかじゃ！」

「黙れ！ 人の携帯を盗んどいてよく言うぜ！」

「ご、ごめんなさい！ ちょ、ちよつとした出来心で！」

「そんなんで許されるか！」

その後、和美が二度とこんな事はしないと誓わせた。だが、携帯は完全に駄目になってしまい、新しい機種へと買い換え、何事も無い様に事はすんだ。ただ、その新しくなった携帯には、雅之のアドレスだけが乗ってなく、メールを送る事も出来なかった。

安奈編 第七通 再会

あの事件以来、私のメールを送る回数は激減していた。まあ、メールの殆どが雅之とのやり取りだったので、雅之のアドレスを無くした私にはメールをする相手などそんなには居なかった。

久美子や和美は『過ぎた事は忘れて新しい恋を探そうよ』的な事を言っていたが、私にとっては初めて訪れた運命の出会いだった。確かに、初めは嫌々ながらのメールだったけど、雅之と対面した時に、ピーンときたのだ。

そんなこんなで、雅之とメールが出来ない日々が続くまま一学期が終了した。他の皆が嬉しそうに教室を出て行く中、私は肩を落し一人席に着きため息を吐く。

そんな私を見かねたのか、久美子と和美が私の傍にやって来て優しく言葉を掛ける。

「元気出せて安奈。いつまでも引き摺ってると、新しい恋も見えてこないぞ」

「別にいいもん……。それでも」

「安奈は可愛いんだからすぐにいい人が見つかるって、以外に近くに居たりするんだよ」

「まだ一度しか会ってないのに……」

「聞いてないし……」

私は完全に自分の世界に入り、久美子と和美の言葉など殆ど聞いていなかった。その後、私が気付いた時には久美子も和美も居なくなっていて、余計に気分が落ち込んだ。

そして、夏休みも大分消化し、私は実家に戻ってきていた。丁度、雅之と待ち合わせした駅を降りて、少し複雑な街道を進んだ所に私の実家があり、もしかしたら雅之に会えるんじゃないかと少し期待もあった。

私が帰ってくるなり、母は嬉しそうに出迎えてくれた。あんまり、実家に帰らないからこうなるのだろうか、一応何度か家に連絡を入れるようにはしていた。

「安奈。今日は彩夏も帰ってくるから、久し振りに家族全員そろそろわよ」

初耳だろうが、私には五歳年上の姉が一人居る。名前は彩夏^{さやか}。今はデザイナーとして働いているが、上手くいつているのかはよくわからない。なんせ、会うのも久し振りだからだ。

「それで、彩ネエは上手く言ってるの？」

「それがねえ、母さんもよく分からないのよ。あんまり連絡寄越さないからねえ」

「へえーっ。そうなんだ」

私は洗濯物を畳みながら母に軽く相槌を打つ。その後も、私は母と他愛もない会話を進めた。

昼下がりになり、一通り家事を手伝った私は母に買い物を頼まれ、久し振りに通る道に胸躍らせる私は、一軒の本屋の前に見覚えのある姿を発見した。チラッと見えたんだけど、私は思わず声を上げていた。

「あっ！ マサ！」

私の声に雅之が振り返る。その瞬間、私は嬉しくて飛び上がりそ

うになった。また、雅之とメールが出来る。そんな事ばかり考えていた。

「安奈……」

少し元気の無い声でそう言う雅之。俯く雅之に、謝らなければと思った私は、両手を合わせて雅之に頭を下げる。

「ごめん！ 私、携帯無くしちゃって……。買い換えたんだけど、マサのアドレス分からなくて……」

「な……なんだ。そうだったのか……」

私の言葉に少し元気を取り戻す雅之は、ポケットから携帯を取り出しアドレスを教えてくれる。本当に嬉しく、私は自然と笑顔になり別れ際に雅之に微笑みながら言った。

「これで、またメールが出来るね」

この後、すぐに雅之と別れ、私は家に向って歩き出していた。母に頼まれた買い物も完全に忘れ――。

安奈編 第七通 再会（後書き）

少し遅れましたが、安奈編『第七通 再会』どうでしたでしょうか？
結構、頑張って執筆してのですが、思う様に進んでおらず、少々手間取ってますが何とか、皆様の期待に答えられる作品に仕上げたいと思っております。

安奈編 第八通 オレンジ色の海と空

雅之とメールのやり取りを再開した私は、今日、雅之と一緒に海に来ていた。蒼い海の中には沢山の人の頭が見え、砂浜にはビーチパラソルが複数差してある。潮の香りが風に乗って私と雅之の居る所まで届く。

「やっぱり、人が多いね」

海を真っ直ぐ見据えながら雅之に言った。しかし、雅之からの返事はない。振り返ってみると、雅之がボーッとしたまま動かずに居る。少し心配になった私は、雅之の顔を覗き込んだ。すると、雅之はビックリしたのか、後ろに仰け反りそのまま尻餅をついた。

「どうしたの？ もしかして、眠れなかったとか？」

「まあ、そんな感じかな」

立ち上がりながらズボンに付いた砂を払いながら、雅之は微笑む。微笑む雅之の姿にホッとした私も、雅之に微笑み返し雅之に聞こえる程度の声で言った。

「それじゃあ……。私は着替えてくるね」

そんな私の言葉に、少々慌てる雅之は私に問う。

「着替えるって？」

その言葉に、私は少し恥ずかしかったが、答えた。

「水着よ！ み・ず・ぎ！」
「み、水着！」

驚き大声を上げる雅之。少し大げさだよと、思いながら、私は更衣室に向った。案外、空いている更衣室で水着に着替える。水着を着てみると、何だか急に恥ずかしくなった。それでも、勇気を出しバスタオルを巻いたまま更衣室を後にした。

日差しで暑くなった砂浜をサンダルで歩く私は、雅之の姿を探した。人が多いため、雅之を探すのは大変だったが、何とか発見する事が出来た。

そして、ゆっくり雅之の背後に迫り声を掛けた。

「着替えてきたよ」

その言葉で振り返る雅之の顔に、私は巻いていたバスタオルを投げた。バスタオルは見事に雅之の顔を覆う。急いでバスタオルを取った雅之は、私を見たまま暫く黙り込んでしまった。長い間続く沈黙に私は恥ずかしくなり、体中がカツと暑くなってくる。そして、小さな声で呟く。

「ジロジロみないで……。恥ずかしいから……」
「ご、ごめん」

慌てて謝る雅之は、すぐに目を逸らす。

その後、私と雅之はビーチバレーをする事に……。まあ、二人でやるのとは違うと思うけど、何だか結構盛り上がっていた。結果は私の圧勝だった。結構雅之も頑張っていたみたいだけど、やっぱり私の方が体力があったみたいで、最終的に体力の残った私が、疲れ切った雅之を攻め立てた感じがした。

ビーチバレーの後、砂浜に座り込み私と雅之は色々な話をした。

海に来て泳がないのは変だと思う人も居るだろうけど、私も雅之も泳げないため、砂浜で話をしているだけでも楽しかった。

沢山話し、時間の過ぎるのも忘れ、気付いた時には海の方こうに、オレンジ色の太陽が沈もうとしていた。私は急いで更衣室で水着を着替えた。着替えを済まし更衣室から出ると、オレンジ色に染まる海と空を見据える雅之の後ろ姿に、私は何故か心がジーンと熱くなる。これが、恋なのかな、何て思いながら私は雅之の隣に並んだ。

海も空もオレンジ色に染まり、とても綺麗だった。きっと雅之も、今同じ事を思ってるんだと、私は感じていた。そして、ゆっくり雅之の前に移動し微笑みながら言った。

「楽しかったね。また、メールするね」

安奈編 第八通 オレンジ色の海と空（後書き）

またまた、更新が遅れてしまいました。ご愛読してくださる皆さん、すいませんでした。

あと、評価をくださった皆さん、ありがとうございました。いい作品といったださる方がいて、書いている僕としては、とても嬉しいです。

頑張ろうと言う評価もありましたが、何処をどう頑張ればいいのか、未熟な僕ではイマイチ分からないので、何処をどう頑張ればいいのかと言うのも、聞かせてもらえると、今後に生かせるかと思えます。評価してもらってるのに、失礼だと思えますが教えてください。何だか、一方的に失礼な作者ですが、皆さんも何か治して欲しい事があればメッセージください。お待ちしております。

次回は早めに更新出来る様にします。長々と失礼しました。

安奈編 第九通 二学期突入

結構充実した夏休みが終わり、遂に二学期に突入した。

いつもの様に身支度を済ませ、部屋を出た私は久美子と挨拶を交わす。

「おはよう、久美ちゃん」

「おっはようッ！」

「相変わらず、元気一杯だね」

そう言うのと、久美子は白い歯を見せ笑う。陸上部は夏休み中、殆ど練習だったらしく、久美子の肌は少し小麦色に焼けていた。そのせいもあって、白い歯が更に白く見えた。

「凄い、日焼けしたね」

「そうなのよ。やっぱり、今年の紫外線は強かった……」

「そうなのかな？」

「あゝっ、安奈が羨ましいわ。そんな白くて滑々の肌」

私の腕を触りながら、自分の肌と比較する久美子に苦笑する。部屋の前で立ち話をしている私と久美子に、背後から少々嫌味交じりな声がする。

「あなた達、こんな所で立ち話しないでくれない？ 通行の邪魔よ」

振り返ると、数人の女子生徒を従えた女子生徒が居る。髪は金髪でカールの掛かった感じで、物凄く堂々とした態度。それに、久美子が反発するように発言する。

「あら、どうして冷夏が、この寮にいるのかしら？ 確か、実家から豪華なリムジンで登校するんじゃないのかしら？」

彼女は国水^{くにみず} 冷夏^{れいか}。結構、大きな会社の社長の娘さんだとか、私は詳しくは知らない。あんまり、仲も良くないし、どちらかと言えば、冷夏に敵視されてる感がある。

男子生徒から物凄い人気があり、何度か告白されてる場面を見かける。でも、その結果は全て惨敗に終わっているとか。とにかく、あんまり関らないようにしている。

久美子の言葉に冷夏の後に集まる女子生徒達が反発しようとするが、それを冷夏が抑えた。そして、軽蔑するような目付きで私達を見ながら、嫌味な声で言う。

「私があなた方と同じ寮に住んでると思ひまして？」

「現に今ここに居るじゃない」

「私がここに來たのには目的がありましてよ。ホホホホッ」

甲高い笑い声が廊下中に響き渡り、「ごめんあそばせ」と、言った後私と久美子の間を強引に突き進んでいった。まるで嵐の様だった。私も久美子も暫くポカーンとして動く事が出来なかった。

その後、同じ制服を着た生徒が大勢歩く歩道を久美子と一緒に歩いていた。皆、同じ寮から登校するので、学校まで同じ制服の生徒ばかりが歩いている。

「久々の学校だっ！」

「久々って、久美ちゃんも殆ど部活で学校行ってたでしょ？」

「まあ、そうだけど、制服で登校するのは久しぶりだな」

そう言いながらはしゃぐ久美子を見ると、何だか私もはしゃ

ぎたくなつた。けど、恥かしかつたのではしゃぐのだけは我慢した。そんなこんなで、ようやく学校に着いた私と久美子は、自分の席に座り暫くお喋りを続けた。そこに、少し元気の無い和美がやってきた。

「おはよう、カズちゃん」

「おはよう、安奈に久美子……」

やはり、元気の無い和美。いつもハキハキとしている和美が、こ
うも元気がないととても不気味で、少し怖かった。私も久美子も初
めは少しビビッていたけど、やっぱり和美の事が心配に成り理由を
聞くことに。

「ねえ、カズちゃん。何かあつたの？」

「昨日、眠れなくてさ……」

「眠れないって、遠足前の小学生じゃあるまいし」

和美の言葉に冗談交じりでそう言った久美子は、笑いながら和美
の肩を叩く。いつもなら、何らかの反撃をする和美だが、今日は反
撃すら見せずにそのまま机にうつ伏せになる。流石に、久美子もこ
れには焦りを見せる。

「まずいって、絶対病気だ！ か、かかか和美が！？」

「お、落ち着いて、久美ちゃん」

「こ、こここれ、落ち着いていられますか！？」

混乱して暴れまわる久美子を必死で抑える私だが、なんだかんだ
言っても現役陸上部の久美子の力を押さえる事等出来ない。そんな
久美子に今まで机にうつ伏せになっていた和美の一撃が決まった。

その瞬間、辺りに鈍い音が響き、急に教室内が静まり返る。もち

ろん、教室に居る生徒の視線は全てこっちに集まり、私はとても恥かしくなった。一撃を浴びた久美子は頭を押さえて蹲り、うなっている。そんな久美子に、和美が一言言う。

「私は、眠い。静かに寝かせてくれ。ついでに、今度眠りを妨げてみる……」

和美はそう言って教室中を見渡す。教室に居る生徒に緊張が走り、和美が更に言葉を続ける。

「ただじゃおかねえからな」

その後、和美は机にうつ伏せになり眠りに付き、久美子は頭を押さえたまま一言言う。

「うつうつ。頭痛が……。これは、早退するしかないです」

「早退って、頭を引っ叩かれただけじゃない。少ししたら治るって」

「安奈。あんたって、意外と冷たいのね……」

「それじゃあ、保健室に行こうか？」

「うん。お願いするよ……」

私はうな垂れる久美子を保健室に連れて行き、戻ってきたときには被害者が増えていた。

安奈編 第九通 二学期突入（後書き）

何だかんだで安奈編が第九通まで……。番外編なのに、まだまだ
終わりそうに無い安奈編……。読者の方はどんな風に思ってるのか
心配です。もしかすると、もう飽きてたりするんですよ……。
それでも、頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

安奈編 第十通 大騒ぎの昼休み

九月はあつと言う間に過ぎ、10月に入った。相変わらず、雅之とは発展の無いままメールだけが続いている。こんな発展の無い私と雅之のメールのやり取りに、久美子と和美は少々呆れ始めていた。

「ねえ、安奈さ。まだ、そいつとメールやってんのか？」

「うん。そうだよ。どうして？」

「よく続くよな。私だったら、一日で終わるかな」

「大丈夫、カズちゃんだって、マサとだったら続くよ」

笑いながらそう言うと、和美は少し呆れた様な表情を見せる。昼休みとあつて教室は結構静まり返り、私と和美と他数人を除いては皆昼食を買いに行っている。私は弁当を自分で作っている為、昼食を買いに行く事は無いし、和美は久美子をパシリにしているため昼食は買いに行かない。そのため、久美子が戻ってくるのをずっと待っているのだ。

「遅いな……」

「そうだね。どうしたんだろう」

私は携帯を右手で触りながら和美にあいづちをうつ。その後、沈黙が続き私は携帯を開いた。それに対し、和美が不思議そうに声を掛ける。

「どうしたんだ？」

「遅いからメール送るの」

「はあ？ メールって、下の購買所に行っただけじゃん。メールしなくてもその内戻ってくるって」

「エッ？ 購買所？ 遅いってマサからのメールじゃないの？」
「違うわよ！ 何で私が安奈のメル友の返事が遅いなんて心配するのよ！ 久美子のことよ、久美子の」

そういわれ、私は照れ隠す様に笑った。その直後、廊下を駆け抜ける足音と共に久美子が騒ぎながら教室に突っ込んでくる。そして、教卓にぶつかり、教卓と共に大きな物音を轟かせ倒れこんだ。私も和美もあまりにも凄まじい光景に、口を開けたまま暫し呆然としていた。

「ウウツ……。た…大変よ……。大変……」

教卓とぶつかった痛みには耐えながら、久美子が私と和美にそう言う。どこか打ち所が悪かったのか、凄く掠れた声で表情も苦痛で歪んでいた。きっと、教卓の角に何処かしらをぶつけたのだと、私は推測する。

そんな状況でも、久美子は言葉を続ける。

「大変なのよ！」

「大変大変って、あんた昼食はどうしたんだ！」

「そんな事より、大変なんだってば！」

「私にとっては、あんたが昼食買って来なかった事が大変なんだよ！」

お互いに言い合う久美子と和美では、全く話がかみ合わないと思った私は、取り合えず、二人を落ち着かせる事に。大分時間が掛かったが、何とか久美子と和美の二人を落ち着かせた私は、久美子の話を聞く事にした。

「それで、久美ちゃん何が大変なの？」

「これで、くだらない事だったら、どうなるか分かってるだろうな！」

久美子と向かい合わせに座る和美が、指の骨を鳴らしながら眉間にシワを寄せる。女の子とは思えぬ表情に、私は少し表情を引き攣らせていたが、久美子はそんな事はお構いなしに話をする。

「振られたのよ！」

「振られたって、お前告白する相手いないだろ」

久美子の言葉に即座に対応する和美。その言葉に少しムスツとする久美子は、上目遣いで和美を睨む。何やら、険悪な雰囲気漂うなか、二人の間に座る私が苦笑いを浮かべながら、訊く。

「振られたって、久美ちゃんじゃないよね」

「当たり前！ 自分が振られて何で、ワザワザ騒ぎ立てなきゃいけないのよ！ 振られたのは……」

「振られたのは？」

何やら、もつたいぶる久美子。まるで、とあるクイズ番組の司会の様だ。かなり間を空ける久美子に、遂に和美がキレた。机をなぎ倒し勢いよく立ち上がり久美子に怒鳴り込む。

「もつたいぶってんじゃねえ！ 大体、そんなに間を置くもんじゃないネエーだろ！ さっさと話し済ませて昼食買って来い！」

その声に教室中が凍りつき、クラスに居た生徒は皆こっちを見ながら引き攣った表情を見せていた。流石に私も驚いたが、よく考えたら和美は結局、早く昼食が食べたいだけの様な気がする。多分、そう思ったのは私だけかもしれないけど……。

息を荒げる和美に対し、いたって落ち着いた様子の久美子が、なぎ倒された机を元に戻してゆっくりと静かに言う。

「実は、振られたのはあの国水　冷夏なのよ」

先程和美が行った行動など、無かった事の様に処理した久美子はサラツとした口ぶりでそう言い、どうだと言わんばかりに胸を張る。流石の和美もこれには、怒りを通り越し呆れて笑うしかなかった様だ。

そんな私達の話に耳を傾けていたクラスの生徒達は、その言葉を聞き同様が隠せなかったのか少しずつだがざわめきだす。確かに、この高校ではマドンナ的存在だった冷夏が、振られたとなれば男子は黙っちゃいないだろうし、女子からも結構な支持があるため、その話は瞬く間に学校中に知れ渡った。

「でも、冷夏の目にとまるほどの男子生徒なんて、この高校に居たっけ？」

「さあな？　私はこの高校の男子にや興味ねえからな」

サラツと本音を口走り首を傾げる私と、全く興味が無いと言った態度で腕組みをする和美。私も和美もこの高校の男子生徒の事なんて、全くといって知らない。和美にいたっては、クラスの男子の名前すら覚えてない始末。和美いわく、「名前を覚えて欲しいなら、それ相応の態度を示せ」とか、私には全く理解できない言葉を並べていた。

そんな私と和美に対し、久美子が不適に笑いを漏らす。きっと、何らかの情報がまだ手の内に残っているのだろう。久美子は、私や和美と違いこの高校のカッコいい男子生徒とか、色々調べまわっており、その情報網は蜘蛛の巣張りの凄さだとか。

「フッフッフッ。私の情報だと、国水 冷夏を振ったのは、二年二
組桜田 博隆^{ひろたか}。今学期転入してきたイケメンよ。身長184cm、
体重65kg。趣味はサッカー。前の高校ではエースストライカー
だったとか。それから……」

その後も、調べ上げられた久美子の情報は止まる事無く、私も和
美も「ヘエッ」と、あいづちをうつ事しか出来なかった。

安奈編 第十通 大騒ぎの昼休み（後書き）

随分と、更新が遅れてしまいました。

毎回毎回、更新が遅れてしまい、すみません。最近、全く執筆が進みません。何とか努力しているのですが、何か物足りないと言った感じで、中々集中できない感じです。

暫く、更新が遅れることがあると思いますが、努力して早く更新できるように頑張ります。

本当に申し訳ありません。

安奈編 第十一通 月とスッポン

久美子が大騒ぎしていた昼休みから随分と時は経ち、私は久美子と一緒に下校していた。空は紫紺色に染まり、幾つか星が輝く。そんな夜空を見上げながら、ふと思う。『マサと一緒にこの夜空を見られたらいいな』なんて。

そして、一人想像を膨らましている私に、久美子が声を掛ける。

「安奈、ちゃんと前見て歩かないと……」

その言葉の直後、私は電柱にぶつかつた。その場に蹲り額を押さえる私の横に立ち止まつた久美子は、呆れた様に笑いながら言う。

「ほら、ちゃんと忠告したのに」

「遅いよ……。ぶつかる直前じゃあ、意味無いって……」

「普通、気付くでしょ。目の前に電柱があるの位」

「うっ……。完全に自分の世界に入ってたんだもん……」

「自分の世界って……」

私の発言にため息を吐き、右手を額に当てる久美子。そんな久美子を見て、頭を押さえながら私は笑つた。

暫くの間、少し赤くなつたオデコを右手で押さえながら、久美子と並んで寮へと向う。その間、幾度と無くため息を吐く久美子が心配になり私は恐る恐る訊いてみた。

「どうかしたの？　ため息ばかり吐いちゃって……。悩みなら聞くよ」

「別に悩んで訳じゃないんだけどさ。冷夏が心配でさ」

「冷夏が？　どうしてまた。今朝はあんなに言い合つてたのに」

そう。今朝も久美子と冷夏は言い合っていた。今朝と言うより、二学期が始まってから殆どと言っていいほど、朝は言い合っている。しかも、私の部屋の前で……。

そんな私の声に、久美子は少し照れ隠しの様に笑いながら、答える。

「だってさ。冷夏って、自分から告白するの初めてだし、ましてや振る経験はあっても振られるのって初めてだし……。それに、冷夏って結構傷つきやすいんだよね」

「そうなんだ……ンツ？ 久美ちゃんが何でそんな事知ってるの？」

私の唐突な質問に、目を丸くする久美子は、首をゆっくり傾げて言葉を発する。

「あれ？ 言ってなかった。私、冷夏と同じ中学で、結構仲良かったんだよ」

「エツ？」

久美子の言葉に耳を疑う。毎朝というほど言い合っているのに、仲が良かった？ そんな言葉を信じられるわけがなかった。そんな私に、微笑みながら久美子は更に言葉を続ける。

「高校ではクラスが別々になって、互いに新しい友達も出来て会話とかしなくなっちゃったけど、それでも心配なんだよね」

「会話はしてないけど、言い合ってるよね。しかも、朝っぱらから「あれは、挨拶みたいなものよ。ほら、面と向うと何だか恥かしいじゃない。だから、あんな言葉ばかり交わすの」

「そう言うものなのかな？」

軽く首を傾げる私に、「そう言うものよ」と笑いながら言う久美子に、私は何と無く納得した。そんな私に久美子は一枚の写真を取り出し見せる。その写真には金髪の少し感じの良い顔つきの男が映っている。

「これ、誰？　もしかして、久美ちゃんの彼氏？」

「こいつが、冷夏を振った男。桜田　博隆よ」

「へっ。でも、どうやって写真手に入れたの？」

「ンッ？　裏ルートで譲ってもらったのよ」

流石は久美子。その入手手段は簡単には教えてくれない。と、言うよりその情報網が凄すぎる。なるべく、久美子は敵に回したくないと密かに思った。けど、そんなに凄い情報網があるなら、報道部にでも入れればよかったのに……。

それから、暫くして久美子と言う。

「それで、どう思う？」

「どうって？　別にどうも思わないけど……。でも、皆がキヤーキヤー言う程、カッコよくは無いよね。私的にはマサの方が……」

「あんたの目は、どうかしてるわ……。博隆とあんたのメル友じゃあ、月とスッポンよ」

私が最後まで言う前に久美子が馬鹿にする様に答えた。何と無く意味は分かっていたが、少しでも抵抗しようと私は言う。

「そうだよな。マサに比べたら、スッポンだよな」

「違っって、そのマサって言うのがスッポンなの。大体、分かかって言ってるでしょ？」

「うっ……」

私だつてそう思ったけど、認めたくないし、実際私からすればマサの方が何倍もカッコよく見える。それに、見た目が全てじゃないと、言いたかったが涙を堪えるので精一杯だった。そんな私に、久美子が慰めるように声を掛ける。

「まあ、あんたにとつちやマサが一番かも知れないけど、他から見れば確実に博隆が良いって言うわよ」

「いいもん。私の中で一番なら」

「あんたは子供か……」

子供の様な発言ばかりする私に、業を煮やす久美子はため息を吐き頭をかく。それから、暫くは久美子と口を利かず、互いに言葉を交わしたのは寮についてからだった。

「それじゃあ、また明日」

「うん……。また明日……」

と、言葉を交わし私は部屋に入った。

安奈編 第十二通 雅之からの相談

あれから、数日経つが、未だに久美子は元気が無い。自分が振られた訳じゃないのに、自分の事のように落ち込んでいる。きっと、冷夏のことを本気で心配しているのだろう。

冷夏もあれから、ずっと学校を休んでいて、二学期に入り毎朝の様に起きていたあの言い合いも、ピタツとやんだ。朝から五月蠅いのは嫌だが、無ければ無いで何だか調子が悪い。それは、私だけじゃない。クラス中が陰気な雰囲気にも包まれている。今考えてみれば、このクラスがあんなに明るかったのは、久美子が盛り上げていたからなんだと、深く実感した。

そんな暗いムードの中、先生は授業を進めるが、皆全く身が入っていない。私も、その一人だ。体を横に向け、後の席の和美の方を見ながら小声で話す。

「やっぱり、久美ちゃんが元気ないと、クラスが暗く感じるね」

「そうだな。まあ、それはそれで、良いのかもしれないけどな」

「良くないよ。久美ちゃんが元気ないと、私も何だか元気が出なくて……」

「それは、個人の問題さ。って言うか、安奈もこのクラスの連中も、人に流されすぎ」

シャーペンの先を私の方に向けて力強くそう言う和美は、すぐにノートに目を落し黒板の字を書き始める。見た目は悪って感じなのに、こんなに真面目だ何て……。やっぱり、人は見た目で判断しちゃ駄目だ。

これ以上、和美は私の話を聞きそうに無いので、私は体を黒板の方に向け、シャーペンを手に取った。でも、その目は黒板ではなく、

前の人の背中だけを見つめていた。

その後の授業も全く身が入らず、私はぼんやりとこの日を過ごした。部活も終わり、何だかいつも以上に疲れを感じながら、私は自然と携帯でメールを打っていた。

『最近、ちょっと疲れを感じるんだよね。別にマネージャーの仕事が辛いつて訳じゃないんだけど……。歳なのかな？（なんちゃって）マサは疲れってどうやって取る？』

本当は、雅之に相談したかったけど、あんまり雅之に心配掛けたくなかった。だから、こんな内容のメールになったのだ。そして、このメールへの返事は意外と早く帰ってきた。

『疲れか……。僕の場合、寝れば疲れなんてなくなるかな？ まあ、帰宅部だしそんなに疲れないんだけどね（笑）』

なぜ、疑問形なのかと思ったが、まあ、深く気にはしなかった。メールを見ながら、ふとため息を漏らす私の手の中で携帯が震える。雅之からのメールだった。私はすぐにメールを見ることにした。

『相談があるんだけど、いいかな？』

「相談？ 何だろう」

不意に独り言をもらす私。まあ、周りには誰も居ないわけだし、別に恥かしくは無かった。それより、雅之からの相談がどんな事なのか気になった。もしかしたら、『好きな人が出来た』とか、『実は告白しようと思ってるんだ』とかだったらとか、色々と考えた。そして、小刻みに震える指でメールを打ち返した。

『相談？　もしかして、恋の相談？　それなら、私得意だよ（笑）』

そうでなければ良いと、思いながらこのメールを打った。もし、恋の相談ならマサは私の事をただのメル友としか見ていないと、言う事になるからだ。そう考えると、何だか涙が出そうだった。

その時、携帯が激しく震えた。雅之からの返事が来たのだ。涙を堪えながら携帯を開きメールを確認した。

『恋の相談じゃないんだけど……。実はさ、この前クラス的女子からアドレスを書いた紙をもらったんだけど……。返事出さか出さないこうか、迷ってるんだよね。どうしたら良いかな？』

このメールを見た瞬間、薄らと涙が毀れた。返事を出すか悩んでると言う事は、気になっていると私の頭の中で結びついたからだ。それでも、涙を拭いメールを打ち返した。

『なーんだ。恋の相談じゃないんだ。つまんないなー。それで、何だっけ？　メール送るか送らないかだっけ？　私は送った方がいいと思うよ。きつと、その子マサの事好きなのよ。キャッ！　色男（笑）なんだから』

自分の気持ちを必死に押し殺し、そうメールを送った。雅之が私の事をメル友としか見ていないと言う事を感じ、胸が痛み涙が止まらなかった。

安奈編 第十三通 振られた気持ち

翌日、朝起きると目が充血していた。泣きながら眠りに就いたからだろう。何にもやる気が出ず、私はベッドの上に座り込んだままボーッとしていた。動かないまま数分を過した私は、ふと机に置いてある携帯に目が行く。『マサ、メール送ったかな?』と、思いながら私は深くため息を落す。

もう一度ベッドに倒れこんだ私は、枕を抱いた。こんな気持ちになつたのが、初めての私は、昨日の事を思い出すと自然と涙が溢れた。暫く、泣いていた私は部屋をノックする音に、体を起こす。

「安奈っつ。まだっつ?」

ドアの前から聞こえる久美子の声に私はハツとする。久美子は、毎日私の部屋の前で私が出てくるのを待っていてくれる。まあ、休む時などは一度顔出して、体調が悪いから休むなど一言言うけど、今回は完全に忘れていた。時計を見ると既に八時四十分を回っていた。

やってしまったと、私は頭を抱えた。そして、久美子に謝ろうとベッドから立ち上がり、ドアを開く。

「ゴメン……。今日は学校……」

「安奈! 今日一日、私に付き合って」

「へっ?」

「良いから、早く私服に着替えて、制服のままだとまずいでしょ!」

「あっ……」

久美子に言われて、私は自分が制服姿だと言うのを思い出した。あれが、シヨックで帰ってきてからずっと部屋で泣いていたため、

着替えもしていないのだ。

充血した目を隠す様に私は久美子から目をそらし、ゆっくりと言
う。

「ごめん。シャワー浴びるから、少し中で待ってて」

「シャワー？ 別に良いけど……」

制服姿の私を見ながら不思議そうな顔をする久美子は、イソイソと部屋の中に入る。着替えを持ち、風呂場へ移動した私は、昨日の事を忘れるために、シャワーを頭から浴びた。でも、忘れる事など出来ず、逆に昨日の事を思い出し涙を流す結果になった。

一通り落ち着きを取り戻した私は、体を拭き私服に着替え風呂場から出てきた。気分はあんまり良くないが、久美子に心配掛けまいと、私は精一杯の笑顔を見せ言う。

「ゴメン。待った？」

「大丈夫よ。さあ、行きましょう！」

「行くって、何処に行くの？」

私服の久美子に私は問う。暫し黙り込む久美子は、私の目をジッと見る。そして、ゆっくりと口を開く。

「目が充血してるよ。何かあったの？」

「エッ、うつん。何でも無いよ。ちよつと寝不足なだけ」

不意を突く久美子に私は笑いながらそう言った。冷夏の事でただでさえ元気の無い久美子に、私の事で元気を無くして欲しくないと
思っただのだ。

『そうなの？』と、久美子は半信半疑で私の事を見つめる。この
場を切り抜けるため、私は必死に話題を変える事に。

「そ、それより、行く所があるんでしょ。急ぎましょう」

「あつ、そうだった。早くしないと電車が！」

「電車？ 乗るの？」

「うん。電車乗るよ。さあ、行くわよ！」

行き先も聞かず、私は久美子に連れられ電車に乗った。大分空いている電車に揺られる私と久美子に会話は無い。互いに考え事をしていたからなのかも知れない。数十分後、私は久美子に言われるがままに電車を降りた。

「ねえ、久美ちゃん。何処に行くの？」

「ここまできたら、教えても大丈夫かな」

そう言っ、恥かしそうに頭をかく久美子は、何処へ行くのかを私に教えてくれた。聞いた時は『本当に行くの？』なんて思ったが、これで久美子が元気になればそれで良いと私は思い直した。

駅を出て私は久美子に連れられ歩き続けた。結構な人通りのある街道を私はキヨロキヨロを見回す。初めて来た場所だから、私は何だかワクワクしていた。

暫く歩き、私と久美子は豪勢な屋敷の門の前で立ち止まる。

「ここが、冷夏の家よ」

「うわっ。すごい」

「さあ、感心してないで行くわよ！」

「エッ！ ちょっと、何で私が先頭！？」

私の言葉に聞く耳を立てず、久美子は私の背中をおして門をくぐった。広い庭は緑が一杯で、大きな噴水が中央にある。いかにもお

金持ちの家と言うのが感じ取れる。その庭を暫く進む私と久美子に、巨大な物体が横から襲い掛かってきた。

「キャッ！」

完全に、巨大な物体に押し倒された私は目を堅く閉じた。すると、ザラザラとした舌が私の頬をなめる。目を堅く閉じたままの私は、必死に顔を左右に振り抵抗する。そんな私の耳には久美子の声が聞こえた。

「コラッ！ 安奈から離れる！」

何度もそう怒鳴る久美子の声を、無視し私の顔をなめ続ける。その時、堂々とした態度の声が響いた。

「レオ！ お止めなさい！」

その声に私の上に乗っていた物体は大人しくなり、私の上から退いた。暫く目を閉じたまま動けない私に、久美子が声を掛ける。

「安奈……。大丈夫？」

「ウウ……。大丈夫じゃないよ……」

「ごめんなさい。レオはじゃれてるつもりだったのよ。悪気があるわけじゃないわ」

冷夏の言葉に、私は薄ら目を開ける。心配そうな表情の久美子と、少し離れた場所に暗い表情の冷夏の姿。その隣には巨体の犬が舌を出したまま、私の事を見つめていた。そう。私にいきなり飛びついてきたのはあの巨体な犬だったのだ。

「犬……だったの……。本気で驚いた……」

「私も一番最初に来た時はあの犬に襲われたわ」

「あつ、じゃあ、知ってて私を先頭に！」

「当たり前でしょ。あんな巨体の犬に押し潰されたくないもん」

当然といわんばかりにそう言い切る久美子に、私は少し呆れた。
友達を犠牲にするなんて……。

やけに大人しく私と久美子の会話を聞く冷夏は、小さな声で冷たく言い放つ。

「何しにいらしたの？ あなた方学校はどうなさったの？」

「あんたこそ、いつまで引き摺ってるつもり？」

冷夏にそう言い返す久美子の表情は、とても寂しそうだった。だが、そんな久美子に冷夏が冷たい言葉を言う。

「引き摺る？ 私が何を引き摺るというの？」

「引き摺ってるじゃない！ 一度振られただけでしょ！」

その言葉に冷夏の表情が強張り、大声で怒鳴る。

「あなたに何が分かるっていうの！ あなたに、振られた私の気持ちなんて！」

「あなたが辛いのは分かるわ！」

私は冷夏に言葉を発していた。殆ど無意識の内にそう叫んでいたのだ。その後も、私は言葉を続けた。

「でも、告白して振られたなら良いじゃない。告白しないで振られる事がどんなに辛いのか。好きな人に恋の相談されるのが、どんなに

辛い！」

「安奈……」

私の事を心配そうに見つめる久美子。私は知らず知らずに涙を流していた。私の言葉で久美子も冷夏も黙り込んだまま、それでも私は言葉を続ける。

「告白して振られたなら、彼もあなたの気持ちに気付きいつか振り向くかもしれない。でも、告白も出来ずに振られたら……。その気持ちも分かってももらえないまま……」

その後は、何を話したのか覚えていない。ただ、その場を走り去ったのだけは覚えていた。

安奈編 第十四通 胡散臭い占い師

冷夏の家から逃げ出した私は、駅の前まで戻ってきていた。

涙は未だに止まる事無く流れ出す。私は必死に涙を堪えようとしたが、堪えようとすると余計に涙が溢れてくる。駅の前は人通りが激しく、何人もの人が泣いている私を見ながら通り過ぎる。

そんな時、一人の人物が私に声を掛けた。怪しげに顔を隠した、『占』と書いた台の向いに堂々と座る人。見た目では男か女かわからないが、雰囲気から女性の様な気がした。その人は、泣いている私に手招きをしながら言う。

「さあ、おいでなさい。悲しく泣きなさるあなたを占って差し上げましょう」

少し歳の言った様な声だが、私はこの声に聞き覚えがあった。それは、久美子の声にソックリだった。私は涙を拭き、鼻を吸いながら、その人に質問する。

「あの……。久美ちゃん……。じゃないですよ？」

「久美ちゃん？ はて、私はそんな名前じゃございませんが」
「そうですよね……」

そんなわけ無いかと思いながら、私は鼻を吸う。その後、台の上に置かれた水晶に手をかざす占い師。不思議な感じを漂わせる占い師に、私の涙はいつの間にか止まっていた。沈黙が続き大分時間が経つと、その占い師が言葉を並べる。

「あなたには、好きな人が居られますな。しかも、随分と変わった出会いをなさった」

「はい。確かに好きな人は居ます。でも、私振られちゃったんです……」

ため息交じりの私の言葉に占い師は更に言葉を並べる。

「振られた？ あなたは告白などしてないと見えますが、それで、どうして振られてしまったと？」

「昨日、メールが来たんです。ある女の子にメール送ろうか悩んでるって……。きっと、彼はその娘の事が……」

「違いますわ。彼は安奈さんの事が好きだから、その娘にメールを送るべきか悩んだのよ」

急に占い師の声と言葉遣いが変わる。しかも、その声は冷夏の声にソックリだった。驚く私に「ンンツ」っと、喉を鳴らした占い師。少々、間が空き妙な空気が流れ出した時、占い師の声が久美子のソックリの声に変わり言葉を告げる。

「申し訳ございません。私、少々精神が不安定でして、たまに違う人格が出てしまうのです」

「そ…そうですか……」

苦笑しながら私は一度縦に首を振る。そんな私に更に占い師は言葉続ける。

「それでは、先程の続きを……。安奈さんは、雅之からメールを送ろうか悩んでいると聞かされたのですね。そして、安奈は彼がその娘に気があると勘違いし、送った方が良いと言った」

「はい。そうです……。それより、どうして私の名前やマサの事まで知ってるんですか？」

「そ…それは……。う、占い師だからです。わ、私はあなたがここ

に来る事を既に知っていたのですよ」

何だか焦りの見える占い師。と、言うより本当に占い師なのだろうかと言う疑問が生まれる。そんな私の疑問に気付いたのか、占い師は喉を鳴らしながらゆっくりと話を続ける。

「あなたは、勘違いをしてるんですよ安奈さん。彼があなたに相談したのは、あなたにメールを送らないで欲しいと言って欲しかった。そして、彼はあなたが自分の事を恋愛対象にしているのか、それともただのメル友なのか、それを知りたかっただけなのです」

占い師は力強くそう発言しながら私を指差す。物凄く胡散臭い占い師だったが、その時私は既に占い師の言葉を信じきっていた。そして、『そうだったんだ。マサは私の事が……』何て、思いながら完全に占い師の事など忘れていた。今までの悲しみは何処かへ飛んでいってしまった、嬉しさで笑みがこぼれる。

その場で自分の世界に入ってしまった私が、気がついたのは久美子と冷夏に声を掛けられてからだった。

「安奈！ 確りするのよ！ こんな所で自分の世界に入っちゃ駄目よ！」

「フエツ？ あつ、久美ちゃん。それに、冷夏」

「あつじゃ無いわよ！ 急に逃げ出すから心配したら、何自分の世界に入っちゃってるのよ。心配して損したじゃない！」

「それより、私は呼び捨てなんですのね……」

呼び捨てにされた事が相当ショックだったのか、悲しげに冷夏は俯く。そんな冷夏を無視して私は笑いながら久美子に言う。

「ゴメン。でも、もう大丈夫だよ。ちょっと胡散臭い占い師のおか

げで」

「ちよつと胡散臭いつて……。私達頑張ったのに……」

「エッ？ 何か言った？」

久美子が言った最後の言葉が聞こえず私は聞き返す。それに、久美子が苦笑いを浮かべながら「何でもない、なんでもない」と言い、冷夏の顔を見合わせる。その表情から冷夏も振られたショックから立ち直れたんだと、私は嬉しくて笑みがこぼれた。

何だかんだで、三人とも元気になり友情が生まれた。でも、冷夏がこんなにも話しやすい人だったなんて……。結構意外だった。

安奈編 第十五通 彼氏？

色々あったけど、何とかショックから立ち直り数日が過ぎた。

大分、日が落ちるのも早くなり、空気も冷たくなってきた。もうすぐ冬が訪れるんだと言う風貌を漂わせている。

そして、今日は放課後から、サッカー部の練習試合があり、私はマネージャーとして走り回っていた。もちろん、後輩の桜と香澄も一生懸命働いていた。二人ともマネージャーの仕事も板につき、最初はあんまり話してくれなかった香澄も、今は積極的に話しかけてくれる。私としてはとても嬉しい事だった。

練習試合が終わった時には、既に辺りは真っ暗になり、随分と肌寒くなっていた。ジャージを着ているとは言え、中々その寒さはこたえた。その寒さに耐えつつも、私はサッカー部の後片付けをしながら、雅之にメールを送った。

『うつうつ。今日は疲れたよ』（泣） 何で練習試合なんかあるのよ！ でも、明日は休みだし、ゆっくり出来そう（笑）マサは、明日どう過ごす？』

メールを送って暫く経ち、私のポケットの中で携帯が震える。雅之からの返事が届いていた。私は作業を中断し、雅之からのメールを読む。

『実は明日文化祭で、今日は一人で居残りです（泣） 早く帰りたいよ』（泣）』

そっか、文化祭なんだあと、思いながら私はすぐに返事を送る。

『明日は文化祭なんだ。いいな』 でも、何で一人で居残りなの？

何か悪い事でもしたの？」

メールを送った後、すぐに返事が返ってくると思い、暫く待っていたが中々返事が返ってこないため、私はとりあえず片づけを再開した。いつまでも休んでいると、桜や香澄に悪いと思ったからだ。片付けを再開して暫くした後、携帯が震えた。

『別に悪い事した訳じゃないよ（泣） ジャンケンに負けて、それで居残り……（泣） 他にも残ってる人が居たけど、皆先に帰って結局一人……』

メールを見て雅之らしいと思い、クスクスと笑っていると背後から桜の声が響いた。

「安奈先輩、携帯見ながら何ニヤニヤしてるんですか？」
「うわっ！ ななな、何！」

殆ど不意打ちに近い感じで声を掛けられた私は、驚きのあまり声が裏返り慌てふためく。そんな私を見て香澄が言う。

「そんな事してると、怪しい人みたいですよ」
「そ、そんな事無いよ！ ぜ、全然怪しくないよ」

精一杯笑いながらごまかす私に、疑いの視線を送る桜と香澄は何かを閃いたのか、口元に笑みを浮かべ言う。

「もしかして、彼氏ですか？」
「ち、ちちち違っよ！ か、かか彼氏なんかじゃないよ！」
「顔が真っ赤ですよ。安奈先輩」
「もっう！ 違ったら、違っの！」

桜と香澄の二人にからかわれ、私の顔は真っ赤に染まり、体中が熱くなった。そんな私を見て、桜と香澄は大爆笑する。

「アハハハハッ。安奈先輩、嘘つくの下手なんですね」

「大丈夫ですよ。私達、誰にも言いませんから」

「だ、だから、彼氏じゃないって！」

「まあまあ、大丈夫ですよ。私達、結構口堅いですから」

そう言つと桜と香澄は後片付けを再開する。そんな二人を見ながら私は頬を膨らました。でも、すぐに雅之に返事を送ろうと携帯を見て笑みを浮かべた。

『大変だね……（汗） それにしても、無責任なクラスだね（笑）』

明日は暇だし、マサの学校の文化祭見に行ってみようかな？』

少し雅之の学校の文化祭に興味のあった私は、そうメールを送ったけど、本当は雅之に会いたかったからそうメールを送ったのだ。その後、暫く経って目メールが来なかったため、私は明日、雅之に会いに行こうと決意した。いきなり行ってビックリさせようと。

安奈編 第十六通 文化祭で出会った意外な人物

昨夜、最終の電車で実家に戻ってきた私は、今、とある高校前にいた。

雅之は初めて会ったあの駅から差ほど離れていない所に住んでいると前に話していたので、高校もこの付近だと推理したのだ。

そして、この付近の高校で今日、文化祭が行われているのは、この高校しかない。校門の前に立ち暫し喜びに胸を躍らせる。多くの人が立ち並ぶ出店に足を止める中、私は雅之にメールを送る事にした。

『実は今、マサの学校らしき所に来てます。アレからメールの返信が無かったから、結構探すの苦労したよ（泣）　それでさ、マサの教室ってどこかな？』

雅之を驚かせようと悪戯っぽくメールを送ったが、メールの返事は中々返ってこなかった。その為、私は校門前で雅之からの返事をずっと待ち続けた。目の前を通り過ぎるカップルが、美味しそうにソフトクリームを食べているのが見え、私も雅之と一緒にソフトクリーム食べたいなと、思った。

壁にもたれて空を見上げる私は、メールの返事が返ってこない事にため息を吐く。その時、聞き覚えのある声が――。

「あつ、鈴木じゃないか！」

その声が私に向けられたものと気付かずボーンとしていると、背丈の高い顔立ちの言い男が近付いてくる。なぜ、私の方に来るのか分からず、首を傾げる私にその男が、問う。

「なあ、君、鈴木 安奈だよな」

「そ、そうだけど……」

いきなり変な人に声を掛けられたと思った私は、とっさに身を縮め男と距離をとる。向こうは私を知っているようだけど、私は全く誰なのか分からなかった。

警戒する私に、明るく笑みを浮かべる男は優しい口調で言う。

「何、警戒してるんだ？ あつ、もしかしてお前俺の事忘れたんじゃないか？」

「忘れた？ って、言うか誰？」

「ハァーッ。やっぱりか……。同じ中学で、しかも三年連続同じクラス。それに、生徒会長と副生徒会長と一緒に頑張ってきただろ……」

……

同じ中学？

三年連続同じクラス？

生徒会長と副生徒会長？

この三つの言葉で私は少しずつ中学の記憶が蘇って来る。そして、その記憶の奥底で彼の顔を思い出した。

「アーツ！ 和彦君！ エッ、エエッ！ うわーっ、凄い久しぶりだね」

「いやいや、相変わらず男には興味が無いって感じたな」

「エーツ、そんな事無いよ。もしかして、私が女に興味があるんじゃないかって、思ってるんじゃないでしょうね？」

「中学の時、告白してきた同級生の男子を全員振っておいて、よく言うよ。卒業式前には噂になってたぞ、鈴木は女に興味があるって」
「ンーツ。そんな噂があつたんだ。知らなかった」

腕組みをしながら私は笑う。

和彦のフルネームは白羽 和彦。

確かに同じ中学でしかも、三年連続同じクラスになった事がある。あと、三年の時には和彦が生徒会長で私が副生徒会長を勤めていた。そのおかげで和彦とはよく話をした覚えがある。

和彦は見た目もよく、勉強もスポーツも出来るまさしく非の打ち所の無い存在。確か、中学の時に彼女が居て、高校が離れ離れになると彼女が大騒ぎをしていたのを強く印象に残っている。

その後、彼女とどうなったのか、気になった私はとりあえず聞いてみる事に。

「ねえ。その後、彼女とはどうなったの？」

「彼女？ アアーツ、春奈の事か」

そう言って笑う和彦は携帯を開いてその画像を私に見せる。そこには、可愛い女の子の顔がデカデカと映っている。

「今も、春奈とは付き合ってるぞ。例え遠距離になっても、二人の愛の深さには乗り越えられない壁は無いってやつだ」

「その台詞、ちょっとクサイよ……」

苦笑いしながらそう言った私に対し、和彦は嬉しそうに笑う。そんな彼を見ると、私も雅之とこんな風に上手くやっていけるかなど、思った。そんな私に何かを思い出したかの様に和彦が問う。

「鈴木は、こんな所で何してるんだ？ 確かお前の高校はここから随分離れてるだろ？」

「まあ、そうんだけど、ちょっと知り合いに文化祭があるって聞いて」

「知り合い？ この高校にか？ この高校にお前の知ってる女子は

居たか？」

和彦が首を傾げていると、私の携帯が震えた。私は雅之からだと思いつぐに携帯を開きメールを読む。完全に和彦が近くに居るのを忘れ、自然と微笑む。

『返事遅れてごめん。今、途中で中々、携帯見る事出来ないから……。暫くしたら、休憩入ると思うから、その時メールするね』

やっと届いたメールに嬉しさもあつたが、仕事の邪魔をしてしまったと思い、申し訳なく思った。でも、暫くしたら休憩に入るとあつたので、もう暫く待てば会えるんだという気持ちで、返事を送った。

『仕事中だったの。ごめんね。それじゃあ、休憩時間になったらメールしてね』

メールを送り終えた私が和彦の方を見ると、和彦が怪しむような目線を送っている。私は雅之の事がバレちゃまずいと思った。なぜ、そう思ったのか分からないけど、何とかごまかそうとした。でも、和彦のその視線に戸惑い私はあたふたしながら、何か言わなくてはと口を開く。

「い、いい今は、お、おお女友達からだよ」

「相変わらず、嘘が下手なんだ……。それに、女友達からのメールなら、普通に友達って言えばいいだろ。女の友達って言ったら普通は女だっと思って考えるんだから……」

「あっ……」

正論を和彦に言われた気がして、私は顔がカッと熱くなる。急に

恥かしくなり頭の中が真っ白になる。まずいよ、まずいよ！　なんて言葉が真っ白な頭の中を駆け巡り始め、私は更に焦る。そんな私の顔をチラッと見た和彦は何やら心配そうな顔をするが、私にはその表情を確認する余裕など無かった。そんな真っ白な私の頭の中に和彦の声が響く。

「それで、この高校にそのメールの相手が居るのか？」

「ち、ちち違うよ！　こ、こここの高校には居ないよ」

「そうか。この高校にその男のメール相手が居るのか。フムフム」

「だ、ただだから！　め、めめメールの相手は、お、男じゃないし、この高校でも無いよ！」

焦れば焦る程ボ口を出す私に、和彦は腕組みをしながら呆れ顔で私を見る。こんなに嘘の下手な奴が居るんだなと言う感じの視線を送る和彦に、私はもう逃げ切る事は出来ないと思い、とりあえず全てを話す事にした。だが、どこから話して言いか分らず、黙り込む私に和彦が質問する。

「鈴木がどんな男と付き合おうが知った事じゃないが、この高校はろくな連中ばかりだぞ？　大丈夫か？」

「ま、マサは、大丈夫だもん！　確かに勉強やスポーツが苦手かもしれないけど優しいし——」

和彦の言葉に私はとっさにそう言っていた。まるで子供の様にそう言う私に、ため息を吐く和彦は何やら考え込む。ムスツと頬を膨らます私に「うーん」とうなり声を上げて考え込む和彦は右手の人差し指で額をトン、トン、トンと叩く。和彦は中学の頃から考え込むところする癖があるらしい。そんな和彦に私は少し不安になる。まさか、雅之が高校では物凄い悪で暴れまわっているとかいう想像が頭に過ぎり、それを振り払おうと頭を激しく左右に振る。そんな

私に和彦が怪しむように声を掛ける。

「お…オイ、何してるんだ？ 鈴木」

「エッ！？ べ、別に何もしてないよ」

苦笑しながら私はそう答える。そんな私に和彦が何やら表情を和らげながら言う。

「鈴木の言うマサって言うのが誰か分かったぞ。まあ、何と無く鈴木が好きになる理由が分かるよ」

「べ、べべ別に好きって訳じゃないよ！」

「嘘がバレバレだぞ……。しかし、ユキの方はそんな嘘にも気付いてないんだろうけどな」

「ユキ？ 何言ってるの？ 私はマサって言ったのよ」

「何だ？ 知らないのか？」

何やら不思議そうな表情を見せる和彦に、私は数歩後ずさる。

そして、和彦は何やら自慢げな表情で私に言う。

「雅之は、マサって呼ぶ奴と、ユキって呼ぶ奴が居るんだ。だから、俺はユキって呼んでるわけさ」

「へーっ。でも、普通はマサじゃないの？」

「驚かないんだな。俺がお前の好きな奴の名前言ったのに」

「エッ！？」

その言葉に私は一瞬にして頭の中が真っ白になる。思考回路が爆発したのか、考える事など出来ずただあたふたとするしかなかった。「ちっち違っよ！」と、私は叫びながら両腕を激しく振るが、その姿が余計に怪しく私は嘘をついていますと言っているみたいだ。

そんな私の姿に呆然とする和彦は、ため息を吐いて額に右手を当

てた。

慌てふためく私は、ポケットで携帯が震えるのを感じ、慌てながらも携帯を見た。そこには『マサ』と名前が映っていた。私は、一瞬にして正気に戻り、今まで慌てていたのが嘘の様に落ち着きを取り戻していた。深呼吸を三回し、私はゆっくりとメールを読んだ。

『やっと休憩に入りました。もしかして、もう帰っちゃった？』

私はこのメールを読んだ瞬間、『やっとマサに会える』と言う期待に胸を躍らせる。そんな私を見ながら微笑む和彦は、まるで私と雅之が結ばれてくれるように望んでくれているようだった。そしてメールを打つ私に和彦が聞く。

「それで、ユキとはどうやって知り合ったんだ？」

「エッ？ どうやってって……。そりゃ、運命的な出会いが……」

よく考えると二人の出会いが、間違いメールからだなんて普通はありえない事だよと、思いその事は言わない事にした。「ふーん」と軽く相づちを打つ和彦は複雑そうな表情を見せる。それが、何故なのか分らず私は不安になる。そんな私に和彦が、笑いながら答えた。

「あゝっ、心配するなよ。ただ、鈴木とユキがどう言う感じで知り合ったのか気になったただだから」

「本当に、それだけ？」

「ああ。それだけだ。全く、お前もユキも色々似た部分があるかな……。大体、そんなに心配なら早くユキに気持ち伝えたらどうだ？」

その言葉を聞いた瞬間、私は焦り携帯を落としてしまった。慌て

て携帯を拾うが完全に動揺しているのが丸分かりだった。
動揺する私に和彦は呆れた表情を見せながら言う。

「そんなに動揺するなよ。全く……」

「じゃあ、動揺させるような言葉を言わないでよ」

私は弱弱しくそう言い返しメールの返事を送った。

『まだ、帰ってないよ。まだ、見てない所とか一杯あるから。それにしても、お腹空いたな』。と、言うわけで一緒に昼食でも食べようよ。私、校門前で待ってるからね』

そのメールを送った直後、和彦が落ち着いた感じで言う。

「それから、今までの話は全て無かった事にな」

「エッ？　どう言う事？」

意味が分からず首を傾げる。そんな私に、ため息交じりの声で言う。

「ほら、俺がお前とこんな所で長い間話してたら、ユキがこの二人付き合ってるんじゃないかとか、勘違いするだろ？」

「そうかな？　今時、そんな事思う人いるかな？」

「そこらへんが似てるって言うんだよ。鈴木だって、ユキが同級生の仲の良い女子生徒と、自分が居ない間に長話していると、この二人実は付き合ってるんじゃないかと思うだろ？」

「うーん。確かに……」

あのメール事件の事を思い出し不覚にもそう思った事があったな
と思いかえる私。渋い表情をする私に対し、明るく笑いかける和彦

は言う。

「だから、俺はマサなんて知らないし、お前も俺がユキと知り合いだと分らない、丁度今会ったばかりと言う設定で、話を進めるぞ」
「分かった」

そう言うて頷いた私の視界に、立ち尽くす雅之の姿が映る。私はハツとしすぐに笑みを浮かべながら手を振り叫ぶ。

「あつ、マサ！」

「マサ？」

物凄く上手い演技の和彦は、マサって誰だって言う感じで微笑みながら振り返る。

そして、雅之と和彦の視線がぶつかり言葉を交わす。

「マサって、ユキの事だったのか」

「和彦君、マサと知り合いなの？」

微笑む私は内心『演技下手くそ』と、自分の事を馬鹿にしていたが、それを和彦が上手い具合にフォローする。

「ああ、一年の時に同じクラスでな。って言うか、俺的に鈴木がユキと知り合いだって事が、ビックリだぞ」

「エヘヘヘッ。ちよっとね」

私も和彦も笑いながら雅之の方を見る。未だに一言も話さない雅之に、不安になりながら。

安奈編 第十七通 ヤキモチ

雅之は私と和彦の会話に中々入って来ない。それどころか、何やら慌てている様な表情をしている。

内心、『どうにかしなくては』と、焦る私はパニックに陥りどうして良いのか分からなくなっていた。そんな私を見かねてか、和彦の方が雅之に説明する。

「俺と鈴木は同じ中学でさ」

「同じ中学……。そ、そうなんだ」

この日初めて聞いた雅之の声。何だか迷いがあり少し震えている感じがした。

それでも、雅之の声が聞けて私は嬉しさで、我を忘れていた。いわゆる、自分の世界に入ってしまったと、言う事だ。暫し沈黙が続き、自分の世界から戻ってきた私は、ハツとして口を開こうとした。その時、何処からとも無く女子生徒の声が響き、足音が響く。それに、気付いた和彦は笑いながら言う。

「やばっ！ それじゃあ、俺はこれで」

右手を顔の横で軽く振り、和彦は足音とは逆の方向へ走り出す。その後、大勢の女子生徒が私と雅之の目の前を通過し和彦の後を追いかけて行く。何という凄い追っ駆け何だと、思いながら私の口は自然と言葉を発していた。

「やっぱり、和彦君はモテモテだね」

私はそう言い雅之に微笑むと、雅之は何やら焦りながら相づちを

打った。

「そ、そうだね」

やっぱり、私と和彦が付き合ってると思っているのだろうか？と、私は不安になったが、それを忘れ去れる位楽しめば何とかなるはずだと、思った。

お腹の空いていた私は、雅之と出店を暫く見て、近くで売っていた焼きそばを買って食べた。味が薄く、正直あんまり美味しくないその焼きそばに本音が口から出てしまった。

「うーん。ちょっと味が薄いかな」

「確かに、味が薄いよ。これで、300円はちょっと……」

私の言葉に雅之はそう答えながら、焼きそばをすすっていた。焼きそばを食べる雅之の顔を見た私は、いつか私の作った料理を食べさせて上げたいと思った。そんな私の視線に気付いたのか、雅之が私の方に顔を向ける。視線がぶつかり、ドキッとした私はとつさに視線を逸らす。胸が張り裂けそうな程大きな鼓動を立てている。そんな私に、雅之は優しく言葉をかける。

「あのさ。中庭で生徒会が美味しい豚汁を販売してるらしいんだ。行ってみない？」

「そ、そうだね。行きましょ」

雅之に軽く了承に、私と雅之は中庭へと足を進めた。しかし、中庭には大勢の客が集まっており、先が見えないほどだった。そんな列をみた私は、驚きのあまり言葉を漏らした。

「結構、行列だね」

「そうだね。どれ位並ぶかな」
「時間かかりそうだね」

行列の先を見据える私の声に雅之がトントんと相づちを打つ。
その後、暫く列に並んでいた私と雅之だったが、全くと言う程列は進まなかった。

「中々、進まないね」

「そうだね。豚汁は諦めようか？」

「うん。そうね。折角だけど、今回は諦めようか」

私は残念だったが雅之と他の所も回ってみたかったので、豚汁は諦める事にした。

列を出る時、何やらキョロキョロとする雅之は、ホッと息を吐き列から抜けた。私もその後が続いて列から出た。その時、背後から雅之を呼ぶ声がした。その声は、透き通る様な女の子の声だった。

「倉田君」

振り返る雅之は、その声の主と顔を合わせる。私もすぐに振り返りその子の顔を見る。そこには、三つ編のメガネをかけた可愛らしい女子生徒が、エプロン姿で立っていた。その娘を見た瞬間にハッとした。雅之が話していた娘は彼女じゃないのだろうか。

心の中で、私は静かなる闘志を燃やしながら彼女の顔を見つめた。そんな彼女は何事も無い様に雅之に言う。

「豚汁を食べに来たんですか？」

「ええ……。でも、列進まないんで、他に行こうかと……」

「そうですか……。残念です」

本当に残念そうな顔でそう言うエプロン姿の女子生徒と私は目が合った。

その瞬間、私はこの娘にだけは負けたくないと言う気持ちになった。

雅之は笑いながらその娘に私を紹介する。

「僕のメル友の鈴木 安奈」

「マサのメル友の鈴木 安奈です。よろしくね」

笑顔でそう言って頭を下げた私だけど、少しショックだった。本当は、嘘でも彼女ですと言って欲しかった。

私が頭を上げると、今度はエプロン姿の女子生徒を私に紹介する。

「同じクラスの篠山 美樹」

「篠山 美樹です」

美樹も私にお辞儀する。ちょっと、複雑そうな表情が伺えたが、それは私も同じだった。

その後、美樹と色々と話たが、何を話したのか私は覚えていない。いつの間にか中庭を後にしていて、雅之と屋台を回っていた。

安奈編 第十八通 勉強会

雅之と楽しんだ文化祭も終わり、もう中間テストの季節になった。私の高校では皆、テスト期間と言うのにのん気にお喋りや携帯をいじって遊んでおり、緊張感が全く無い。

たぶん、授業をちゃんと聞いて予習復習してるから、テスト期間でもこんな余裕をもっていられるのだろう。

一方で、全く余裕の持てない人物も……。

「安奈っつ。たすけてっつ」

「久美ちゃん。テスト前になると、いつもそれだね……」

「お願いします。安奈様。お助けください」

両手を合わせ、必死に頭を下げる久美子に、私は断る事は出来なかった。

放課後、久美子と私の部屋で勉強をする事になったが、いつの間にか和美と冷夏まで一緒になっていた。まあ、和美と冷夏が居れば、きっと私も久美子に教えるのが楽になりそうだ。

「皆オレンジジュースでいい？」

「私は、何でも良いよ。おまけにおやつとかあれば——」

その直後、久美子は頭を思いつきり和美に叩かれた。頭を押さえる久美子を見ながら、腕組みをする和美は呆れた様な声で言う。

「あんた。勉強しにきたのに、何図々しい事言ってるのよ」

「そうですわ。中学の時と何にも変わってないんですのね」

「だって……。お菓子があれば勉強も楽しく出来るでしょ？」

和美と冷夏の言葉に、無駄な抵抗だと分かっているのに久美子はそう言う。その直後、また頭を叩かれた。コップにオレンジジュースを注ぎながら、私はその光景を見て笑っていた。と、言うか久美子は中学時冷夏の家で勉強を教わっていたんだと思った。

その後、四人でテーブルに並んで勉強会が始まった。始めは皆真面目に取り組んでいたが、徐々に皆集中力が途切れ始める。

「安奈。あのメル友とはどうなってるの？」

「へっ？ どうしたの急に」

いきなりの質問に焦り苦笑いを浮かべる私。三人の視線が私に集まり、私は表情を引き攣らせる。何だか、三人とも私と雅之の事が気になるようで、目をキラキラと輝かせている。何とかこの場を切り抜けようと、私は必死に考え言葉を発言する。

「は、早く勉強しなきゃ、明日のテストに間に合わないよ」

「大丈夫ですわ。明日のテストで危ないのは久美子さんだけですもの。それよりも、あなたの恋の行方が気になりますわ」

「そうよ。明日のテストで危ないのは、私だけ——……って、ちょっと待て！ 私だけなの、明日危ないの」

自分の置かれた状況に気付いたのか、久美子が大声で叫ぶ。だが、和美も冷夏もそんな事無視して私に詰め寄る。その目は、『早く言った方が楽になるわよ』と、言っている様だった。少しずつ後退する私はタンスに背中をぶつけ、逃げ場を失った。

不適に笑みを浮かべる和美と冷夏は、逃げ場を失った私に言う。

「さあ。早く教えなさい。あのメル友とはどうなったわけ？」

「べ、別にどうもなつてないよ」

「あら？ あれから、発展がないと言う訳ですの？」

「そつだよ。あれから、全く発展はないよ」

「な〜んだ。つまんないな〜」

和美と冷夏は、私が雅之と発展が無いと言う事を聞くと、残念そうな表情で自分の座っていた場所に戻る。ホッとする私は、ふいに携帯を手にかけていた。

そして、雅之にメールを送っていた。雅之達の学校もテスト期間中だと何と無く分かっていたが、メールを送っていた。

その後は、静かに勉強会が進み、私は中々返ってこないメールの返事に不安になり、隙を見て何度も雅之にメールを送っていた。

勉強会が終わり、私は後片付けをしながら雅之にもう一度メールを送った。これで、返事が来なかったら今日はもうメールをしないつもりで。

『おい。マサー。寝てるのかー？ 起きてたら返事、返してね〜』

殆ど諦め気味で送ったそのメールに、暫くして返事が返ってくる。

『ご、ごめん。もうすぐ中間テストが近いからさ。僕の家で勉強会してたんだ。だから、メール届いているの気付かなかったんだ』

そのメールを見て、私は『マサも私と同じ様に勉強会してたんだ』と、思い何だか嬉しかった。

でも、私はこのメールである事を思い出した。それは、一学期の期末テストの事だ。確か、あの時は私とのメールが原因で補習になったのだ。

そう思った私はすぐにメールを送った。

『な〜んだ。そうだったの。私こそごめんね。そんな事とは知らないで、何通もメール送って……。もしかして、今も勉強中だった？
だったらごめんね』

『別に、安奈が謝る事ないよ。すぐに返事を返さなかった僕が悪いんだから』

私のメールに対してすぐに返事が届く。この内容を見てみると、雅之の表情が何と無く私の頭の中に浮かんだ。無邪気に笑いながらこんなことを言うんだらうなって、感じる。

そんな一人妄想を張り巡らせながら、私は雅之にメールを送る。

『それじゃあ。私はマサの勉強の邪魔しないように、今日は静かに読書をしたいと思います。と、言う訳で、今日のところはおやすみなさい。勉強頑張ってね』

雅之にそう応援メールを送り、私はテーブルの上を片付ける。片付けを終え、時計を見た時、ふと雅之の勉強する姿が頭の中を過ぎる。机にうつ伏せになり眠りこける姿が。

私は、雅之が本当にそうなってるんじゃないかと思い、すぐにメールを送った。

『マサ！ まだ、寝ちゃ駄目だよ。確り勉強して赤点から脱出だ。ガンバ』

雅之が本当に寝ていたか分からないが、何だか雅之の力になれた気がして嬉しかった。その後、私も教科書を読み直し暫くしてベッドに入った。

安奈編 第十九通 風邪

中間テストが終わり、私は風邪をこじらせベッドで寝込んでいた。頭はクラクラするし、席は止まらず喉が痛い。

そんな朦朧とする意識の中で、私はふと雅之の事を考える。私が風邪引いたの知ったら、雅之心配してくれるかな。なんて、思いながら「ゴホゴホ」と、咳をする。風邪薬を飲んだのに、そんなに早くは効果が無いらしい。その後、私はいつの間にか眠りに就いていた。

眠りに就いて暫くして、私は久美子と和美の声で目を覚ました。体中汗だくで、着ていたパジャマは汗で体に張り付いている。そんな私の顔を心配そうに見つめる久美子と和美は、優しい声で言う。

「大丈夫か？ 随分魔されてたけど」

「怖い夢でも見てたんだよ」

「怖い夢？」

久美子にそう言われ、私はふと夢の内容を思い出す。その瞬間、顔が熱くなり更に熱が上がった気がした。

顔を真っ赤にする私を見た久美子と和美は顔を見合わせ首を傾げる。そして、何やら怪訝そうな表情をしながら私の事を見つめる。その目は『どんな悪夢を見てたんだ』と、言う様で私は澁々と自分の見ていた夢の話をする。

「実は、夢の中でマサに告白されるの」

「ほーッ。告白ですか。全く持って羨ましいですな。って、言うかどこに魔される要素があるんだ！」

「お前は、黙ってる！」

私に怒りの声を上げた久美子の腹部に和美の拳が突き刺さる。その一撃で久美子はその場に蹲り暫く動けなくなった。

苦しむ久美子を横目に、和美は私に話の続きを話すように言う。

「それで、その後はどうなるんだ？」

「その後、口では言えない様な事が……」

「な、なな何！ 夢の中であんな事やこんな事を！」

「多分、和美ちゃんの思ってる事じゃないと思うよ」

顔を真っ赤にする和美に私はそう言い、ため息をつく。そんな私に更に顔を真っ赤にする和美は、顔を激しく振り自分の中に浮かんだ想像を振り払う。

私はそんな和美の姿を見て微笑む。

顔を真っ赤に染める和美は息を荒げながら微笑む私に問う。

「そ、それじゃあ、口では言えない事って何！」

「えっ、その……。キ……キ……キス釣りを……」

その瞬間、辺りに冷たい風が吹き抜けた感じがした。暫く、眉を細める和美が、表情を引き攣らせながらせせら笑う。私も自分で言った事なのに、体中に鳥肌が立ち、苦笑する。

暫く、沈黙が続き和美が呆れた声で私に言う。

「わかった。わかったから、そう言うボケはやめろ。安奈には似合わないし、大体、そう言うのは久美子の担当だ」

「別に、ボケたつもりは無いんだけど……」

「それで、キスの後は何があったんだ？」

「その後、マサが事故にあって……」

「あんだ、凄い夢見るんだな。まあ、ただの夢だし気にする事ないさ」

笑いながらそう言った和美は、苦しむ久美子の背中を叩いていた。その後、二人が帰り、私は汗で濡れたパジャマを着替えてもう一度ベッドに入った。でも、何だか眠る事が出来ず、右手には携帯を握っていた。雅之とメールがしたくしょうがなかったのだ。暫く悩みに悩んだ末、私はメールを送る事にした。

まだ、クラクラする頭でゆっくりとメールを打ち込んだ私は、すぐに送信した。

『うっっ……。辛いよ。実は、今日風邪で寝込んでます……。とっても苦しいよ。折角の休みなのに……。』（泣） 気持ち悪いよ』

そんな内容のメールを送った私は、暫く目を閉じてメールの返事が来るのを待った。目を閉じると、やたらと周りの音が耳に聞えてくる。私の部屋の前を通る足音や、蛇口からたれる水の音とか、そして、私の携帯の着信音とか。

着信音！？ 少し驚き気味に私は携帯を手に取り開く。そこには、マサと書いてあり、雅之からのメールが届いた事がわかった。

『風邪か……。季節の変わり目は、風邪引き易いからね。でも、メールしてて大丈夫なの？ ゆっくり寝てた方がいって』

この内容のメールに、雅之が私を心配してくれてるんだなと、思った私だが、少し寂しい感じもしていた。もつと雅之とメールをしたかったからだ。休みの日に風邪を引くなんて……。

少し落ち込む私はため息を吐き、ゆっくりとメールの返事を返す。

『ありがと。今日はゆっくり、休みます……。元気になったら、

メールするね……。マサも風邪には気をつけてね』

少し寂しさを込めたこの内容のメールを送った私は、そのまま目を閉じ体を休めた。雅之と早くメールがしたかったから。

安奈編 第二十通 誕生日

風邪が治り数日後、私は朝早く目が覚めた。

窓がカタカタと風で揺れ、外はもう冬景色だ。

パジャマのままの私は、素早くベッドから立ち上がり、軽く伸びをして眠気を吹き飛ばす。そして、おもむろに机の上の携帯に手を伸ばし、胸を躍らせながら雅之にメールを送る。朝早くから迷惑だと言っのを全く感じず、私は自分の喜びを雅之にいち早く伝えたかったのだ。

『ヤッホー！ 今日朝からハイテンションです。何故かと言うと今日は私の誕生日なんです。私も遂に17歳に、大人に向って一歩前進♪』

自分が17になった事を伝えたかったのではない。雅之に誕生日おめでとうの一言を言ってもらいたくてそう送ったのだ。返事を待つ間に、私は顔を洗いに洗面所に向う。冷たい水で軽く顔を洗い、歯を磨いていると着信音が鳴る。もちろん、雅之からのメールだ。私は歯ブラシを銜えたまま机の上の携帯を手に取り、雅之からの返事を読む。

『誕生日おめでとう。そっか今日が、安奈の誕生日だったのか……。全然知らなかったな』

そんな雅之のメールに、私は首を傾げる。誕生日を雅之に教えた覚えがあつたが、それは私の気のせいだったのだろうか？ と、考え込んでいた。

暫く考えたが思い出す事も出来ず、私は雅之にメールの返事を返す事にした。

『あれ？ 教えてなかったっけ？ 確か教えた覚えがあっただけど……。私の勘違い？ やっぱり、歳かしら？ 物忘れが激しいわ（笑）』

少々冗談交じりのメールを送った私は、すぐさま朝食の準備に取り掛かる。フライパンに油を敷き、その上に卵を割り落す。綺麗に黄色の黄身が白身の真ん中で止まるのを見届け、私はフライパンにふたをする。暫し、弱火にして卵全体に火が通るのを待つ私は、着信音に気付きその場を離れる。携帯を片手に握る私はすぐに雅之からのメールに目を通す。

『歳って……（汗） 17になったばかりじゃないか……』

「そうだよな。私、17になったばかりじゃない。うんうん。まだまだ、これからだよ！」

雅之のメールに独り言を呟く私は、天井を見上げながら拳を振り上げていた。誰かに見られてたら恥かしいな、と思いながら私は赤面しすぐさまフライパンの卵を見に行く。

その後、朝食の準備を済ませてから、雅之への返事を返す。

『そうだよな。17になったばかりかだもんね。まだまだ、若いよ（笑） それじゃあ、今日も一日頑張ろう！』

お互いに今日一日頑張ろうと言う気持ちを含め私は雅之にメールを送った。朝からハイテンションの私に、雅之はと言う事を思ってるんだらうと、私は思いながら朝食を口にしていた。やっぱり、朝からあんなにテンションが高いと、迷惑かなと思っていると、雅之からのメールが届いた。

『それじゃあ、また後でメールしようね』

「やっぱり、迷惑だったかな。今度からは気をつけなきゃ」

メールを見ながら私はそう呟き、携帯を閉じて朝食を食べた。

その後、やる事を全て済ませた私が、部屋を出ると笑顔で久美子が出迎えてくれた。

「おはよう。今日は安奈の誕生日だね。例のメル友、プレゼントなにくれるかしら？」

「あつ、その事だけど……」

苦笑する私に久美子は少々首を傾げる。そんな久美子に、今朝のメールの事を一部始終話すと、驚き呆れて最終的にため息を吐きながら首を左右に振っていた。

その後、学校まで久美子は幾度と無くため息を吐き、私の顔を見て呆れたように笑みを浮かべていた。

私と久美子が教室に着くと、既に和美と冷夏が私と久美子の事を待っていた。他にも数人の人が居るが、この時間はやっぱり人が少なく、とっても静かで少し不気味だ。私はひんやりする椅子に鳥肌を立てながら、自分の席に座った。

そんな私に、和美と冷夏が笑みを浮かべながらプレゼントを差し出す。

「誕生日おめでとう」

殆ど同時にそう言う和美と冷夏に、私は感激の涙を流しそうだったが、それを堪えプレゼントを受け取る。友達に誕生日を祝ってもらえる事がとても嬉しかった。去年は、誕生日を教えてなかったため、久美子にも和美にも祝ってもらえず悲しい思いをしたが、今年は今までで一番嬉しかった。

プレゼントを受け取った私は、何度も二人に「ありがとう」と、頭を下げていた。そんな私に和美が言う。

「私からのプレゼントは写真立てだ。まあ、メル友の奴ととった写真でも飾るといいさ」

「ありがとう。でも、マサとはまだ写真とった事無いから、飾るのはまだまだ先になっちゃうね」

「私は、今流行の香水なのよ。きっと、安奈さんも気に入ると思うわ」

「あ…ありがとう……」

香水を見て私は少し固まった。実はあんまり香水の匂いが好きじゃない私は、香水とかには全く興味が無かった。

でも、冷夏が私のために選んでくれたプレゼントなので、近い内に一度ためしにつけてみようと思った。

安奈編 第二十通 誕生日（後書き）

安奈編も早二十通に……。番外編と言ってますが、殆ど安奈編に変貌しつつありますね。

これは、番外編としては無く安奈編として、連載したほうが良かったかもと、思いつつも楽しく物語を見守っております。

ご愛読してくださる皆様には、色々と評価や感想を頂き、こんなにも『間違いメール』を楽しみにしてくださる方がいるんだと心にジンときています。

それでは、長い後書きになりましたが、これからも『間違いメール 番外編』をよろしく願います。

安奈編 第二十一通 プレゼント

和美と冷夏からもらったプレゼントを、大切に鞆にしまい私は席を立った。既に、時計は四時を回っており、授業は全て消化していた。しかも、今日はサッカー部の練習も休みとあつて、私は寮に帰って早く雅之とメールがしたいと、胸を躍らせている。

そんな私の姿を見ながら、和美と冷夏は多少呆れた表情を見せているが、今の私には他の人の表情など目に入らない。

「安奈。少し浮かれすぎだよ」

「そうかな？」

「そうですね。何だか……不気味ですわ」

「えゝっ。私はいつもと変わらないって」

微笑みながらそう言う私に、怪訝そうな表情を見せる和美と冷夏は、ほぼ同時にため息を吐く。

そんな二人と一緒に寮へ向う私。冷夏は最近寮で生活するようになり、たまに私や和美と一緒に帰宅する事がある。そして、今日がそのたまにの日なのだ。

一人浮かれる私は鼻歌を歌いながら和美と冷夏の少し前を歩く。その時、二人が寮の前に居る怪しい男を見つける。黒い学ラン姿のその男は、何やらソワソワと落ち着かない様子で寮の前に居る。私は、男の顔を見てすぐに声を上げようとした。

「あつ！ モガモガ！」

声を上げようとした私の口を塞いだ和美と冷夏は、曲がり角に身を隠しその男をチラチラと見る。

口を塞がれ喋る事の出来ない私は、必死に二人に声を掛けようと

するが二人は全く聞く耳を持たない。

「怪しいぞ。あの男」

「す、ストーカーじゃないですか？」

「それなら、私がぶっ飛ばしてやるぞ！」

私の口から手を放した和美は指の骨をボキボキ鳴らしながら、男を見据える。

今にも殴り掛かりそうな和美の肩を掴んだ私は、焦りながら言う。

「あれ、マサだよ。私のメル友の」

「なっ！ あれが、安奈のメル友か！」

「凄く怪しいんですが……」

ソワソワとする雅之の方を見る和美と冷夏は、変な物を見る目をする。確かにあのソワソワとした動きは、少しばかり怪しいが私はそうは思わなかった。どちらかと言えば、私に会いに来てくれたんだと、言う気持ちになり笑みをこぼす。

冷たい視線を送る和美は私の肩を叩き、残念そうに首を縦に振りながら言う。

「安奈。残念なお知らせがある」

「何？」

「あいつは駄目だ」

「駄目って何が？」

「あいつじゃあ、安奈に不釣り合いだ。残念だがここで奴との縁を――」

目を輝かせ、雅之を追っ払おうとする和美の体を、私と冷夏は必死に押さえつける。女の子とは思えない力を発揮する和美に、少々

手間取ったが私は何とか和美を説得する事に成功した。和美も私の言葉に多少物言いがあがある様だが、それは全て却下された。

納得がいかないと不貞腐れた表情を見せていた和美は、その後、冷夏に連れられ雅之の目の前を通過して寮に入っていた。冷夏はクスクスと笑いながら雅之を見ていたが、和美の方は物凄くにらみつけていた。あれで、和美も私の事を心配してくれているのだ。まあ、あのストーカー事件もあつたから、和美は私にもっと頼もしい人と付き合つて欲しいといっていた。雅之は、どちらかと言えば頼もしくは無い方だと、私はかんじている。

そんなこんなで、和美の事を思いつつも、私は高まる鼓動を沈めゆっくりと雅之の方に近付き、あたかも今気付いたといわんばかりに声を上げる。

「マサ！？ エッ、どうしたの？ こんな所まで」

「いや、誕生日だって、言つてたから……」

「そうだけど、学校どうしたの？」

恥かしそうに笑みを浮かべる雅之にそう言つた私は、本当は嬉しくて雅之に飛びつきたかつたが、そこは堪えて雅之の顔をジッと見る。

暫くたち、雅之は全く私に返事を返さない。それどころか、私の顔をジッと見つめたまま固まっているのだ。あんまり雅之が見つめるので、私は恥かしくなり雅之の頭をバッグで叩き言う。

「ねえ、聞いているの？ マサ」

「き、聞いているよ……」

慌てふためく雅之も見ながら、私は小さく「もう……」と呟き息を吐き雅之に微笑んだ。

そして、これからどうするかを考えた。流石にここで立ち話は迷

惑だし、そのまま返すと言うのも、折角きてくれたのに悪いと思い、私は部屋に招きいれようと思いついた。別に、寮に男の人を入れてはいけないと言う規則は無いので、私はためらいも無く雅之に言う。

「それじゃあ、私の部屋行こうか。ここで、立ち話もなんだし」
「エッ!? で、でも……」

私の言葉に驚き口ごもる雅之に、私は強気な姿勢で言う。

「私の部屋じゃ、不満?」
「いや……。そんなつもりじゃ……」

俯きながらそう言う雅之を、強引に丸め込み私は部屋へ招きいれた。別に部屋が散らかっているわけでもないし、見られて困るものも無いため、雅之をテーブルの前に座らせて冷蔵庫に向う。
初めて男の人を部屋に入れ、私は少し緊張していたが深呼吸をして心を静め冷静さを保ちながら雅之に訊く。

「マサは何か飲む?」
「ぼ、僕はいいよ」
「遠慮しなくていいよ」
「で、でも……」

緊張しているのか、少し堅い表情の雅之は遠慮がちにそう言う。
そんなはつきりしない雅之に、ため息交じりに私は言う。

「もう……。ハッキリしないな」
「ごめん……」
「それじゃあ、オレンジジュースでいいよね」
「う……うん……」

半ば強引に雅之にオレンジジュースを出した私は、テーブルの前に座り雅之の方を見る。

そして、不意に気付いた事を訊いてみた。

「ねえ、どうして私がこの寮にいるのわかったの？ 教えてないよね」

「う、うん。和彦に聞いたんだ。どうしても、プレゼント渡したくて……」

「プレゼント？」

雅之の言葉に首を傾げる私は、雅之の事をジッと見つめる。今の今までプレゼントらしきものは無かったが、何をプレゼントするのだろうと、思いハツと頭の中に閃く。

もしかして、『プレゼントは僕自身だよ』なんて、言うんじゃない。完全に自分の世界に陥る私に、雅之頭を下げながら言う。

「ごめん。プレゼント……」

その雅之の言葉に正気に戻った私は冷静な口ぶりで言う。

「いいの。別にプレゼントが欲しくて、マサに誕生日だって教えたんじゃないんだから。ただ、祝って欲しかっただけだから」

もちろん、雅之がプレゼントを持ってきてなかった事は大体予測していた。朝、誕生日だと伝えてすぐに用意できるものじゃないと私は思う。それに、雅之が「僕自身がプレゼント」なんて、言うわけもないと思い、妄想はそこで終了した。

でも、雅之が私のためにここまで来てくれたことが、私にとってのプレゼントだったとは、流石に本人には言えず甘えるように私は

言う。

「でも、来年はプレゼント欲しいな」

「わ、わかってるよ。来年は、絶対買っておくから」

この言葉を聞き、私はホッとした。来年もこうして雅之に祝ってもらえるんだと――。

その後、色々な話をして私達は盛り上がった。特に、雅之の話は健介と言う友達の話ばかりだった。きっと、仲の良い友達なんだと私は思った。

安奈編 第二十二通 置き去りの携帯電話

早朝から学校の体育館に私は居た。

足元には大きな旅行鞆が置いてあり、周りは他のクラスの生徒達が大勢居る。

実は今日から修学旅行で、沖縄に行く事になっている。初めて行く沖縄に私は暫し胸を躍らせていたが、今は一人孤独と戦っていた。自分のクラスが何処に並んでいるのか、はつきり分からなくて、体育館をさまよっていたのだ。キョロキョロする私は、背後から聞えた久美子の声に振り返った。

「ちよつと！ 安奈、何やってるのよ！」

「久美ちゃん。探したんだよ」

「探したってね……。ここは、一組から四組の集まる場所でしょ！ 私達は五組、集まるのは中庭よ！ 大体、何回携帯鳴らしたと思ってるのよ！」

「エッ？ 携帯、一度も鳴ってないよ」

私は笑いながらポケットに手を入れる。暫く考え、鞆を探る。携帯が何処にも見当たらず、私は朝からの行動を一から思い出す。

朝、目を覚まし顔を洗い歯を磨いた後、シャワーを浴び制服に着替えた時は、携帯はテーブルの上に置いてあり、雅之にメールをしようと思い携帯を取り、時計を見て――。この瞬間、私は大きな声を上げた。携帯が何処にあるのか思い出したのだ。

「アーツ！」

「ど、どうしたの？ 急に大声上げて」

「ど、どどどどうしよう！」

慌てる私は上手く舌が回らず、言葉が上手く出ない。他の生徒はそんな私の方に視線を送るが、今はそんな事を気にしている場合では無かった。

そんな私に、久美子は少々呆れながら言葉を発する。

「あーっ！ 五月蠅い！ って、言うか落ち着け！」

「ご、ごめん。そ、それより、大変だよ」

「当たり前でしょ！ もう、私達の乗るバス出発するんだから、こんな所で油を売ってる場合じゃないの！」

「エッ、そうじゃなくてさ」

「さあ！ 行くよ」

私の言葉など聞かず、久美子はさつと腕を掴み走り出す。結局、私は何も出来ずバスの中に居た。横では久美子が息を切らせ、後では和美と冷夏が「お疲れさま」と声を掛ける。

そして、バスはピーと音を鳴らしドアを閉め、ゆっくりと学校を後にする。放心状態の私は、その後バスでの出来事を覚えては居なかった。気付いた時には空港に居て、搭乗口から飛行機に乗り、いつの間にか沖縄の空港に到着していた。

多少、暖かな沖縄の日差しを浴びながら、ぼんやりする私はふとため息を漏らす。やっぱり携帯を忘れたのは、私にとってかなりのダメージだった。別に私は携帯依存症では無い、ただ雅之と修学旅行中にメールが出来ないと言うのが、辛いのだ。

そんなぼんやりする私を気遣い冷夏が声を掛けた。

「大丈夫ですか？ 学校を出発してから今までぼんやりしてますけど？」

心配そうな冷夏の表情に、私は明るく微笑んだ。折角の修学旅行を私のせいで駄目にしたくなかったからだ。携帯を忘れたのはしょ

うがないけど、ここはそんな事にせずパツと楽しもうと、前向きに事を考える事にした。

「ごめん。大丈夫だよ。さあ、修学旅行とことん楽しむぞ！」

「そうですわね」

「なあ、何話でんだよ二人でよ」

背後から首に腕を回して凭れかかって来る和美は、そう言いながら笑う。その後、三人で暫くじゃれ合い、集合の合図で自分のクラスに並んだ。先生からの説明が行われ、再びバスで移動を開始した。初日は、結局色々見て回り終了した。

安奈編 第二十三通 沖縄の海

蒼い空と蒼い海の広がる沖縄の白い砂浜。

沖縄に来て五日。明日はいよいよ沖縄を去る日だ。

そして、今日は最後の自由時間とあって、皆かなり盛り上がっていた。少しばかり暖かいからと、海に飛び込む者や、砂浜を駆け巡る者や、様々な事を楽しむ者達を私は堤防の上に膝を立てて座りながら見ていた。海を見ていると、雅之と行ったあの海を思い出し何だか切なくなる。携帯を忘れてしまった事を、ちよっぴり後悔しため息が毀れる。

暫く空を見上げる私は、背後から迫り来る久美子と和美に気付かず、

「わっ！」

と、言う威喝に驚き少し飛び上がる。心臓がドクドクと早く脈打ち、寿命が縮んだ気がした。

「な、何？ 急に」

「何じゃない！ 何、辛気臭い顔してるのよ。最後の自由時間よ！ もっと楽しく行こうじゃない」

「そうだ。久美子の言うとおりで。もっと楽しく笑おうぜ」

励まそうと久美子と和美の言葉に、私は心配掛けまいとニコリと微笑む。だが、久美子も和美も更に心配そうな表情を見せる。

「安奈。無理に笑ってないか？」

「そんな事ないよ」

「本当に？」

「本当だよ」

私の目をジッと見つめる久美子と和美に圧倒され仰け反る。暫く沈黙が続き久美子が腕組みをしながら、

「じゃあ、一緒に泳ごう!」

と、言った。私も和美もありえないと言いたげな目で久美子を見る。沖縄と言えども、気温は低く泳げる状態の環境ではない。そんな中で、泳ごうななどと、思うほうがどうかしていると、私は思っていたが――。まさか、こんな身近にそんな考えを持っている者が居たとは。

呆れる私と和美は同時にため息を吐き、和美が久美子の肩をたたく。

「お前、頭大丈夫か?」

「へっ? 私はいたって正常だよ」

ニコニコ笑みを浮かべる久美子だが、私が思うに正常ではないと思う。

「それより、早く泳ぎに行くぞ安奈!」

「うん。私はいいや。結構肌寒いし、まだ泳ぐ季節じゃないよ、って言うか、もう冬だよ」

そう言って苦笑する私に、久美子は更に力強く、

「冬が何よ! 沖縄の海で泳がないでどうするの! この先、来れるかも分からないのに!」

と、言うが、和美がそれに対して冷静に対処する。

「まあ、二度と沖縄の海に来る事が出来なくても、冬には泳がんだろ。風邪引くし」

「風邪がナンボのもんじゃ！ そんなの気合で何とかするんじゃ！」
「気合云々じゃなくて……」

和美の言葉を最後まで聞こうとせず、久美子は一目散に海へと走ってゆく。

暫くその光景を見守っていたが、久美子は海に足をつけてすぐに戻ってきた。表情は暗くとてもガツカリしているようだ。

「うっつ。駄目だった……。冷たくて泳ぐ気無くなった」
「そりゃそうだろ」

和美は呆れたため息を吐き、私はそんな二人を見て笑った。

安奈編 第二十四通 もうすぐクリスマス

沖縄からようやく帰ってきた私は、ベッドにうつ伏せに倒れこみ枕に顔をうずくめる。

暫くして、私は取り合えずシャワーを浴びて、後片付けを始めた。そして、机の上においた携帯に目が付いた。修学旅行中、雅之にメールが出来なかった私は、ずっと手を伸ばし携帯を右手に持つと、ゆっくりと雅之にメールを打った。

『久しぶり。元気だったかな？ 実は、修学旅行に行っていました。しかも、携帯を寮に忘れたまま。ごめんね。もしかして、私からのメール楽しみにしてたかな？』

メールを送信し、カレンダーを見た。十二月のカレンダーは、クリスマスツリーとプレゼントの絵が描いてあって、もうすぐクリスマスなんだと感じさせる。

今年は、雅之と一緒に過したい。心の内にそんな思いを秘め、私は雅之がクリスマスの予定を聞いてこないか楽しみにしていた。

『いいな。修学旅行……。僕の学校は修学旅行無いからな』
「そっか……。マサの所は修学旅行無いんだ……」

メールに目を通し、おもむろにそう呟いた私は、ベッドに腰を下ろしメールを打つ。

『そうなんだ。マサの高校、修学旅行無いのか。残念だね』

その後も、雅之とメールをしながら私は部屋の片付けをしていた。すると、部屋をノックする音が聞え、手を休めてドアを開ける。

そこには、明るい顔の久美子の姿があった。向かい合う私と久美子は、顔を見合わせたまま沈黙が漂う。私は、その沈黙を破り、

「どうしたの？　こんな時間に」

と、声を掛けた。すると、何の躊躇も無く私の部屋に上がりこむ久美子は笑いながら言う。

「まあ、お構いなく」

「お、お構いなくじゃ無くて！　何しに来たのよ！」

「まあまあ、お構いなく」

「だ〜か〜ら〜」

お気楽な態度で私の部屋に入り込む久美子は、ベッドの上に腰を下ろし机の上の私の携帯を手取る。

雅之とのメールの内容を見られたくない、思った私は焦り久美子から携帯を奪い返した。

「ちょっと、何するのよ安奈」

「何するのよは、私の台詞でしょ！　ビックリした」

「その驚きようですと、また例のメル友とメール中でしたな」

凶星をつかれ私は仰け反り、久美子の顔を見る。妙な笑顔を見せる久美子は、立ち上がり私に歩み寄り肩を叩きながら言う。

「それで、彼とは今どうなってるわけ？」

「どうって……。別にどうもしてないよ」

「それじゃあ、クリスマスはどうするのよ。もうすぐでしょ？」

「それは……」

口ごもり俯く私にため息を吐く。何だか、馬鹿にされた気がしたが、何も言い返せなかった。

黙り込む私に久美子が笑顔で、

「そんな安奈に、力を貸すわよ」

と、言った。何の事だか分からない私は、首を傾げ怪訝そうな表情で久美子を見る。

その時、私の携帯が鳴る。雅之からのメールの着信音に気付いた私は、すぐさまメールを見る。

『うん。オヤスミ。また、明日』

そのメールの内容を盗み見た久美子は、「はは〜ん」と小さく言って頷くと不適に笑う。嫌な予感が頭を過ぎる私は、苦笑しながら久美子を見つめる。そんな私から携帯を素早く奪った久美子は、私から距離をとり素早くメールを打ち込む。いきなりの事で私は呆氣にとられ状況を把握できずに居た。

気付いた時には、久美子が「送信」と、笑顔で叫んでいた。

「ちょ！ 何してるのよ！」

「何してるのって、クリスマスの予定を聞いたのよ」

「エッ！ ちょ、何勝手な事！」

頭が混乱し騒いでいると、久美子の手の中で私の携帯が鳴る。もちろん、雅之からの着信音。

明るく笑う久美子は携帯を差し出し、

「ほら、返事が返ってきたよ」

と、言った。すぐに携帯を取りメールを読む。

『大丈夫。クリスマスは空いてるよ』

「エッ、クリスマスは空いてるんだ。それじゃあ、プレゼント考えなきゃ」

メールを見た私は、雅之がクリスマスに予定が無いと言う事に浮かれ、混乱していた頭がいつしか嬉しさで一杯に変わっていた。そんな私を呆れたといった感じの表情で、

「さっきと態度が違うぞ」

と、久美子が言った。私は完全に久美子の事など忘れずにメールを送った。

安奈編 第二十五通 手編みのマフラー

私は、雅之へのクリスマスプレゼントのマフラーを編んでいた。何をプレゼントするか迷った末の決断だった。手作りの方が気持ちが伝わるはずだと、私は考え手編みのマフラーにしたが、意外と難しかった。

学校でも、寮でもずっと編み続けるが中々上手くいかない。私って不器用なんだと、この時初めて気付いた。

もうすぐ、クリスマスだと言うのに、未だに半分も編めてない私は、最終的な決断を下した。

「エツと、久美ちゃん。私、今日から少し学校休むね」

毎朝、迎えに来てくれる久美子に、私は明るく笑いながらそう言った。

クリスマスまであと四日。この四日間は寮でずっとマフラーを編む事にしたのだ。でなきゃ間に合わない、はつきりわかっていた。そんな私に怪訝そうな表情を見せる久美子は、

「サボリですか？」

と、言って首を傾げた。私は久美子を見ながら言っ

「サボりだけど、こうでもしないと、間に合わないの」

「だからって、サボるか普通」

「いいから！ 取り合えず、今日からクリスマスまで学校休むから、後の事は任せるね」

「わかりました」。風邪引いたって嘘ついておくよ」

「お願いね」

私は久美子に手を振った。久美子も軽く手を振った。すぐに、部屋に戻った私は、網掛けのマフラーを編み始めた。

静かな部屋の中に響く時計の音を聞きながら、着々とマフラーを編み上げる私。

それから、三日が過ぎ、ようやく私はマフラーを完成させた。クリスマス直前で何とか完成する事ができ、安心した私はベッドで眠りに就いていた。目を覚ました時には夕暮れ時で、外は暗くなり始めていた。寝ぼける私の視界に、一人の女が居る様だがイマイチ誰なのかわからない。一度目を擦り、私は目の前の人物に驚いた。

「ちょ、ちよつと！ 久美ちゃん！ 何で人の部屋に勝手に上がりこんでるの！」

「鍵開いてたよ」

のん気な久美子に、私は反射的に、

「エッ、そうなの？」

と、答えてしまった。そんな私に、呆れた様に久美子は言う。

「全く、無用心だよ」

「今度から気をつけるよ……じゃない！ 何で、久美ちゃんが部屋に居るのよ！」

「だから、鍵が開いていたっていつてるじゃない！」

その後、暫し口論が続いた。久美子が言うには、様子を見にきたら鍵が開いていて、無用心だと部屋に入ると私が寝ていたと、言う

事らしいが、普通は入らないでしょ……。
ようやく、落ち着きを見せた私と久美子は、話を始める。

「それで、マフラーは編みあがったの？」

「少し変だけど、一応完成はしたよ」

「間に合っちゃったのか。残念だ」

「まさか、間に合わなきゃ良かったって思ってるわけ？」

軽く久美子を睨んだ私は、お茶を啜った。あどけなく微笑む久美子は「まあまあ」と、言いながらマフラーを手にとって見ていた。

「安奈って、意外と不器用だね」

「うん。そうなんだ。私もマフラー編んで初めて不器用だって気付いたんだ。結構ショックだな……」

「ショックって、別に気にする事でも無いでしょ？」

久美子に首を振りながら私は答える。

「また、マサにマフラー編もうと思ってたけど、もう二度と編めそうに無いのがショックで……」

「そうですか。それは、残念ですな」

少々呆れ気味で久美子がそう言った。

安奈編 第二十六通 遊園地

私は雅之との待ち合わせ場所に急いだ。

完全に寝坊し待ち合わせ時間に間に合いそうに無かった。唯一の救いは、昨日の内に実家に戻ってきていた事だ。もし寮だったら、雅之を二時間くらい待たせる事になるのだから。

通行人をかわしながら待ち合わせ場所に急ぐ私の髪は、風で少し乱れている。

「アーツ。どうしよう！ マサ怒ってるかも」

そう呟き、待ち合わせ場所の方を隠れてみる。噴水池の淵に腰をすえる雅之の姿がチラリと見え、私はホツとし急いで乱れた髪と呼吸を整え、落ち着いた足取りで雅之の方へ向った。

「ごめん。待った？」

「うっん。全然待ってないよ」

首を左右に振る雅之は、優しく微笑む。それに対し、私も負けじと微笑み返すが言葉が無い。

そんな雅之の顔を複雑な表情で私は覗き込んで言う。

「ねえ。ぼんやりして、どうしたの？」

「えっ、な、なんでもないよ」

少しオドオドした態度の雅之に、私はもう一度微笑んだ。すると、雅之も微笑んでくれた。

「それじゃあ、行こうか」

「エッ、行くってどこに？」

不安そうな表情を見せる雅之は首を傾げて私の顔をジッと見つめる。

私は少し胸を張り堂々と遊園地のチケットを二枚雅之に見せ、白い歯を見せ微笑んだ。

「遊園地のチケット、姉さんから貰ったの」

「へっつ。お姉さんから」

意外そうな表情を見せる雅之に、私はチケットを一枚渡した。

遊園地には何度も行った事があるが、好きな人と言うより男のひと二人つきりで行くのは初めてだった私は、色々と不安だったがそれを必死で笑ってごまかしていた。

そんな時、雅之がふと口を開く。

「遊園地に行くの何年ぶりだろう。幼い頃に一度親戚のおじさんで行ったきりかな？ まあ、両親は子供より仕事を優先にしていたから、休みの日は家で過した記憶しかないなあ」

初めて知った雅之の家庭環境に、私は悲しかった。両親が子供より仕事を優先にするなんて、信じられなかった。

少し涙がこぼれたが必死で堪え、

「そうなんだ。マサも大変なんだね」

と、言った。その言葉に雅之は表情を引き攣らせながら微笑んだ。

雅之が悲しそうな表情をするので、私は雅之に家族の事、特に両親の事はこれ以上聞かない事にした。

そして、この場を和まそうと明るく笑いながら言った。

「それじゃあ、今日は思い存分遊園地楽しもう」
「うん。そうだね」

雅之が少し明るくなった。

その後、私と雅之は遊園地に並んで歩きながら行った。

園内に入った私と雅之の前を通過する人達は、皆カップルで何だか私は恥かしかった。それでも、雅之に楽しんでもらおうと明るく言う。

「凄いね。結構、賑わってるよ」

「まあ、クリスマスだから……」

やっぱり元気の無い雅之に、少し私はムスツとした表情を見せる。すると、二、三步後退り雅之が表情を曇らせ言う。

「な、何？」

「何？ じゃないでしょ！ ほら、元気を出して行くわよ」
「う、うん」

私の気迫に圧されたのか、雅之は苦笑しながら頷いた。

その後、雅之も徐々に元気を取り戻し、私と雅之は軽い気持ちでホラーハウスへ入った。

暗い部屋の中に立体のお化けの姿が映し出され、リアルなお化けに悲鳴が飛び交っていた。

「結構、迫力あったね」

「そ、そうだね」

私は笑顔で雅之の方を見るが、雅之は物凄く顔色が悪かった。

「ねえ、どうしたの？ 顔色悪いよ」

私の言葉に少し笑みを見せるが、とても苦しそうだった。心配だった私は、雅之に更に言葉を掛ける。

「少し休もうか？」

でも、雅之はもう一度私に微笑み、

「大丈夫。さあ、次に行こう」

と、言い歩き出した。

雅之の事が心配だった私は、どうしようか迷った末、ある決断を下した。

それは、絶叫マシンに乗せて気を失わせようと言う事だ。そうなれば、無理に強がる事も無いし、自然に休む事も出来るとなんと画期的な効果があるだろう。

何て、私は考えていたが実際そんな上手くいくなんて思っても見なかった。

無理やり絶叫マシンに雅之を乗り込ませ、戻ってきた時には雅之は気を失っていた。

「お嬢さん、彼どうします？」

「それじゃあ、あのベンチまで運んでもらえますか？」

私は係りの人にそうお願いし雅之をベンチに運んでもらった。眠る雅之の頭を膝の上にのせ、私は暫く寝顔を見つめていた。

安奈編 第二十七通 祝福の白い粉

大分、辺りも静まり返りちらほらとライトが辺りを照らし始めていた。

日も沈み少し寒さを感じるが、雅之と居られるこの時間が止まってしまう良いのにと、願いつづけていた。

あれから、静かに寝息を立て続ける雅之の子供の様な寝顔に、何だか心が和んだ。

それから暫くして、雅之が目を覚まし驚きながら体を起こした。始めは私と目も合わせ様とせず、申し訳なさそうな表情を見せていた。だから、私から雅之にゆっくりと口を開いた。

「もう、大丈夫？ いきなり倒れちゃうから驚いたよ」

「う……ごめん」

申し訳なさそうな小さな声でそう言い、頭を深々と下げる雅之。でも、あれは私が計画的にやった事なので、雅之に謝られる理由なんて全く無かった。

「もういいよ。私、気にしてないから」

と、言つて優しく微笑んだ。その言葉に雅之はゆっくりと頭を上げ、私と一瞬目が合ったが雅之は急に辺りをキョロキョロと見回し始めた。

何かを探しているみたいだが、私には全く検討も付かなかったが、ふと雅之の持っていた紙袋の事を思い出した。

私も雅之へのクリスマスプレゼントを紙袋に入れて持ってきており、雅之も大事そうに紙袋を持ち歩いていたのだ。

その紙袋を手にとった私は雅之に確認する。

「もしかして、これ探してる？」
「あっ！」

驚いたような声を出した雅之に、私は紙袋を渡した。

紙袋を受け取った雅之は、暫しオドオドとして紙袋の中身を確認し、何やらホッとした表情を見せる。

そんな雅之に、私はクリスマスプレゼントの入った紙袋を差し出した。

「これ、クリスマスプレゼント。何にしようか迷ったけど、結局マフラーにしちゃった」

雅之が喜んでくれるか、不安だったが私はそれを表に出さず微笑み続けた。

ゆっくりと紙袋を開く雅之は、中からマフラーを取り出し嬉しそうに微笑み首に巻き、

「ありがとう。嬉しいよ」

と、言った。その言葉を聞いただけで、私も嬉しかったし、喜んでもらえたと、安心した。

ホッとする私に、今度は雅之が紙袋を差し出した。

私はその紙袋を見てから、雅之の顔を見つめた。少し緊張の見える雅之は恥かしそうに言う。

「これ、僕からのクリスマスプレゼント」

雅之の手から紙袋を受け取った私は、静かに紙袋の中を確認した。中には長方形の箱の様な物が綺麗に包まれており、それが何なの

か全く予想がつかなかった。

私は器用に箱の包みを剥がした。そして、中から出てきたのは真っ白な箱だった。その箱を開けると、綺麗な木箱が姿を現した。

私はすぐにオルゴールだと気付き声を上げた。

「すごい。手作りのオルゴールだ」

オルゴールをまじまじと見る私は、雅之に聞く。

「マサが作ったの？」

「うん。和彦の知り合いの所で」

「そっか。嬉しい。世界で一つだけのオルゴールだね」

そう言つて微笑み、ゆつくりとオルゴールの蓋を開けた。

小さな音で静かにジングルベルのメロディーを奏でるオルゴールは、時折音を外すが全く気にならない。

私も雅之もオルゴールの音に耳を傾け、時が静かに過ぎて行く。

暫くして、オルゴールの音に誘われたかの様に、白い粉の様な物が一つ、また一つと舞い降りてきた。冷たく柔らかなその粉は、真っ黒な夜空を鮮やかに煌かせる。

「……雪」

私はふとそう呟き空を見上げた。そんな私に雅之も軽く相づちを打つ。

「そうだね」

静かに流れるオルゴールの音を聞きながら空を見上げた私と雅之。その雪は私と雅之の事を祝福している様に感じ、自然と笑みがこ

ぼれた。

「綺麗な雪だね」

「そうだね。夜空を舞う桜の花びらの様だね」

その言葉を聞いた瞬間、私は笑いを堪える事が出来ずクスクス笑いながら、

「うん。それは、ちょっとクサイかな？」

と、言った。雅之は一瞬で顔を真っ赤にし、恥かしそうに顔を背けた。

そんな雅之を見てると更に面白かった。

「顔が真っ赤だよ。恥かしいなら、言わなきゃよかったのにね」

「本当だよ。ちょっと、いい言葉だと思ったのに……」

肩を落しうな垂れる雅之に、私はスツとベンチから立ち上がり言う。

「でも、私は好きだよ。さっきの言葉」

「エッ！」

「だって、なかなか言えないよ。あんなクサイ言葉」

雅之をからかう様に、私はそう言いオルゴールの蓋を静かに閉め、もう一度クスクスと笑った。

雅之は顔を真っ赤にしながら、

「何だよ。もうその話はいいいよ」

と、言った。まるで子供の様な雅之が、私は更に好きになった。だから、もつとからかってみたかった。

「えっ。でも、面白いじゃない」

「僕は全然面白くないよ……」

本気で落ち込む雅之を元氣付けてあげようと、私は雅之の頭を軽く撫でながら言った。

「よしよし。そんなに落ち込まないの」

「よしよしじゃないよ。それに、落ち込ませてるの安奈じゃないか」
「ごめんごめん。もう言わないから」

私は両手を合わせそう言つて、雅之を見つめた。

雅之は別に怒っている様子も無く、とても楽しそうな表情をしていた。

そんな雅之に私は優しく言う。

「それじゃあ。そろそろ、帰ろうか」

結局、遊園地を楽しむ事は出来なかったけど、こうして雅之と長い間一緒に居られた事が嬉しかった。

私はそう思いながらゆつくりと足を進めた。

その時、雅之の声が背後で響く。

「安奈！」

ドキッとした私は、ゆつくりと振り返った。胸が鼓動を立て緊張が走る。

もしかすると、告白されるんじゃないだろうか。そんな思いに私

は微笑み返事を返す。

「何？　どうかしたの？」

私の言葉の後、沈黙が続いた。時間が止まった様な静けさに私は胸の鼓動だけが聞えていた。

そして、雅之がゆっくりと口を開いた。

安奈編 第二十八通 クリスマスの出来事

二学期も無事に過す事が出来、冬休みに突入した。

冬休みは、サッカー部の仕事は一年に任せ、私は一足先に実家の方に帰ろうと、寮で荷物をまとめていた。

荷物をまとめていると、部屋をノックする音が聞こえ、ドアが開かれ久美子が笑顔で顔を出した。

「あ〜ん〜な〜」

変な声で名前を呼ぶ久美子に、苦笑しながら私は言う。

「どうしたの？ 久美ちゃん部活でしょ」

「今日は休んだ。安奈が実家かえるって言うから、見送ろうと思ってたさ」

「別に見送らなくてもいいよ」

そう言った私だが、久美子は全く聞いては居なかった。勝手に部屋に上がり、ベッドに座り込んで楽しそうに私のことを見つめている。

きつと、クリスマスの事が聞きたいのだ。

あの日の事はまだ誰にも話してない。私の心の中の思い出なのだ。黙々と荷物をまとめる私に、痺れを切らした久美子が、

「あ〜っ！ 安奈！ 結局、クリスマスはどうなんだのよ！」

と、怒鳴った。やっぱりと、私は思いたため息を吐き呆れ顔で久美子を見た。

一方の久美子の眼差しは、期待に満ち溢れた目をしていて。

でも、私は何も言わず荷物をまとめを再開した。その行動に、久美子はすぐに言う。

「ちょ、ちよっと！ クリスマス、雅之と一緒にだったんでしょ？ 告白とかされた？」

その言葉に、私は軽く首を左右に振りふとため息を漏らした。クリスマスの日、告白されると思った時に雅之に言われた言葉は、

「今日は楽しかった。また、遊園地に来ようよ」

だった。少し期待していた私は、雅之に微笑み返す事しか出来なかった。

私はその事を思い出し、もう一度ため息を吐く。

「何？ もしかして振られたわけ？」

「ち、違うわよ！ あの日はとても楽しくて、お互いいい感じになったの！」

「なら、何で放さないわけ？」

久美子は意地でもクリスマスの話を聞きたいらしく、積極的に私に絡んでくる。

あまりにしつこい久美子に、私は仕方なくクリスマスの出来事を話した。

すると、久美子が残念そうに私の右肩を二度叩いた。

「そっか。キスまで行けなかったか」

「何でキスなのよ」

「告白されたら、キスで返事を返すに決まってるでしょ？」

「それは、ちよっと違うんじゃない？」

軽く久美子の言葉を否定する私は、半笑いしながら荷物まとめをする。

そんな私の言葉など耳に届いていない久美子は更なる妄想を繰り広げていた。

「そう。クリスマスに告白されキスを交わし、そのまま夜の街で……」

「後は……。教科書かな」

完全に久美子の事を無視して独り言の様に呟く私は、教科書を机の上から幾つか取り鞆に綺麗に並べた。

綺麗に片付いた部屋を一通り見回し、ベッドに座り妄想をする久美子を見て、もう一度部屋を見回す。

教科書と一通り荷物の入った鞆を、玄関の側に置いた私は軽くシヤワーを浴びた。

その後も、久美子は一人妄想の世界をさまよい続けていた。

安奈編 第二十九通 大晦日の大掃除

大晦日の朝、私はいつもより早く目が覚めた。外はまだ薄暗く静けさが漂っている中、私は気合を入れて自分の部屋の大掃除を始めた。特に使っていない部屋なので、そんなに汚れても無く、日が昇り始めた頃には掃除も終わっていた。

両親もその物音で目を覚まし、少し早いが大掃除を開始し、私もある程度掃除を手伝い、家を出た。

どの家も大掃除をしている住宅街を私は、足軽に通り抜け駅前に到着した。この駅で初めて雅之の顔を見たんだよね。なんて、考えると無性に笑みがこぼれた。暫く、一人笑みを浮かべていた私は、時計台の時間を見て焦った。

「あつ！ もう大掃除始まつてるかも」

無論、私の家の大掃除でない。私の言ったのは雅之の家の大掃除の事だ。

昨日、雅之がメールでポロツと、もらした一言で私は手伝いに行こうと決心したのだ。それに、一度雅之の妹にも会っておきたいと思ったのだ。

もちろん、私が来る事は雅之は知らない。住所は和彦から密かに教えてもらい、雅之を驚かせようという状況になっている。

携帯で雅之の住所を確認しつつ、細めの街道を歩き進めようやく雅之の家の前に辿り着いた。すでに、大掃除が始まっているのか、中からは掃除機の音が響いていた。

「ここが、雅之の家だね。何だかドキドキしてきた」

緊張する私は、玄関の前に立ち尽くし胸に手を当てゆっくり息を

吐く。

その時、私の背後から、

「そこで、何してるんだ？」

と、男の声が響く。心臓が飛び出しそうな位驚いた私は、暫しパニックに陥る。

驚かそうと思っていたのに、まさか驚かされるなんて、予想外の事で完全に頭が真っ白になっていた。

その時、雅之の声が庭先から聞こえる。

「あれ？ 健介っツ。ちゃんと窓拭きやってよ！」

「ああ。それより、お客さんらしいぞ」

「お客さん？」

庭先の方から芝を踏み鳴らす音が聞こえ、もう雅之が近付いてきた。雅之の声に、私は嬉しくなって振り返った。

すると、雅之と健介と呼ばれた男が同時に言う。

「安奈！」「可愛い」

私の目の前には、私よりも少し身長の高い男が笑みを浮かべていて、一方の雅之は驚きに目を丸くしていた。

「な、何で安奈が……」

「へえっつ。この娘が安奈ちゃんか。話で聞いてたよりも可愛いじゃないか」

健介と呼ばれた男がそう言って雅之の方を見る。そして、私に彼を紹介する。

「僕の友達の健介」

「どうも、初めまして」

丁寧にお辞儀した私は、顔を上げて健介に微笑んだ。少し照れる様なしぐさを見せる健介は、肘で雅之を小突き小声で何かを言うが、私には聞こえなかった。少しして、雅之が少し顔を赤面させ健介に言う。

「健介は、早く窓拭きに戻ってよ。大掃除が終わらないとそばも作れないんだから」

「はいはい。わかってるって。そんじゃ、邪魔者は消えるかな」

妙な一言を残し健介は庭先へと去ってゆく。残された私と雅之には、妙な沈黙が続き私の方から声を掛けた。

「ほら。昨日、大変だと言ってたから、手伝いに来たの」

「そ、そっか。それじゃあ、恵利にも紹介したいから」

そう言って、雅之は私を家の中へと招いた。中では掃除機をかける雅之の妹の恵利が、大声で怒鳴る。

「お兄ちゃん！ 窓拭きサボらないでよ！」

「いや、紹介したい人が……」

雅之の言葉など聞かずに、恵利がハタキで雅之の頭を叩く。

「うわっ、や、やめろよ！」

「問答無用！ 働かざるもの食うべからず」

「食うべからずって、何か食べるに着たんじゃ」

「口答えしない！」

圧倒される雅之を見かねて、私が声を掛けた。

「あの……。雅之のメル友の……」

恵利の動きが止まり、私と目が合う。私もその瞬間に言葉が詰まり、微笑む事しか出来なかった。

ハタキを払いのけた雅之は、恵利に言う。

「彼女はメル友の安奈。今日、手伝ってくれるって」

「エッ、お兄ちゃんのメル友！ こんな綺麗な人が？」

疑いの眼差しを向ける恵利に、雅之は不満そうな表情を見せて居る。私はただただ微笑むだけで二人のやり取りを伺っていた。その後、話がまとまり、私は恵利と一緒に室内の掃除をする事になった。

「それで、お兄ちゃんとはどうしてメル友に？」

掃除中に恵利が突然質問してきた。本当に突然だったため、私は何と答えて良いのか分からず、悩んだ。

その末に、出した答えは、

「うーん。多分、何処か似た所があったからかな？」

「似た所？ お兄ちゃん、成績悪いし、運動できないし、外見も良くないのに、似た所なんてありますか？」

「ハハハッ……。恵利ちゃんって、結構厳しいんだね」
「そうですか？」

苦笑いを浮かべる私に、恵利は愛らしく微笑む。きっと仲がいいんだろう。

暫く、雅之との出会いとかを恵利に話し、楽しく掃除を続けた。

安奈編 第三十通 恵利の想い

雅之の家の大掃除も終盤に差し掛かった時、窓の外で妙な叫び声が聞こえた。

室内の掃除をしていた私と雅之の妹恵利は、その声に顔を見合わせて首を傾げた。暫くして、健介に担がれて雅之がリビングに現れた。

雅之はソファにうつ伏せに倒れ「ううーっ」と、うなり声を上げながら少し表情をゆがめた。私は心配になり、

「どうしたの？」

と、聞いた。一方の恵利、呆れた表情を見せながらシップを一枚持つてきて言う。

「忙しいのに何やってるのよ」

「早く終らせようと思ってさ……」

苦笑する雅之は腰の痛みに顔が引き攣った。恵利の持ってきたシップを手にした私は、雅之の背中にシップを張りながら言った。

「大丈夫？ あんまり無理しちゃ駄目だよ」

私の言葉にうなり声で返事を返す雅之に、恵利がため息交じりに言い放った。

「お兄ちゃん張り切りすぎ」

何も言い返せないと言った感じの雅之は、うな垂れ少し落ち込ん

でいる様だった。

恵利は少々残念そうに言う。

「お兄ちゃんがその様子だと、今日の年越しソバは無しかな」

「なーにー！」

恵利の言葉に大声を上げる健介に、私はビックリして放心状態になってしまった。その後、どんなやり取りがあったか覚えていないが、健介はそのまま呆然と燃え尽きた様な感じになり、肩を落として一言も喋らなかったのを少しだけ覚えている。

大掃除を終え、私と恵利は夜の街を歩いていた。明日、朝早くから初詣に出掛けると言う事になり、何故か雅之の家に泊まる事になってしまった。母にその事を電話で話すと、軽く了承してくれたが、少しくらい娘を心配してくれてもいいのに。

そんなこんなで、恵利と買出しに出かけたのだ。

「今日は、本当に助かりました」

「私で良ければ、来年も手伝うよ」

「でも、迷惑じゃないですか？」

申し訳なさそうな表情で私にそう言う恵利に、私は笑いながら答えた。

「全然迷惑じゃないよ」

その言葉に安心した様に笑みを浮かべる恵利は、私の顔を何度もチラチラと見て、ゆっくりと口を開いた。

「あの……。もしかしてですけど、安奈さんはお兄ちゃんの彼女ですか？」

「エッ！　ち、違うよ。私はただのメル友なんだよ。全然、付き合い
つているとか、そう言う関係なんかじゃ」

突然の言葉に焦り慌てる私のリアクションに、恵利がクスクスと
笑った。私は恥かしくなり赤面し、暫し俯いた。

そんな私に、ホツとした感じで笑いながら恵利は言う。

「そっか。何だか安心した。安奈さんが、お兄ちゃんの事想って
くれて……。少し心配だったんだ私」

その言葉に首を傾げる私に、恵利は俯きながら言葉を続ける。

「安奈さんみたいに綺麗な人が、お兄ちゃんとメールしてるのは、
面白半分なんじゃないかって……。でも、そうじゃなかったんです
ね」

「私、恵利ちゃんにそんな風に見られてたんだ」

「ごめんなさい。でも私、お兄ちゃんには幸せになってもraitたい
から」

少し悲しげな面持ちを漂わせる恵利に、ふと雅之の言葉を思い出
した。あのクリスマスの日のあの言葉を。

両親が子供よりも仕事を優先していたから色々と苦労したと言う
話を。

私もその話を思い出し少し悲しくなった。そんな私に明るい声で
恵利は言う。

「でも、安奈さん大変ですよ。お兄ちゃん人一倍鈍感だから、安奈
さんの気持ちに気付くまで」

「エッ。そっなの？」

「そうですよ。全く人の気持ちに気付かないんです」

「何だか、苦勞しそうな予感が……」

私と恵利は笑った。腹の底から。

その後、雅之の家で雅之が痛みに堪えて作った年越しソバを食べ、今年一年を締めくくった。

安奈編 第三十通 恵利の想い（後書き）

安奈編も三十通を達成。

何だか、物凄く長い話になっちゃいましたね。でも、色々と本編でかかれなかった裏の話が読めて面白かったりしたりしませんか？
何だか馴れ馴れしい後書きになりましたが、本日はこの辺で……。

安奈編 第三十一通 初詣

年も明け早朝から、雅之と初詣に着ていた。大勢の人が集まり賑わい、中々中に進む事も出来ず、私と雅之は立ち往生していた。

恵利は後から来ると言っていたが、この様子だと合流するのは難しい。健介も、朝早くに彼女との待ち合わせに行き、ここで落ち合う事になっているらしいが、多分見つけるのは一苦労だ。

それでも、雅之が一緒なので何でも楽しく感じた。

「やっぱり、人が多いね」

行列の先を見ようと、私は背伸びをしながら言った。一方、雅之は甚く落ち着いた感じで言う。

「そうだね。もっと早く家出ればよかったかな？」

「うん。どうだろう。早く出ても変わらないんじゃないかな？」

背伸びを止めたため息交じりにそう言うが、実際は雅之と一緒に居られる時間がもっと続いて欲しいと願っていた。

一向に進まない人混みの中、私は雅之に訊く。

「恵利ちゃん一人で大丈夫かな？」

「多分、大丈夫だよ。僕より確りしてるから」

雅之はそう言って笑った。私も釣られて笑った。

その後、雅之が去年自分に起った事を面白おかしく話してくれた。私とのメールが始まった時の事や、初めて会った時喫茶店で食べたジャンボパフェの事とか、健介が振られた時の事と彼女の出来た時の話し、文化祭の話し、それから告白された時の話し。笑いなが

ら話してくれていた。

私も話を聞きながら笑ったけど、雅之は一年で色々な出来事があったんだと想った。

ようやく、私達の番が回って来た。私も雅之も五円玉を投げ入れ、手を合わせた。

雅之がどんな事を願っているか分からないが、私は、

（雅之といつまでも一緒に居られますように）

と、願った。願った所でその願いが叶うわけでも無いが、いつまでも一緒に居られる様な気になった。

取り合えず、やる事はやったので私は明るく笑いながら言う。

「さあ、今度はおみくじを引こう！」

雅之からの返事を聞かず、私は雅之の腕をひきおみくじ売り場に急いだ。おみくじ売り場に着いた時には、雅之は苦しそうに肩で息をしていた。

「ハア…ハア……」

「大丈夫？」

俯いたまま息をする雅之に私は心配になり声を掛けた。もしかすると、昨日痛めた腰がまた痛むんじゃないかと。

でも、雅之は微笑み、

「大丈夫……」

と、答える。あんまり大丈夫そうに見えない雅之に私は言う。

「そう？　大丈夫そうには見えないけど？」

その言葉に、雅之は更に笑みを浮かべた。本当は無理をしているのだと、分かっていたが私は言う。

「マサが、大丈夫って言うならいいんだけど……。無理はしないでよ」

「うん。わかってるよ」

雅之はそう言い、おみくじを引いた。私もおみくじを引き結果を見た。

中吉と言う、中途半端な感じになったが一応雅之に報告した。

「どうだった？　私は中吉だったよ。大吉じゃないのは、ちょっと残念だけど、凶じゃないだけまだよね」

「そうだね。僕は吉だったよ」

雅之は私におみくじを見せた。マジマジとおみくじを見た私は、

「失物、家の内にありだって。失くした物があるなら、家の中を探し回るといいね」

と、言って雅之の顔を見た。その瞬間、雅之と視線がぶつかるが、雅之がすぐに視線を逸らした。

私はすぐにおみくじを見て言う。

「あゝっ。恋愛は時を待つべしだって、どういう事かな？」

「さあ？　取り合えず、焦るなってことじゃないかな？」

「そうなのかな？」

私がおみくじを返すと雅之はそれを財布にしまった。
その後、何とか恵利達と合流した。
ついでに、私の恋愛は『根気強く待つべし』だった。

安奈編 第三十二通 好きな人と

あつという間に三学期になった。

何だか、例年よりも短く感じた冬休みは、私にとってとても良い事ばかりだった。

雅之と初詣に行けたし、長い時間を一緒に過した気がした。

そのせいか、少し浮かれる私は自分の席に座り一人微笑んでいた。そこに、気味悪そうに登場する久美子は、

「どうしたの？ 何かあった？」

と、訊いて来た。私はそんな久美子に冬休みの出来事を全て話した。

「ふん。それで、その間彼とは何かあったの？」

「別に、何にも無いよ」

「はあ。そんな長い間一緒に居て、何も無いわけ？ 駄目だわ

……。絶対上手くいかないわ……」

呆れ口調の久美子はそう言いながらガツクリと肩を落とした。

その態度に、私は少し納得がいかず反論する。

「何も無くていいの！ 一緒に居られるだけで、私は嬉しいんだから」

「甘いわ。一緒に居られるだけで嬉しいだ何て……。それに、今時キス位中学生だってするんだから」

その久美子の言葉に私は驚いた。流石に中学生でキスは無いだろうと思いつながら。

そんな事を思っていると、久美子が更に追い討ちを掛ける。

「まあ、色んな人に告白されてる安奈ならキスの経験位あるでしょ？」

「うっつ。無いよ……キスの経験なんて……。告白されるのは確かだけど、私が好きになっただのは雅之だけだもん……」

「意外だわ。てつきり、キス位なら経験があると思っただのに」

「私、そんなに軽い女じゃないもん」

久美子の言葉を軽く否定してため息を吐いた。今時、キスの経験が無いなんて、とショックを受ける私は、もう一度ため息を吐いた。そんな私を見ながら微笑む久美子は、何だか楽しんでいるように見えるが、きつと気のせいだと私は思う事にした。

色々と考えていると、右隣の席に和美がやってきて声を掛けた。

「何悩んでるんだ？　もしかして、冬休みの間にメル友と何かあったのか？」

「その逆。何も無かったんだってさ」

和美の問い掛けに久美子が即座に答える。それに対し、和美が小さく「なーんだ」と言いたため息を吐いた。

脚を組み不思議そうな表情を見せる和美は言う。

「それで、何にもないなら何を悩んでたんだ？　私で良ければ力になるぞ」

「それがさ。安奈、この歳でキスの経験も無いんだって」

またしても、久美子が和美の問いに答える。私は発言するタイミングを掴みそこね、ただ頷くだけだった。

和美はその言葉を聞くなり、呆れたと首を左右に振りながら深いため息を吐き、軽く久美子を睨み付けた後優しく言う。

「それでいいんだ。安奈は今まで好きになった奴がいなかったんだろ？ キスは本当に好きな人同士がするものなんだから、気にする事はないさ。それに、久美子。お前もまだキスしたことないじゃないか！」

「エーッ！ そうだったの！」

「えへっ。ばれちゃったか」

久美子は軽く舌を出し笑った。完全に私はからかわれていただけなのだ。ムスツとした表情を久美子に見せると、久美子は両手を合わせて謝った。

すぐに久美子を許し、私達三人は笑った。

三学期が始まりあつと言う間に二月に入った。

クラスの女子はバレンタインデーを目前にソワソワとし始めていた。私もその一人だ。

自分の席に座り一人深刻そうに悩む私は、陰気な雰囲気をかもち出していたのだ。そんな私に、久美子と和美がいつもの様に声を掛けた。

「今度は何悩んでるんだ？」

「どうせ、バレンタインの事でしょ？」

「そう。そうなの。バレンタイン……。どうしたらいいかな？」

顔を上げ二人の目を見つめる。私に見つめられ、久美子も和美も少し表情を引き攣らせ苦笑した。

そんな二人の目を見つめる私に、背後から冷夏が声を掛けた。

「どうしましたの？ 悩み事ですか？」

すぐさま冷夏の方に顔を向けた私は、冷夏の目を見つめた。

軽く首を傾げた冷夏は微笑み「どうしましたの？」と、もう一度聞いた。

久美子と和美が経緯を話し、私は頷きながらも冷夏の目を見つめ続けた。

話を聞いた冷夏は笑いながら答える。

「そうでしたの。でしたら、当日に会いに行ったらよろしいのでは？」

「でも、学校あるし……」

「本当に好きなら、行くべきだと思いますわよ」

「それに、クリスマス前に学校休んでるんだし、この際サボっても関係ないわよ」

久美子が大笑いする。私はそんな久美子を見つめたため息を零した。その後、散々悩んだ末、私は当日に雅之に会いに行く事に決めた。私の誕生日の時に、雅之は会いに着てくれたのだから、私もこれくらいしないかと、思ったのだ。

学校が終ると、即座に自分の部屋に帰宅し、チョコを作り始めた。雅之への思いを込めて一生懸命作ったチョコは、砂糖と塩を間違えた事に後々気付き、作り直す事になった。

「うっつ。砂糖と塩を間違えるなんて……」

作りたての砂糖と塩を間違えたチョコを目の前に、私はため息を吐く。

失敗したのがショックで私はベッドに横たわり携帯を手にした。

そして、ふとあることを思い出した。

それは、雅之が料理が上手と言う事だ。雅之に聞くのはどうかと思ったが、この際しょうがないとメールを送った。

『今日はサッカー部の練習がお休みです、久し振りに部活が休みで、何だかゆつくり出来そう。そう言えば、明日はバレンタインデーだから、チョコを手作りしようと思うんだけど、どうしたら美味しいのできるかな?』

メールを送り天井を見上げていると、着信音になる。雅之からの返事が届いたのだ。

私はすぐに体を起こしメールを読んだ。

『チョコはあんまり作ったこと無いから、詳しく分からないな』

その雅之のメールに、

「そうだよね」

と、相づちを打った私は、頷きながらメールの返事を書く。

『そつか。それじゃあ、今から色々研究するんで、また明日ね』

こんな返事を返したが、本当は最後に『楽しみにしててね』と書いたが、明日ビックリさせようと、その言葉は消したのだ。

雅之と少しメールをしてやる気を取り戻した私は、早速チョコ作りを再開した。チョコ作りを再開して、暫くして久美子が部屋に遣ってきた。

ベッドに腰を下ろし、チョコを作っている私を見据える久美子は、テーブルの上にある失敗作のチョコに目を落す。

「ねえ、このチョコ食べても言いの？」

「エッ！　だ、駄目！」

私は驚き振り返りそう言ったが、手遅れだった。既にチョコは久美子の口の中にしまわれていた。

笑いながら私を見る久美子は明るく、

「もう、食べちゃった」

と、言ったがその後、久美子はその塩辛さにのた打ち回ることになったのだ。

安奈編 第三十四通 想い

バレンタインデー当日。

私は朝からソワソワとしていた。授業中も時計ばかりを気にして、全く授業に集中できず挙句先生には怒られる始末。

こんな事で大丈夫なんだろうか？ と、一抹の不安を抱えつつ私は午前の授業を乗り切った。

「メル友の所に行くのか。まあ、頑張れよ」

和美が右手の拳を胸の位置で握り締め、私を激励してくれる。それに対し、私は軽く笑みを返し、

「ありがとう。頑張るよ」

と、言った。

「相手の目をジッと見つめて渡すのよ」

「そうですわ、相手も目を見つめられるといちころですわ！」

何故か、私にアドバイスを送る久美子と冷夏は、目をギラギラに輝かせ何やら期待に満ち溢れた目をしていて。何を期待しているのか大体予想はついていて、今日はチョコを私にいくだけなので久美子や冷夏の考えている様な事は一切無いと私は胸の中で断言した。とりあえず、三人から元気と勇気を貰った私は足早に学校を抜け出し駅へと向った。案外、空いている電車に乗り込み、私はホッと座席に腰を下ろした。

「うんうん。大丈夫。ここまでは、うまく行ってる」

などと言う独り言を呟き、手の平に人と言う字を何度も書きながら口に流し込んだ。

多分、こんなに緊張するのは高校受験の合格発表以来だと思う。何だか脈が速くなり頭の中が真っ白になり始め、私はもう何も考えられなかった。

電車に長時間揺られ、ようやく目的地に到着した私は、携帯で時計を確認する。

「は、早過ぎた……」

時刻は二時三十分。普通、午後の授業が終るのが、四時くらいだから――。

ため息を漏らす私は、とりあえず雅之と初めて会った時に行ったあの喫茶店へと来店した。

とりあえず、ここで時間を潰そうと考えたのだ。喫茶店に入ると店員が私を席に案内しメニューを渡す。私は何と無くコーヒーを頼み、時間まで一息入っていた。

静かな店内に流れる曲に耳を傾け、私はコーヒー一杯で一時間を過ぎた。会計を済まし、外に出た私は寒さに身を震わせ足早に雅之の学校の方に向った。

「うわっ！ もう、下校してる人が居る！」

雅之の高校の校門前に到着した私は、携帯で時間を確認しながら下校する生徒を目視する。まだ、午後の授業終る時間じゃないけど、と思う私だが何処の高校も同じ時間に授業が終るとは限らないと言う事に気付き、小さくため息を吐いた。

こんな事なら、授業の終る時間を恵利に聞いておくべきだったと後悔する私だが、すぐに気持ちを切り替え雅之の家の方に向かって走

り出した。滑りやすくなっている道に、足をとられ私は激しくしりもちをついた。

「うっつ。尻餅ついた……」

すぐに立ち上がった私は軽くお尻を擦りながら、足元に気をつけ歩みを進めた。

道で滑って尻餅をつくなんて恥かしいことだが、誰にもその光景を見られておらず私はホツとした。

ゆっくり歩みを進める私は、

「うっつ。まだ、お尻が痛いよ……。でも、雅之と一緒にの時じゃなくてよかった」

と、小さく呟いた。暫く進んでいると、私の携帯にメールが届いた。雅之からではなく久美子から。

『どう？ チョコは渡せた？　もしかして、今一緒に居るのかな？　お邪魔だったかしら？』

完全に私の事をからかっている久美子に、返事を返すべきか悩んだ私は、決断した。とりあえず、チョコを渡した後にメールしよう。

今はメールなんかよりも雅之を探すことが最優先事項なのだ。

「ごめん。久美ちゃん」

と、言いながら携帯を閉じた。

暫くして、私は雅之の家の前に辿り着いた。しかし、電気は点いておらずまだ帰ってきてはいないようだった。

「まだ、帰ってないんだ……。メールしてみようかな？」

携帯を右手に握り私は考える。その末の決断は、メールを送らないと決まった。

折角、雅之を驚かそうとして来たのに、メールをしちゃ意味がない気がしたのだ。

そして、私はもう一度雅之の高校に向った。向ったと言うよりは戻ったと言う方が正しいかもしれない。

学校前に到着したが、既に多くの人が下校しており、雅之の姿を探す所ではなかった。

「はうっ。これじゃあ、探し様がないよ」

戸惑う私に聞き覚えのある女性の声がした。

「安奈さん……ですよ」

その声に振り返った私の前には眼鏡を掛けた一人の女性が立っていた。

「あなたは確か、美樹さんでしたよね」

「はい。お久し振りです」

私は美樹と殆ど同時に会釈した。少し気まずい雰囲気私と美樹。一応、美樹が雅之に告白して振られたと言う話を、初詣に行った時に聞いたからである。

そんな私に、美樹は微笑み優しい口調で言う。

「もしかして、倉田君に会いに来たんですか？」

「ええ……。でも、中々見つからなくて……」

「それなら、必ず倉田君の通る帰り道知ってますよ」

美樹はそう言って私をそこに案内してくれた。その途中、私に雅之への想いを色々と話してくれた。

何だか美樹の話を聞いていると、私は罪悪感でいたたまれなかった。きっと、雅之が私と会わなかったら美樹は、雅之と――。

心の痛む私に美樹は言った。

「私はこれでよかったと思ってます。倉田君は安奈さんと一緒にいる時の方が楽しそうに笑ってますから」

「エッ！　そ、そんな事無いよ」

「私にはわかるんです。きっと、倉田君と安奈さんは――」

美樹はそう言つと足を止めた。私もすぐ足を止め美樹の方を見る。先ほどの言葉の続きが気になったのだ。

暫し沈黙が続くが、美樹が私の顔を見て微笑み言った。

「私、帰り道こっちなんです。それから、ここで待ってれば倉田君に会えますよ。それじゃあ」

「あつ！　待ってさっきの言葉の続きは……」

足早にその場を後にする美樹から返事は無かった。一人取り残された私は、呆然と立ち尽くしていた。

その後、私は雅之にチヨコを渡す事が出来たが、美樹の最後に言いかけた言葉がどうしても忘れられなかった。

安奈編 第三十五通 苦いコピー

学期末テストも無事に終わり、春休みに入った。三学期はアツと言つ間に過ぎ、もう春休み。このままだと、すぐ卒業だなど、感じる。

丁度、実家に帰ってきていた私は、朝早くから上機嫌だった。理由は色々だが、一番の理由は雅之の家に行けると言う事だった。ついでに、雅之の家に行く事は既に恵利に許可をとっているため、堂々と行く事が出来る。もちろん、雅之はこの事を知らない。軽い足取りで家を出た私は、足早に雅之の家に向った。雅之がどんな顔をするんだろうと、思いながら私は笑みを何度も零した。そして、雅之の家の前に着くと、何だか緊張し中々チャイムを鳴らす事が出来ずにいた。

「どうしよう。ここまで来て、緊張するなんて……」

深呼吸を三度やり私は心を落ち着け、チャイムに手を伸ばす。ドアの中からチャイムの音が響くが、誰か出て来る気配は無く、私はもう一度チャイムを鳴らした。

すると、今度は足音が聞こえてきて、ぶつくさとかかを呟きながら雅之がドアを開いた。

微笑む私と目が合う雅之は、黙ったままで何も言わないため、私の方が先に口を開いた。

「大丈夫？　もしかして、風邪で寝込んでたとか？」
「だ、大丈夫。ちょっと、ビックリしただけだから」

少し声の裏返る雅之に、私は微笑みながら更に言葉を続けた。

「へへへッ。ドッキリは成功って事だね」

私のその言葉を聞いて、雅之は笑った。私と雅之は暫し玄関で笑い続けた。

その後、雅之は私を家の中に招きいれ、リビングルームのソファに座るように薦めた。

ソファに座った私は、暫し部屋の中を見回す。そんな私に、雅之がキッチンから聞く。

「何か飲む？　って、言っても麦茶とコーヒーしかないけど」

「そうだな。それじゃあ、コーヒーでいいよ」

私はそう言ってキッチンに立つ雅之に微笑みかけた。雅之は微笑みながらブラックコーヒーをカップにいれ、私の元に運んできた。

「コーヒの香りが漂う。苦いのは苦手な私は、ブラックのコーヒを目の当たりにし、複雑な心境に。」

そんな私に、雅之が聞く。

「砂糖とミルクは必要かな？」

私は少し迷う。無理して苦いのを飲むべきか、ミルクと砂糖を入れてごまかすか。

迷いに迷った末の結論は、

「うん。必要かも。苦いの苦手だから」

と、正直に言う事にいたった。微笑む私に、雅之も微笑み返しキッチンに砂糖とミルクを取りに向った。

棒状の袋に詰められた砂糖を二つとミルクを持って、雅之が戻ってきた。微笑む雅之はテーブルの前に座ると、

「砂糖は一つでよかった？」

と、私に訊く。とりあえず、笑いながら私は答えた。

「うん。多分、大丈夫だよ」

そう言い、砂糖とミルクを受け取った私は、コーヒーに砂糖とミルクを加えスプーンでかき混ぜた。
ゆっくりとそれを口に運んだ私は、

「まだちよつと苦かった……」

と、涙目で言った。雅之はそんな私を見て笑っていた。

安奈編 LAST MAIL 二人の想い

雅之の家を突然訪問して三日後、私と雅之は初めて会ったあの駅の前で待ち合わせをしていた。

今日は外で花見をしようと言う事になったのだ。

しかし、この駅前はいつも人が賑わっていて、何処も彼処も待ち合わせをしている人ばかり。この様子だと、雅之を探すのも大変だと、思った矢先雅之の姿が私の視界に入った。

私が声を掛けようとすると、雅之の方が先に微笑み手を振りながら言う。

「おつ、安奈。コッチコッチ」

雅之に微笑み返した私はすぐに駆け寄り、

「ごめん。ちょっと遅くなっちゃった」

と、言った。別に遅れたわけじゃないけど、雅之がどういう反応を見せるのか見てみたかったのだ。

雅之は笑顔で私の事を見据え、全然気にしてないといった態度で言う。

「気にしてないよ。僕の方が早く来たただだから」

「今度からは私が、早く来るんだから」

「別に、勝負じゃないんだから……」

気合を入れる私に、雅之が笑いながらそう答えた。

そんな雅之と私は楽しく繁華街を見て回り、色々なお店を巡った。ちよこつと道に迷ったりもしたけれど、私達は何とか目的地の公園

に辿り着いた。

「結構、遠かったね」

私は少し雅之が心配になり、雅之の顔を見ながらそう言う。すると、雅之がニコツと微笑んだ。
安心した私は、

「桜見られるといいね」

と、言って公園を見回した。意外と人の少ない園内に、私は少し不安になっていた。

あと、健介の情報と言うのも、あんまり信用できないと、以前雅之が言っていたのを思い出し更に不安になる。

本当に桜が見られるのだろうか。

そんな私の不安を他所に雅之は明るく言う。

「さあ、行こうか。確か、奥の方で桜が咲いてるって」

「でも、健介君何処から、そんな情報手に入れたのかな？」

私の当然の疑問に、軽く首を傾げ雅之が答える。

「何処からだろう？ 僕も気になってたんだよね」

「まあ、細かい事気にしてもしょうがないよね。さあ、行こう」

雅之に微笑みかけた私は、急かす様に走り出す。そんな私の背後で雅之の声が聞こえた。

「ちょっと！ 待ってよ」

私は立ち止まり振り返ってから、雅之に微笑み叫んだ。

「早くしないと、置いてくよ」

「だ、だから、ちよっと待ってって……」

息切れしたような雅之の声が聞こえた私は、少し意地悪したくなり、聞こえないフリをして背を向け走り出した。

暫くして、雅之の声がしないのにふと足を止め振り返る。すると、遠くの方に小さく写る雅之の姿があった。

動かない雅之にちよっと、やり過ぎちゃったかと思った私は、大声で叫ぶ。

「マ〜サ〜。どうかした〜」

私の声に反応した雅之は、軽く私の方に手を振り言う。

「何でもないよ〜。今、行くから」

走り出す雅之の姿を見ながら、私は微笑んだ。

雅之は私の所まで来ると、ゼエゼエ、言いながら芝生に寝そべる。その雅之の隣に座った私は優しく言う。

「大丈夫？ 無理するからだよ」

無理をさせたのは私だが、この時は全くそんな事感じていなかった。

そんな私と雅之の傍には大きな桜の木が立ち尽くし、静かに流れる風に吹かれ花びらを舞い散らしている。

煌びやかに舞うその薄桃色の桜の花びらに、私はふと言葉を漏らす。

「綺麗だね」

「うん……」

私の言葉に相づちを打つ雅之に、私は笑みがこぼれた。

微かに聞こえる木々のザワメキに耳を傾ける私は、この時間が永遠に続けばいいと願っていた。

そんな私の横で重々しく体を起こす雅之に、私は声を掛けた。

「無理しないで、休んでた方がいいよ」

「うん。もう、大丈夫だよ」

雅之はそう言い私に笑みを浮かべる。私もそれに微笑み返し、ゆっくり桜を見上げる。

私と雅之の間に沈黙が続く。何だか時間が止まった様な錯覚を覚える私は、不意に雅之の顔を見た。

複雑そうな表情の雅之に、私は声を掛ける事は出来なかった。

そんな時、雅之が急に口を開いた。

「安奈……」

「なに？」

平然を装う私は、いつもと同じようにそう答え雅之を真っ直ぐ見据える。

少し間が空き、雅之が言葉を続ける。

「実は……伝えたい事があるんだ……」

「伝えたい事？」

私は少し首を傾げ、顎に右手の人差し指を当てる。

平然を装う私だが、この言葉を聞いた瞬間、胸が激しく鼓動を打つ。

息を呑む私に、雅之が口を開く。

「君が好きだ」

この言葉で私はもう何も考える事は出来なかった。嬉しくて、嬉しくて涙が出そうだった。

それを、必死で堪え返事をしようとするが、声を出そうとすると涙が零れそうだった。だから、静かに雅之の右手を握り締めた。

その瞬間、私の目からは大粒の涙が流れ出た。もう堪える事が出来なかった。

だが、雅之は急に私の手を振り払い言う。

「ごめん！」

雅之は立ち上がり走り出す。そんな雅之に私は声を絞り叫んだ。

「待って！」

ゆっくり足を止めた雅之は、静かに私の方に体を向ける。

その雅之に私は抱き付き、ささやく。

「やっと聞けた……。私も好きだよ……」

「エッ！」

驚き固まる雅之に、私は軽く口付けをした。その瞬間、雅之は気を失った。

「エッ！　ちょ、ままマサ！」

始めは焦ったが、落ち着きを取り戻した私は、雅之の頭を膝に乗せ桜の木の下で目を覚ますまで待った。

その間、雅之との思い出に浸る私は、舞い降りてくる桜の花びらを何度も見送った。

暫くして、雅之が目を覚まし、

「やっと目が覚めた？」

と、雅之の顔を覗き込みそう言った。微笑む私の顔を見て、ぼんやりとする雅之に、私は心配になり声を掛ける。

「どうしたの？」

「別に、何でも無いよ」

雅之は微笑みながらそう言う。

そんな雅之をからかう様に私は言う。

「そう？ でも、キスで倒れるなんて、今度からキスできないね」

少し悲しげな表情を見せると、雅之は突然焦りだし早口になる。

「そ、そんな事無いよ！ さっきは、突然だったから」

「本当かな？」

雅之をからかう私はそう言って微笑む。私がからかっているのだと、わかった雅之はムスツとした表情を見せた。

そんな雅之を笑いながら私は言う。

「冗談だよ。そんなにムスツとしないの」

「別に。ムスツとしてないよ」

そう言った雅之に、私はもう一度口付けをした。空を舞う桜の花びらに祝福されながら、私と雅之はお互いの想いを感じた。

全ての始まりは、雅之からの間違いメールだったけど、本当は間違いメールなんかじゃなくて、あれが私達を結ぶ運命の赤い糸だったと、私は信じている。

E
N
D

安奈編 LAST MAIL 二人の想い（後書き）

遂に安奈編も完結してしまいました。如何だったでしょうか？
本編と違った視線で読む事が出来、面白かったのでは無いかと僕はそう思っております。

安奈編も長い話になりましたが、まだ番外編は続けたいと思います。これからも、よろしくお願いいたします。

番外編 健介と由梨絵の恋 前編（前書き）

今回は、健介と由梨絵がどうして付き合うようになったのかという物語を。皆様が、楽しんで頂ける様な作品になっていれば、いいと思います。

番外編 健介と由梨絵の恋 前編

私、すずかわ 鈴川 ゆりえ 由梨絵は、今年高校生になったばかり。

成績は中の中といったって普通。スポーツの方はというと、結構どんくさく走るのも遅ければ、持久力もない。

そんな私だけど、スポーツを見るのは好きで、今は野球部のマネージャーをやっている。

そして、私はここで素敵な人と出会った。

高校に入学し、もう随分と時は経ち、すでに夏休み前。

私はドジりながらも、何とか野球部のマネージャーを続けていた。ドジをしたと言っても、カゴに入れたボールを倉庫に運ぼうとして落ちているボールを踏んで転倒し全て零してしまったとか、皆が飲む麦茶を作り忘れたりとか、ちよつとした？ ミスばかり。

そんなこんなで、今日も、片付けたばかりのボールを倉庫の傍でばら撒けてしまっていた。

「はあ〜っ。今日も、やっちゃった……。気をつけてたのに……」

今日は、足元を気をつけるあまり前を見てなく、壁にぶつかったのだ。ボールを一人で拾っていると、倉庫の傍らで声がする。

聞き覚えのある男の人の声と、聞き覚えのない女の人の声。

私は何と無く興味があり、耳を澄ませる。

「お、俺と付き合つて欲しい！」

「ごめん。私、暴力的な人嫌いな」

「それなら、これから暴力振るわないから！」

「そんな事言われても、駄目なものは駄目なの……。ごめん」

女子生徒がそういい、足音が遠ざかってゆく。立ち去ったのだから。暫く沈黙が続き、叫び声が聞こえた。

「ぐっ！ な…なぜだ！ 何故なんだ！」

男子生徒の叫び声。泣いているかの様に震えた声に私は少し心配になった。

暫く叫び声が響いた後、静まり返り足音が近付いてくる。私は焦り地面に転がるボールを拾い集めているフリをする。

倉庫の傍らから出てきた男子生徒は、体格が大きくガッチリとしていて、顔は少しこわもてで私は少しビクついた。

その人は先ほどまで泣いていたのか、目が薄らと充血しており、少し元気が無い様に見えた。その人は、私に気付くとそれを隠す様に顔を背け声を掛けた。

「ひ、一人でボール拾いか？ 他の部員はどうしたんだ？」

「えっ。こ、これは私が片付けたのをばら撒けちゃって……」

いきなりの事で私は少し戸惑い、とっさにそう言う。そして、私はその人が誰か気付いた。

この人は、次期キャプテンの加藤 健介先輩だった。

初めて健介先輩と言葉を交わした私は、その顔が少し怖くあまり顔を見る事は出来なかった。

その後、私のばら撒いたボールを健介先輩と一緒に拾い集めてくれた。

それからすぐ、夏休みに入った。

夏休みに入るとすぐ、地区大会が行われた。私の高校の野球部は、

弱小と言われ毎年一回戦で負けていると聞く。

今年は何としても、一回戦を突破すると先輩達も気合を入れていた。

「言いか、相手も殆ど我々と変わらん。今回は点の取り合いになるぞ！」

顧問の先生の言う通り、試合は点の取り合いになった。そして最終回――。

十七対十六で、私達高校は負けていた。しかも、ツーアウトで、ランナー三塁、二塁。

内野を越えれば、同点の大チャンスにバッターは四番の健介先輩だった。

いつも、強気で練習も人一倍頑張っていた健介先輩は、バッターボックスの前で暫し深呼吸を繰り返していた。

「あいつなら、打てる！」

「初めて一回戦突破だ！」

「俺達の夏はまだ続くぞ！」

三年生の先輩方は口々にそう言った。私も、健介先輩なら――そう思った。

だが、健介先輩のバットはこの試合初めて空を切った。三振に終わった――。無情にも試合終了の合図が鳴り響き、勝ちを確信していた先輩達は大粒の涙を流していた。

それでも、一人涙を流さずひたすら微笑む人が居た。それは、健介先輩だった。

「先輩、泣かないでください！俺が来年は必ず、この高校を甲子園に連れて行きますから！」

「ウツ…ウウツ……」

健介先輩はひどい人だと、私は思った。悔しさとか悲しさとか、感じないのかと言いたかった。最後の打席に立って、三振したのにどうして笑っていられるのと、言いたかった。

でも、一番悔しかったのは健介先輩だったと、私は知った。

皆が帰った後、私は部室に携帯を忘れたのに気付き、取りに戻った。その時、部室で男の人の泣いている声が聞こえた。

私は誰だろうと思い、部室の窓からソツと中を覗いた。そこには、悔しそうに床を叩き泣く健介先輩の姿があった。

「グツ！ お…俺は……ウウツ……。俺は……」
「健介先輩……」

私は小さく呟いた。初めてだったかも知れない、健介先輩が号泣する姿を見るのは――。

本当に悔しそうで、さっきまでは無理に明るく振舞っていたのだとわかった。

翌日、健介先輩は昨日の事を悔やむ様に早朝から一人練習をしていた。

そんな先輩の姿に私は少しずつ惹かれて行った。

番外編 健介と由梨絵の恋 前編（後書き）

どうでしたか？ 今回は、由梨絵の視線でこの恋の物語を進めています。少々不安です。

何だか、書いていて今までとちよつと違うなあ、と感じる部分が多々あり、読者の方が楽しめているかとても不安です。

番外編 健介と由梨絵の恋 後編

夏休みが終わりに近付いた頃、私がいつもの様にボールをばら撒けていると、倉庫の裏から健介先輩の声が聞こえた。

また、告白している様だ。夏休みに入りもう五度目になる。

その度、私は振られるように祈っていた。そのおかげもあり、告白は五戦五敗と負け続けている。

そして、今回も――。

「ごめん。私、付き合ってる人がいるから」

その言葉に私は小さくガツポーズをする。それから、健介先輩の叫び声が聞こえ、暫くして倉庫の裏から健介先輩が出てきた。

流石に、六戦六敗とあり、少し落ち込み気味の健介先輩と、ばら撒けたボールを拾うフリをする私は目があった。

「今日も、ばら撒けたのか？」

「はい。今日は石に躓いて……」

「この辺に躓く様な石は無い筈だが……」

「えっ、ありますよ。ほら」

私はそう言つて近くに落ちていた小石を拾った。暫し沈黙が続く。流石にこの小石には躓かないだろ、と私は思い恥かしくなった。そんな私を見据える健介先輩は、少し元気を取り戻した様に笑いかがんだ。

「しかし、こう毎度毎度よくばら撒けるな」

「そうですね。これが、私の仕事みたいなものですから」

「ボールをばら撒く仕事なんて聞いた事無いぞ」

「そうですか？ 私はマネージャーの仕事始めてから一日も欠かさずやっていますよ」

この言葉に呆れた様に健介先輩が苦笑した。私はあの日以来健介先輩が怖いと思わなくなり、今ではこんな風に話す事が出来る。

これも、このボールばら撒き事件がきっかけなのだ。

毎日地道にボールをばら撒け続けた結果、健介先輩とこんなにも仲良く慣れたのだ。

今は私のドジっぷりに感謝していた。

それから、すぐに新学期は始まった。

私は完全に健介先輩の事が好きになっていた。皆は暴力的で怖いと言っていたが、それは真っ赤な嘘だと、しつたから。

本当は誰よりも責任感が強く、誰よりも頑張りや。それから、寂しがりやなのだ。

ぼんやり考え事をしていた。告白するか、されるのを待つか。

幾ら待っても告白なんてされないかもしれない、でも告白する勇氣は無い。

そんな考えをする日は何日か続いた。

「はあ〜っ。もう駄目〜。考えても考えても何も浮かばない……」

トイレの鏡に映る自分の顔にそう言っただけ息を吐く。そんな私はトイレのドアが開く音に、ビクツと体が跳ね上がる。

数人の女子生徒が入ってきたのだ。学年は同じ様で何処となく見た事のある様な顔の人。

「つつつか、何なのあの男」

「キャハハハッ。あんたも告白された？ 野球部のキャプテンでし

よ？」

「そうそう。マジ、あの顔は無いでしょ？」

「自分の事どう思ってるんだか」

私は彼女達のこの言葉に怒りがこみ上げてきて、涙目で叫んだ。

「健介先輩の事、何も知らないくせに、そんな事言わないでください！」

それだけ言っつて、私はトイレをすぐに出た。何か、涙が流れ出していたからだ。

何故か分からないけど、健介先輩があんな風に思われていると思うと、胸が痛んだのだ。

誰もいない校舎裏でヒソヒソと無く私の背後で、聞き覚えのある堂々とした声が響いた。

「誰かいると思ったら、由梨絵じゃないか。何してるんだ？　こんな所で」

「け……健介……先輩……」

「あん？　もしかして、泣いてるのか？　あんなにドジしても泣かないのに、珍しいな。もしかして、お前も告白して振られたか。そうかそうか。校舎裏って言ったら告白の定番の場所だもんな」

何も知らない健介先輩は私を励まそうと、明るくそう言う。

私は鼻を噉り、健介先輩を真っ直ぐ見つめる。すると、健介先輩も私の顔をジッと見つめる。

そして、意外そうな表情で言う。

「お前、よく見ると可愛いな。こんな身近にこんなに可愛い娘がいるとは、知らなかったな。俺とした事が、全く気付かないとは不覚

だ……」

そう言いながら悔しそうに頭を抱える。そしてため息を吐き方を落す。

流れる涙を拭きながら健介先輩の行動を見ている私は、黙ったまま口は開かない。

そんな私に、更に健介先輩は続ける。

「全く、残念な事する奴がいるもんだ。こんな可愛い娘に告白されて、振る奴なんているんだな」

その瞬間、私の胸の奥でしまっていた想いが、口から漏れた。

「それじゃあ……。私と……付き合つて……ください」

「はあ？ な、なんだつて？ 俺の聞き違いじゃなきゃ、付き合つてくださいだつて？ 本気で言つてんのか？」

私は健介先輩を見つめながら頷く。暫し、困ったような表情を見せる健介先輩は、

「わりい」

と、短くそう言い私の右肩を叩く。その直後、止まっていた涙がまた流れ出した。

健介先輩は焦った様子で、私の顔をみて言う。

「おい！ 何で泣くんだよ！ まだ、最後まで話してないぞ！」
「も、もついいです！」

私は泣きながら走り出す。しかし、石に躓きすぐにその場に倒れ

てしまった。

うつ伏せに倒れる私に、呆れた様にため息を吐く健介先輩が歩み寄り手を差し伸べる。

顔を隠す様にしながら、健介先輩の手を取り立ち上がった私に、健介先輩が言う。

「さっき、わりいって言ったのは、もう一度、俺の方から告白させてくれて言うためだったんだ。大体、告白なんて男から女にするもんだろ？ だからさ。俺の方から言わせて欲しい。俺と、付き合っ
て欲しい」

健介先輩は笑いながらそう言った。もちろん、私の言葉は決まっていた。

でも、上手く声が出ず、私は健介先輩に抱きついた。

番外編 健介と由梨絵の恋 後編（後書き）

どうだったでしょう？ イマイチ、分かり難かった気が……。

まあ、でも、健介の以外な部分が見られた作品になったんじゃないかと、僕はそう思います。

皆様の感想やアドバイスなど、お待ちしております。

高校三年 一学期―1 (倉田 雅之) (前書き)

今回から、告白後の物語を皆様にお届けしたいと思います。健介や和彦、その他多数のサブキャラの視線で、高校三年の一年間を送り致したいと思っております。タイトルの()の中の名前はこの物語の語り手みたいなものです。楽しんでいただければいいと思っております。

高校三年 一学期―1（倉田 雅之）

高校三年―春。

春休みも終わり、僕は遂に高校三年生になった。

二年の時と何も変わらない学校生活に担任。クラスメイトは変わったが、何故か健介とは同じクラスだった。

幸い、和彦も同じクラスのため、今年は健介とテスト勉強をしないで済みそうだ。

席は三人とも少し離れているが、休み時間は殆ど一緒に居る気がする。殆ど一緒に居ると言っても、それは健介の事であって、和彦とはあんまり一緒には居られない。

その理由は――

「キヤーツ！ 和彦く〜ん」

「和彦君よ！ 待って〜ッ」

「待ってよ〜ッ。和彦〜様」

大小様々な声が混ざり合い、廊下を走り抜けていく。もちろん、その先には和彦の姿があるのだ。

僕も健介もそんな和彦を見ながら、大変だなと呟きながら笑っていた。他人事だから、笑えるのだろうが、きっと僕が和彦の立場だったら、絶対逃げ切れないと思う。

「しかし、意外だな〜ッ」

突然、健介がそう言った。何の事が分からず、僕は軽く首を傾げた。

そんな僕の顔を真っ直ぐ見つめながら、ため息を漏らす健介は、

何だか僕の事を馬鹿にしているようだった。

少々、イラツとする僕だが、健介に力で勝てる訳も無い為、その怒りは心の奥底に仕舞い込み、

「何が意外なの？」

と、訊くとため息を漏らし呆れた様に失笑し、ため息混じりに答えた。

「お前と安奈ちゃんだよ。俺はてつきりお前の片思いだと思ってたからよ。あんな美人な安奈ちゃんが、お前の様な何のとりえも無い奴を……」

「その駄洒落は面白くないよ」

僕はそう言いながらストローを口に銜える。

そんな僕の顔を睨む健介に、僕は絶対に視線を合わさないようにしていた。

暫くして健介は根負けし、箸を進めながら言う。

「それで、安奈ちゃんとは上手くいってるのか？」

「上手くいってるも何も、以前と何も変わらないよ。毎日の様にメルして、楽しく過してるよ」

「それって、メル友のままって事じゃないのか？」

箸で僕の顔を指差す健介は、怪訝そうな表情を見せた。

ストローでコーヒー牛乳を吸いながら、僕は暫し考える。

その時、机に置いてあった携帯が激しく震え、ガタガタガタと音が響いた。

ストローを銜えたままの僕は、右手で携帯を取った。

画面には安奈の文字が入っており、僕はすぐに携帯を開いた。

「何だ？ 安奈ちゃんからか？」

「うん」

「それで、何だって？」

「別に、今何してる？ って」

「本当か？」

「本当だよ」

怪しむ目で僕を見る健介。当然、安奈がこんな短いメールを送るはずは無い。

実際は、

『久し振り〜っ。やっと、お昼休み〜。マサの学校も昼休みだよね？ 授業中だったらごめんね。早く、マサとメールがしたかったからさ』

と、言う内容のメールだった。

安奈は久し振りと言っているが、今日の朝もメールをしたので、久し振りというわけでもない。

自然と笑みを浮かべる僕は、慣れた手付きで安奈への返事を送る。

『久し振りって、今朝メールしたばかりだよ。僕の所も今は昼休みだから、メールしても大丈夫だよ』

メールを送った僕は、携帯を机に置き健介の顔を見た。羨ましそうな顔をする健介は、ため息を吐き俯いた。

訳も分らず僕が首を傾げると、健介が顔を上げ言う。

「いいよな。毎日毎日、メールでイチャイチャできて。全く、羨ましい限りだぜ」

「そう？　僕は健介の方が羨ましいよ。由梨絵と毎日会えるんだから。僕なんて会いたくても休みの日だけだよ会えるの」

「でもよ、ゆっくり話せるのは部活が終わってからだぜ。お昼だって、本当は由梨絵と食いたいけど、何かと問題があるだろ？　だから、仕方なくお前と一緒にだけだよ」

ため息交じりにそう言う健介は、苦笑しながら箸を口に進めた。ストローを銜えた僕は、呆れながらふと廊下の先に目がいく。そこには、激しく両手を振る一人の女子生徒の姿があった。それが由梨絵である事にすぐに気付いた僕は、半笑いしながら言う。

「健介の愛しの由梨絵が、向うで健介の事呼んでるよ」

「な、何！　ど、何処だ！　俺の愛しの——って、お前！」

少し頬を赤くし、健介が僕に拳を振り上げた。多分、僕の言った言葉が恥かしかったのだろう。

そんな健介に両手を軽く胸の前に広げた僕は、笑っていた。

「ほら、僕なんかの事より、早く由梨絵の方に行った方がいいよ」

「うるせえ！　わかってるさ。戻ってきたら、一発ぶん殴るからな。覚えてろよ！」

健介は席を立ちそう言うが、そんな事を僕が覚えてるわけは無い。きつと、健介もすぐに忘れるからだ。

最近は随分と、健介の扱い方にも慣れてきた僕は、ニコニコと健介の事を見ていた。

教室を出ようとした健介は、ピタッと足を止め僕の方を見て眉間にシワを寄せる。

笑みを浮かべる僕が軽く右手を振ると、健介が、

「その弁当貰っていいぞ」

と、言い残し教室を後にした。僕の机に残された、食い掛けの弁当に目を落とした僕は、啞然としながらため息を漏らした。

右手に持っていたコーヒー牛乳を机に置き、肩を落とす僕はまだ半分も残っている弁当をどうするかと考えていた。

その時、机に置いた携帯が激しく震えた。もちろん、安奈からのメールだった。

『確かに今朝メールしたけど、それっきりだったでしょ？ お昼までの時間が私にとっては物凄く長かったの。だから、久し振りに、だったの。もしかして、マサは寂しくなかった？』

このメールに少し照れくさかった僕は、テレながらも返事を返した。

高校三年 一学期―1 (倉田 雅之) (後書き)

高校三年の第一弾は、いかがでしたか？ 一応、初めは雅之の視線でお送りしましたが、楽しんでいただけましたか？

次は安奈の視線で物語を進め様と考えております。皆さんの意見や感想などを、聞かせてもらうと嬉しいです。

それから、『間違いメール 番外編』ですが、多分この高校三年編で終わりとなると思いますが、最後までよろしく願います。

高校三年になり、早一ヶ月が過ぎた。

相変わらず、雅之とはメールでのやり取りが続いており中々会う事が出来ない。

お互い忙しい時期だから、しょうがないとは思うけど、私は雅之に会いたくてもしょうがなかった。

今日も、いつも通り学校には来ているものの、心ここにあらずと、いった感じで全く授業に集中できてなかった。

昼休みに私の事を心配して、久美子と冷夏が屋上に誘ってくれた。気分を変えて屋上でお昼を食べようと言う事になったのだ。久美子と冷夏、共に違うクラスになったのに、二人ともいつも私の事を心配してくれる。

「どうしたの？ 最近、ずっとぼんやりしてるけど、あのメル友と何かあったの？」

「メル友じゃないよ。もう、私の彼氏だよ」

「はいはい。それで、その彼氏と何かあったわけ？」

「別に何にも無いよ。いつも通りだよ」

私は何事も無い様にそう言って笑った。少々、眉を顰める久美子は、冷夏の方に顔を向けた。

二人は目を合わせると軽く首を傾げた。なぜ、首を傾げたのか私には何と無く分かった。

だから、何か言われる前に口を開いた。

「最近、マサに会ってないから、少し寂しいんだよね」

その言葉を聞くなり、久美子が呆れた様に、

「何よ、それだけ？」

と、言った。

久美子はそう言ったが、私にとってはそれはとても辛い事だった。

初めての恋。

初めての彼氏。

初めて好きだといえる人。

全てが初めてで、不安だった。

本当に、私と雅之は上手く行くんだろうかと。

そんな時、私の携帯が激しく震えた。

「噂をすればって奴？」

「彼なら、心配ないですわ」

「そうかな？」

「大丈夫よ。直接会って話した事は――！ そうだ。ねえ、今度皆で会いに行かない？」

突然、思いついたように大声を張り上げ久美子がそう言う。

驚く私はあたふたとし、口が上手く回らない。

そんな中、冷夏が久美子の意見に賛同する。

「それ、いい考えですわ。私も一度会ってお話があったんです」

「そうだよ。どんな感じの奴か私達で見極めよう！」

「ちよ、ちよっと！ 勝手に話を！」

私の言葉など聞かず、久美子と冷夏は話を進める。

と、そこに先程まで居なかった人物まで加わっていた。

「おうおう。それで、いつ会った？」

「今週の日曜は？」

「あゝ。日曜日はちよつと、駄目だ。土曜日になんねえか？」

「土曜日でしたら、ワタクシ暇ですわ！」

「なら、土曜日で決定だな」

「駄目よ。私、土曜日は記録測定の日だから！」

「ちよ、ちよつと！ 何でカズちゃんまで混ざってるの！」

いつの間にか話しに加わっている和美に、私はそう言うが久美子も冷夏も全く気にしていない様子で話をする。

しかも、和美にいたっては何故か仕切り始めていた。

もう何を言っても無駄だと、私は確信した。

その後、久美子、冷夏、和美の会議により、今週土曜に雅之に会う事に決まり、私はそれをメールで送った。

高校三年 一学期―2 (鈴木 安奈) (後書き)

今回、安奈の目線で物語を進めましたが、どうでしたでしょうか？
雅之と安奈の二人の目線で物語は皆さんもう慣れてると思いますので、次回は加藤 健介の視線で物語を進めたいと思います。

雅之や安奈とは、また違った感じの物語となると思いますので、是非目を通していただけると嬉しいです。

五月になり、すぐの事だ。

いつもの様に雅之と昼飯を食つてると、いつもの様に雅之の携帯が激しく震えた。

多少羨ましがりながら、俺が雅之の方を見ていると、雅之は複雑そうな表情をしながら俺の方を見る。

箸を銜えたままの俺は、眉を顰め雅之を軽く睨むと苦笑しながら雅之が言った。

「どうしよう」

「安奈ちゃんからのメールだろ？ 何か不都合の事があるのか？」

「それがさ……」

雅之が俺に事情を説明する。

安奈からのメールで、今週の土曜日会わないかと言う事だ。

これだけなら、普通だがその後に、

『友達も一緒にだけど大丈夫？』

と、付け加えられていた。

俺は何と無く嫌な予感がしていた。今更、友達も一緒に会おうだなんて、変だと思ったからだ。

「何で、またこの時期に……」

「僕に言われても……。どうしたらいいかな？ 安奈には会いたいけど……」

ウジウジと悩む雅之に、俺はため息を吐く。雅之が悩みだすと限

が無いからだ。

悩む雅之が答えを出す間、俺はのんびりと箸を進める。

昼休みが刻々と過ぎて行く中、一向に答えを出さない雅之。何をそんなに悩むのか、分からない俺は呆れ口調で言う。

「なあ、何をそんなに悩んでるんだ？」

「だってさ。友達も一緒なんだよ？ 怖いじゃないか」

「怖いって、別に向うだけが友達呼ぶわけじゃないだろ？」

「エッ、もしかして健介、来るつもり？」

驚いたようにそう言う雅之は、来て欲しくないといった表情を見せた。

もちろん、俺は一緒に行くつもりだ。たとえ、雅之が来るなど言っても、隠れてついていくだろう。

雅之が安奈の友達に何を言われるか分からないし、いざとなれば俺が――。

拳を握り締める俺に、迷惑そうな表情の雅之がため息交じりに言った。

「でも、健介って土曜日予定があるんじゃないの？」

「何を言う！ 友達よりも大切なものなどあるわけがないだろう！」

俺のこの言葉に更に迷惑そうな表情を見せる雅之は、俺と目を合わせようとしなかった。

暫く沈黙する俺と雅之に、廊下の窓を開け和彦が声を掛けてきた。女子を振り切ってきたのか、少々息が上がっているが、ニコヤカに笑みを浮かべている。

「どうした？ 何だか暗いぞユキ」

「それがよ」

雅之に代わって俺が和彦に説明する。

説明が終ると、和彦は「そっか」と、小さく呟いただけでその後は黙っていた。

それだけかよ、と思う俺は和彦の顔を軽く睨んだ。すると、和彦が思い立ったように言う。

「よし。俺も一緒に行くよ。健介だけだと不安だしさ」

「何だよそれ！ 俺がマサの足を引っ張るとでも思ってるのか！」

「そうだね。健介はすぐに他の女に手を出しそうだからね」

「お、俺はそんな事しねえ！ 由梨絵がいるんだ！」

立ち上がりそう叫ぶ俺を両手で押さえる和彦は、相変わらず笑みを浮かべており完全に俺を茶化している。

冗談とは分かりつつも、何故か俺はカッとなってしまう。そんな俺の事を和彦は面白がっているのだ。

だから、俺は和彦の事が苦手だ。

暫く、黙って話を聞いていた雅之は、ようやく笑みを見せ口を開いた。

「ありがとう。二人とも」

「いいって。俺達、友達だろ？ 困った事があれば何でも相談に乗るし、いつでも助けてあげるよ」

俺が言いたかった事を、全て和彦に言われてしまい、俺は結局何も言えなかった。

まあ、俺も言うか悩んでた所だったし、和彦が言ってくれて本当はホッとしていた。

あんな言葉、俺には恥かしくて言えそうになかったからだ。

高校三年 一学期―3 (加藤 健介) (後書き)

今回、初めて健介の視線で物語を書きました。雅之や安奈とは違い、少々強気な健介は結構、苦手です。と、言うよりこんな感じで進めて大丈夫かなんて、思います。

ちよつと、と言うよりかなり複雑な物語の進め方ですが、色んなキャラの視線を読者の方に楽しんでもただければいいと、考えております。

高校三年 一学期―4 (川島 久美子)

安奈の彼氏『倉田 雅之』と、直接話をすべくため、私、和美、冷夏の三人は、安奈と一緒にとある駅の前に居た。

駅のすぐ目の前には噴水があり、右側には大きな時計台が見える。そう、ここは安奈が彼氏である倉田 雅之なる人物と初めて会ったあの駅なのだ。

もちろん、その事を知っているのは私と安奈だけで、和美と冷夏はそんな事は全く知らない。

待ち合わせ時間から、暫し遅れ雅之が到着した。

少し地味めの雅之の横には、モデルの様なスラッとした体型の男と凶暴そうな顔付きの男の二人が居た。

「ごめん。遅れて」

申し訳なさそうに頭を下げる雅之に、安奈が笑顔で答えた。

「ううん。大丈夫だよ」

その言葉に、雅之はホッとした様に顔を上げる。安奈と雅之は私達の事など忘れたのか、微笑みながら見詰め合っていた。

ムカツク。こんな近くであんな風にイチヤつかれると、物凄く腹が立つ。

多分、そんな事を思ったのは私だけではないと思うが、皆それを口にはしないのだ。

そんな中、初めに口を開いたのはモデルの様な男だった。

「どうも。俺はユキ、雅之の友達の白羽 和彦。よろしく」

和彦と名乗る男は私達に軽く会釈する。
すると、何を焦ったのか凶暴そうな男も自己紹介を始める。

「お、俺は、加藤 健介。マサの親友だ」

胸を張り威張るようにそう言うが、別に興味など無い。

とりあえず、適当に自己紹介を済ませてしまおうと思い、作り笑いを浮かべながら答えた。

「私は、川島 久美子。よろしく」

明るい感じの声でそう言うと、それに続くように、和美、冷夏と自己紹介をする。

「宮沢 和美だ。よろしく」

「国水 冷夏です。よろしくお願いします」

不機嫌そうな態度の和美に対し、優しく笑顔を振りまく冷夏。先が思いやられる。

静かな喫茶店に移動した私達は、テーブルを二つ並べ向かい合っていた。

気まずい雰囲気が立ち込めており、沈黙が続く。その原因となっているのは、きっと和美だと、私は思った。

実は、雅之が待ち合わせ場所に來た時、和美は眉間にシワを寄せながら雅之のことを睨んでいたのだ。

そんな中、健介が雅之に小声で話しかけた。席の近かった私はその一部始終を聞き取った。

「あの和美って娘が、お前の事ずっと睨んでるぞ。謝ったほうがいいんじゃないか？」

「えっ？ 謝るって僕何か悪い事したかな？」

健介の言葉に不安そうな表情を見せる雅之は、横目で和美の方を見る。だが、すぐにオドオドした様に視線をはずした。

きっと、物凄い剣幕で雅之を睨んで痛んだと思う。私も和美に睨まれたら、絶対に直視できないから。

「も、もしかして、遅刻した事怒ってるのかな？」

「知るか。大体、遅刻したくらいであんなに怒るか？」

「分かんないけど、それ以外思い当たらないよ」

不安一杯と言った感じの雅之は、かなり怯えているように見える。本人が心当たりの無いのは当たり前だと思うが、和美も和美だ。ただ睨むだけと言うのは、何か言われるよりも怖い。私も、あの和美の目に何度やられたか。

そんな険悪なムードの中、安奈が席を立った。そして、恥かしそうにトイレに向う。きっと緊張していたのだろう。

安奈がトイレに行くと同時に、今までただ睨んでいた和美が口を開いた。

「私は、あんたが安奈と付き合うなんて認めない」

「和美！」

和美の隣に座っていた冷夏が叫ぶ。そして、雅之の横に座っていた健介が、何故か目付きを変える。

一方、雅之は表情を変えず笑みを浮かべながら和美に言う。

「ごめん。僕も、わかってるんだ。安奈と不釣り合いだって事は……」

「だったら、今すぐ別れてくれ」

「ちよつと待てよ！ 何でお前が二人の事に口出しするんだ！」

テーブルを右手で叩き健介が立ち上がった。その音は店内に響いた。

客も店員も私もその音に驚いた。睨み合う和美と健介の二人は激しく火花を散らせる。

「安奈は、私の大事な親友だ。運動も出来なきや勉強も出来ない駄目人間なんかと、安奈と一緒にしたくネエ！」

「ちよつと、和美言いすぎだよ！」

何とか止めようと私はそう言う。だが、そんな事和美が訊く分けなかった。

「大体、あんたなんかが、安奈に告白するのがありえないんだよ！」

「待てよ！ 好きな人に告白するのが、行けない事だって言うのか！」

「お前は黙ってる！ 私はこいつに言ってるんだ！」

和美は雅之を指差して言う。完全に周りの事など見えていない和美は、本来の目的である事を忘れていた。

私達は雅之に会って話をする事が目的だったのだが、もう話をする余裕なんて無かった。

冷夏も私も和美を止めようとしたが、全く止める術はない。そんな時、雅之が口を開いた。

「健介。もう良いよ」

「お前、好き放題言われて悔しくないのか！」

「でも、運動も勉強も出来ないのは本当の事だし、身長だって安奈

より少し小さい。安奈に相応しくないとて言うのは、僕が一番よくわかってるんだよ」

「だからってな」

少し落ち着きを取り戻した健介が雅之を心配そうに見据える。

一方の和美は一向に怒りをむき出しにしている。そこに、何も知らない安奈が戻ってきた。

その後、言い争いは無かったかの様に静まりかえり、また沈黙だけが続いた。

雅之と一緒に安奈とその友達、久美子、和美、冷夏と会っていた。安奈はトイレに行っていたため知らないが、今物凄い険悪な雰囲気だ。気が漂っている。

和美に色々言われたためか、大分肩を落としている雅之。そんな雅之を心配する健介。

雅之を睨み付け、未だ怒りの覚めやらない和美。笑ってその場を和ませようとする冷夏。

申し訳なさそうな態度の久美子。

沈黙の漂うこの場に困った表情をする安奈。皆、色々な表情を見せていた。

そんな俺も、少しばかり雅之が心配だった。

確かに他から見れば雅之と安奈は不釣り合いかもしれない。だが、それは、二人の事をよく知らない人が見た場合だ。

俺は、雅之の事もよく知っているし、安奈の事もおよそは分かっているつもりだ。

だから、分かる。二人は本当にお似合いだと。

「ねえ。外行かない？ 何だか空気が重いつて言うか、雰囲気変えたいって言うか」

苦笑する久美子が、その場をどうにかしようとそう切り出した。その意見に返事をしたのは安奈だった。きっと、この空気をどうにかしたいと思ったのだろう。

「そうだね。公園でも行つて外の風に当たろうか」

両手を合わせながら明るく笑顔を見せる。

無理に笑っているのが分かるが、そこは触れずに俺もその意見に賛成する。

「まあ、こうして黙っているよりも、外で気晴らしでもしたほうがいいかもな」

「そうだよな。和彦君もそう言ってるし。さあ、行こう！」

安奈がそう言うと、洪々と言った感じで皆が席を立つ。

和美はその間も雅之を酷く睨んでおり、更に空気は重くなる。

「僕が、ここは払うから、皆は先に行つてよ」

「エッ。そんな、悪いよ。ワリカンで良いよ」

「いいって。この位なら、僕のおごりで」

雅之と安奈がレジでそんなやり取りをしていた。

無理して笑顔を作る雅之に、安奈が少し困った様な表情を作った。洪々、安奈は雅之に会計を任せ、外に出てきた。その間も沈黙するメンバーを見回し、俺と安奈の目があった。

チラチラと雅之の方を気にしながら、安奈は俺の方に足を進めてきた。

不安そうな安奈に俺は何食わぬ顔で言う。

「どうかしたのか？ 不安そうな顔して」

「何だか、マサの元気が無い様な気がするの。私がトイレに行ってる間に何かあった？」

どうするか迷った。

本当の事を話すか、話さぬか――。

「特に何も無かった。多分、寝不足なんだよ。久し振りに鈴木に会

えると思つてさ」

「そうかな？」

「ユキはそう言う奴さ」

あからさまな嘘をついた。

本当の事を言えば、安奈はその後雅之と会つても、和美が雅之に言つた事を氣遣うだろう。

雅之にしても、折角安奈と一緒に居られるのに、毎度氣遣つてもらうのは辛い事だと、俺は思う。

その為、俺はここで嘘をついたのだ。

「でも、寝不足なら、そう言つてくれればいいのに」

「心配掛けなくなつただけさ」

俺はそう言つて軽く微笑んだ。安奈はそんな私に笑みを返しさつと、久美子、和美、冷夏の三人のもとへと戻つていった。

俺と安奈が話していたのを、聞いていたのか、健介が急に声を掛けてきた。

「なあ、本当の事言わなくて良かったのか？」

「何だ？ いきなり」

不満そうに俺がそう言つと、健介も不満そうな表情をして言つ。

「さっきの話した。悪いのは和美とか言う奴だぞ。何で本当の事言わないんだよ」

「本当の事を安奈に話しても何にも変わらないし、ただユキと安奈の関係が崩れるだけの氣がしたからかな？」

「かな？ って、曖昧だな……」

「まあ、和美つて娘も悪氣があるわけじゃないんだよ」

笑いながら健介を見る。複雑そうに顔を歪める健介は、ため息を吐き首を左右に振り言う。

「俺には悪気の塊の様に見えたがな」

「そう？ 俺には、安奈の事を守る親父さんに見えたけど」

「親父って、あいつは女だぞ？」

健介の言葉に俺は少し呆れて、ため息混じりに答えた。

「たとい話だろ？ それに悪気の塊って言うのよりは分かり易いと思うけど？」

「俺は、感じたまんまに言っただけなんだがな」

和美の方を見ながら健介はそう言う。

相変わらず和美は、雅之の事を睨み付けていた。

喫茶店を出て、公園に来ている。

静かで殺風景な公園。

小さな滑り台。

小さなブランコ。

小さなシーソー。

小さな水飲み場。

小さな砂場。

全て小さなこの公園の結構広々とした芝の上に、私は腰を下ろした。

無意識にため息を漏らし、安奈を見る。楽しそうに倉田 雅之と言う駄目男と話をしている安奈に、私はもう一度ため息を漏らした。喫茶店で何故、あんな事を言ったのか分からなかった。ただ話しをしに来ただけなのに、どうしてあんな酷い事を――。

後悔する私は、またまた大きなため息を吐いた。

「大きなため息吐いちゃって。まさか、喫茶店での事今更後悔してるの?」

久美子が笑顔でそう言いながら私の横に腰を下ろした。

その横には冷夏も一緒に、冷夏が続けざまに言う。

「少し言い過ぎですよ。幾ら、安奈の事を想っていてもあれじゃあ」

「わかってる。私も分かってるんだ。けど、何かあいつ見てるとさ」

そう言い、安奈の傍に居る雅之を見る。その目は自然と厳しい目になる。

そんな私の顔を見るなり、冷夏が呆れた様に言う。

「ほら。また目が鋭くなってますわ」

「まだ、話もしていないのに、そんな嫌わなくても良いじゃない」

「分かってるよ。たださ、何であんな奴を安奈は好きになったんだろうつてさ」

当然の様な私の考え。

勉強もスポーツも容姿も全て安奈に到底及ばないあの雅之の何処に、安奈は惹かれたのだろう。そう考えると、次第に先程の怒りが戻ってくる。

「アーツ！ 駄目だ！ マジムカツク！ 何であんな奴に安奈を奪われなきゃいけないんだ！」

「奪われるって……。あんたは安奈の親か」

久美子もまた呆れた様にそう言う。そう言われた瞬間、私も怒りがスツとひいた。

そして、ため息が毀れる。肩を落す私はもう一度安奈に視線を送る。

すると、安奈が視線に気付き振り返り、

「ねえ！ そんな所に居ないで皆で話そうよ」

と、両手を振りながら叫ぶ。もちろん、私は行きたかったが、安奈の傍に雅之が居たため遠慮した。

遠慮したと言うよりも、あんな酷い事を言って顔を合わせることなんて出来るわけが無かった。戸惑いの表情を浮かべる私に、冷夏が心配そうに声を掛ける。

「和美は、行かないの？」

「ああ。あんな事言った後に、顔を合わせられない。取り合えず、気分が優れないから、休んでるって伝えといて」

苦笑しながら、私がそう答えると、久美子が落ち着いた感じの声で言う。

「それじゃあ、安奈にはそう伝えとく。気持ちが悪く落ち着いたらあんたも来なさいよ」

「落ち着いたら行くよ」

私はそう言い、久美子と冷夏を見送った。

ふと空を見上げた私は、いきなり声を掛けられた。

「隣、良いかな？」

その声の主は、雅之の友達のと彦だった。優しく微笑むと彦が、私の横に腰を下ろす。

私は顔も見ず、暫し俯き地面ばかりを見つめていた。そんな私に、と彦が雅之を見ながら静かに口を開いた。

「君は、どうしてユキの事を嫌うんだい？ あつ、ユキって雅之の事」

突然の質問に、私は少し戸惑った。どうして、そんな事を聞くんだと、思ったからだ。

それでも、私の答えを待つ様に、と彦は黙ったまま前を見る。長い間が空き、私は澁々と答えた。

「嫌いって訳じゃない。ただ、安奈にはもっと良い人と一緒になっ

て欲しいんだ」

「それじゃあ、君の言う良い人ってどんな人なんだ？ 勉強の出来る人？ スポーツの出来る人？ それとも、容姿が良い人かな？」

「な、何だよ。あんた、何が言いたいんだ！」

何と無く、和彦の言いたい事は分かっていた。だけど、私は怒鳴っていた。無意識の内に。

頭では分かっているつもりだけど、心ではそれを認めたくないと思っているのだろう。だから、喫茶店でも――。

私のそんな思いを知ってか知らずか、和彦が言った。

「宮沢さんが、鈴木のことを大切に想うのはよく分かるよ。でも、鈴木は今ユキを大切な人だと思っているんだ。だから、君はそれを遠くで見守って欲しい。それから、これは俺の単なる思い込みかもしれないけど、言うておくよ。鈴木とユキは、お似合いのカップルだ」

「何、熱く語ってんだよ。大体、何を根拠にお似合いのカップルなのよ」

和彦の話を聞いている私が、何だか恥かしくなり少し頬を赤くしながらそう言った。

そんな私は、和彦は軽く笑い言った。

「鈴木もユキも相手を思いやる優しさがあるからね。きっと、上手く行くと思うよ。だからさ、俺達はそんな二人の恋を遠くで見守ろうよ」

和彦のその言葉を聞いた私は、立ち上がり早足で歩きだした。もちろん、その先には雅之の姿があった。私は安奈の横を通り、その傍に居た雅之の腕を掴んで歩き出す。

「わわわわわっ」

急に腕を引つ張られ、雅之は驚いたように声を出した。

安奈も驚いたような表情をしており、私は足を止めずに言った。

「安奈。ちよつと、こいつ借りるよ!」

「エッ。借りるって、何処行くの」

「ちよつとは、ちよつとだよ。すぐ戻ってくるから」

私はそれだけ言つて、公園の裏手に回った。安奈も追つてきていない様だし、私は雅之の腕を離す。

戸惑つた様な表情を見せる雅之は、私とは一切目を合わさず、オドオドとしている。

まあ、喫茶店であんな事を言ってしまったのだ、しょうがないのだけれど。

そんな雅之を見ながら、私は口を開いた。

「私はあるたを認めない」

「う、うん。それは、前に」

「けど、安奈があんたを想うから、私は暫くあんたに安奈を任せる。でも、もしあんたが安奈を泣かしたら、私はあんたを許さない」

少々脅す様な形になったが、雅之はキョトンとした表情で私を見て何だか嬉しそうに笑みを浮かべた。

そして、申し訳なさそうに言う。

「僕、勉強もスポーツも容姿も良くないけど、君が安奈との事を認めてくれるように、頑張る」

。その瞬間、分かった気がする。安奈が雅之を好きになった理由が

和美が雅之を連れて行つて数分がたった。

未だ戻らない二人に、不安になりつつある安奈は、落ち着きが無くオドオドとしている。

健介も少しばかり落ち着かない様子でウロウロとしていた。

一方の和彦は、落ち着いた様子でニコヤカに笑いながらそんな二人を見ていた。

「ネエ、マサとカズちゃんちょっと、遅くない？」

落ち着きの無い安奈が私と久美子の方を見てそう言う。私も久美子も苦笑しながら、それに同意する。

その時、向こう側から和美と雅之が戻ってきた。その手には人数分の缶ジュースを持って。

二人に駆け寄る安奈の後姿を見据える私の耳に、健介の声が聞こえた。

「なあ。お前、あいつに何言っただんだ？」

「何の事だ？」

和彦と話をしている様だった。私も何を言っただか気になってその会話に耳を傾けていた。

惚けた口調の和彦に、少し強い口調で健介が言う。

「さつき、あいつと話してただろ？」

「そうだね。ちょっとした世間話を」

「本当かよ。世間話したくらいで、ああなるか？」

私も健介の意見に賛成だ。ただの世間話で、あんなに毛嫌いしていた雅之とジューズを買いに行くだろうか？

私がそう思っていると、久美子が話しかけてきた。

「あの二人、何かあったのかな？」

「さあ？ どうなんでしょう？」

「でも、これで一件落着いて感じ？」

「そうですね」

頷き私は微笑んだ。暫くして、和美と雅之が買ってきた缶ジュースを配った。

芝生の上で円になり座り、私達は乾杯した。そして、喫茶店の時とは正反対の明るい雰囲気では話が盛り上がった。

「だよな。普通、間違いメールからメル友に発展しないよな」

「そうそう。大体、間違いメールに返事を送るって言うのもどうかと思うわよね」

酔っ払ったように大笑いしながら健介と久美子がそう言う。それに対し、安奈が反論する。

「何よ！ 元々、メル友になろうって送ったのは久美子じゃない！ 面白がっちゃって」

「でも、そのおかげで、今は彼氏でしょ？ 大体、あんた最初、オタク系だったらどうするのよとか騒いでたでしょ！」

反論した安奈に、久美子が噛み付く。

「大体、私が居なきゃあんた達、付き合う事はなかったんだからね！」

「そうなんだ。それは、どうもありがとうございます」

安奈に噛み付く久美子に、丁寧に頭を下げた雅之。そんな雅之の肩を叩き、大笑いしながら言う。

「そう、そうよ。私にもっと感謝しなさい。あなた達の愛のキューピットよ」

「わかった。わかったから、もうちょっと静かに！」

「安奈。あんたは、分かってないわ。大体——」

鈍い音が辺りに響いた。それは、和美の一撃が久美子を直撃したのだ。

崩れ落ちる久美子の体は芝生の上に横たわり動かなくなった。完全に気絶したのだ。

「く、久美子！ 大丈夫！」

私の呼びかけに久美子は答えず、代わりに和美が答えた。

「五月蠅い。少し黙ってる」

「それは、ちょっとやりすぎだろ？」

「これくらいやらないと駄目なんだよ」

健介の言葉に、和美は静かにそう答えた。

その場は一瞬にして静まり返ったのだった。

それから、色々な話をした。楽しくおかしな話を。

時が止まったように話し続け、いつしか夕暮れになっていた。

「楽しい時間はあっという間ですわね。喫茶店では長く感じましたが」

「そうだね。今日は、楽しかったよ。また、こうしてみんなであえるといいネ」

雅之が笑顔でそう言った。そして、私達女子四人は、雅之達と別れた。

その雅之の後姿を見ながら、安奈は嬉しそうに微笑んでいた。

あれから、随分と時が過ぎ、夏休みが目前まで迫っていた。今年は中間、期末とまあまあの成績で夏休みの補習は無い。健介も、赤点ぎりぎりで何とか補習は免れたが、二期はもつと頑張れと先生に言われたらしい。

本人はあんまり気にはしていなかったが、由梨絵の方は随分と心配していた。

和彦はもちろん殆どトップの成績で中間、期末と乗り切っていた。やっぱり、和彦は凄いと感心するしかない。

そんな事を思いながら、一人部屋でボーッとしていた僕は、突然の着信音にビククリしてイスごと床に倒れた。

頭部が床にぶつかり大きな音が響き、隣の部屋の恵利が驚いた様子で大声で叫んだ。

「お、お兄ちゃん！ な、何今の音！」

僕は頭を擦りながら、ドアを開け廊下に顔を出して言う。

「何でもない。ちょっと、受身の練習を――」

我ながら下手な言い訳だ。

だが、恵利はそんな下手な言い訳を鵜呑みにする。

「受身の練習？ こんな時間にやら無くても良いでしょ？」

「う、うん。分かってるよ。もうしないから」

「それから、お風呂は早めに入ってよ」

「わかった。あと少ししたら入るよ」

そう言って僕は部屋に戻った。未だ疼く頭部を押さえ、僕は携帯を手に取った。

その画面には、和彦と名前が出ていた。和彦からのメールなんて滅多に無かったため、少々ビックリしたが、その内容に目を通した。

『今日、学校で言うつもりだったんだが、夏休みの予定とかあるか？もし暇なら一週間くらい内のおじさんのやつてる旅館に泊まりに行かないか？ちょっと、人手が足りないらしくてさ。恵利ちゃんが心配なら、恵利ちゃんも一緒に来ればいいし、手伝うのは午前中だけで午後は近くにビーチがあるからそこで遊べるし。別に、忙しいならいいんだけどな』

珍しく困ったような和彦のこのメールに僕はふと言葉を漏らした。

「珍しい……」

暫く携帯を握ったまま固まっていた。今まで和彦には何度も助けてもらっていたし、今回は助けて上げたいが両親は何ていうだろうとふと思っていた。

滅多に家に帰ってこないし、話をする機会なんて無い為、取り合えず恵利にこの事を話そうと部屋を出た。

恵利の部屋の前に立つ僕は、右手でドアをノックする。暫くして、恵利がゆっくりとドアを開いた。

「何？ あっ、まだお風呂入ってないじゃない。もう、お兄ちゃんのと少しはいつなのよ」

「あゝっ。入るよ。入る前にちょっと、相談をしようと思ってさ」

「相談？ お兄ちゃんが？ まさか、安奈さんと何かあったの？」

「いや、安奈とは順調だよ。実はさ――」

僕は和彦からのメールを恵利に見せた。恵利は「ふ〜ん」なんて言いながら頷きニツコリ笑った。

そして、嬉しそうに口を開いた。

「良いじゃない。行こうよお兄ちゃん。健介さんや安奈さんも誘って」

「な、ななななんて安奈もなんだよ。健介はともかく」

戸惑いながら僕はそう言い慌てる。だが、恵利は僕の言葉など聞かず、自分の携帯を片手に安奈へメールを送信していた。

そして、すぐに僕の携帯の方に返事が返ってきた。

『うん。大丈夫だよ。夏休みは暇だから。カズちゃんや冷夏も一緒に良いかな？ 人では多いほうが良いでしょ？ それから、久美ちゃんだけど、まだ予定が分からないらしいんだ。でも、多分いけるとか。楽しみだね。今年の夏も海に行けるなんて』

「ほらね。安奈さんも嬉しそうだね」

恵利が僕の携帯に送られてきた安奈からのメールを見ながらそう言った。

確かに嬉しそうだけど……。まだ、和彦に何の連絡もして居ない事を恵利に告げた。

その瞬間、慌てだし大騒ぎし始めた。

「えっ、えっ！ それじゃあ、和彦さんには何も連絡してないの？ 何で先に言ってくれないのよ！」

「言う前に恵利が安奈にメールしたんだろ？ それに、恵利に相談してから和彦にはメールしようと思ってたのに」

「じゃあ、何で最初に言わないのよ！」

恵利が怒鳴る。

僕に非があるのは認めるが、恵利にも責任がある。ちゃんと、人の話を最後まで聞かないから。

まあ、そんな事を言えば他に何を言われるか分からなかったため、僕は仕方なく謝った。

「ごめん」

「さあ、謝ってないで、和彦さんにメールして！」

「う、うん」

圧倒される僕は渋々と和彦にメールを送った。内容はこうだ。

『和彦。ちよつと、手違いがあつてさ、安奈や和美と冷夏も一緒になつちやつたよ。久美子は来れるかわかんないらしいけど、来るとは言ってるんだけど、迷惑だよ。ごめんね。和彦に言つつもりだったんだけどさ——』

ため息を吐きながらメールを送信し、恵利を見る。未だ慌てた様子で部屋を駆けずり回っており、僕は何度か恵利に叩かれた。

何で叩かれたのか分からないが、その理由を聞く勇氣は僕には無かった。

暫くして、僕の携帯が着信音を大きく鳴らせた。和彦からのメールだった。

『やっぱり、ユキに言って正解だったよ。人手が足りないと聞いてすぐに鈴木に連絡するとは、流石だな。あとは、健介だけだな。由梨絵に言えば、健介来るだろうか？ それから、部屋の心配はするな。おじさんがちゃんと用意しているから。それじゃあ、また追々連絡するから』

結構軽く了承した和彦。これはこれで、良かったんだなと、僕は安堵の息をつく。

そんな僕に、恵利が迫るように近付いてきて言う。

「な、何だって？　もしかして、怒ってた？　うっ。どうしよう」

「大丈夫だって。逆に感謝してたよ」

「ほ、本当。よかった……」

「さあ、気分も落ち着いたし、僕はお風呂に入ってくるよ」

気が晴れ安心した僕は、そう言い軽い足取りで部屋に戻り、着替えを持って風呂場に急いだ。

その後、ゆっくりと湯船に浸かり夏休みの事を思い浮かべていた。

高校三年 夏休み―1 (鈴木 安奈)

一学期があつと言う間に過ぎ、早くも夏休みに突入した。

そして、私は久美子、和美、冷夏の三人とまたあの駅前に来ていた。

旅行鞆を足元に置き、何度も携帯で時間を確認する。朝も早いめ、人気はさほど無く、静かだった。

「まだ眠いよ……」

久美子が眠そうに目を擦りながらそう言う。

その様子に呆れた様な表情を見せた和美が半笑いしながら言う。

「お前、何時にねたんだよ」

「うゝん。四時くらいかな？ 中々眠れなくて……」

「浮かれすぎだろ」

ため息を吐いた和美は右手を額に当てた。

そんな会話の後、遠くで恵利の声が聞こえた。声のする方に顔を向けると、恵利が右手を大きく振りながら走ってきて、その後では二人分の荷物を持った雅之の姿があった。

「安奈さゝん。久し振りです」

「そうだね。久し振りだね」

「この娘は誰ですか？」

「あつ、私、倉田 恵利です。お兄ちゃんが色々お世話になってます」

「そうですの。雅之さんの」

恵利が丁寧にお辞儀をし、冷夏もお辞儀を返した。
雅之は、荷物を足元に置き息を荒げながら私に訊く。

「あれ……。和彦は？」

「まだみたいだよ」

「そっか。健介もまだ見たいだし……」

雅之がそう言った直後、健介のがらがらの声が響いた。

「オーツ！ 皆集まってるな！」

振り返ると健介が笑いながら手を振っていた。その隣には由梨絵の姿もあり、ニッコリと微笑んでいた。

久美子、和美、冷夏の三人は少し驚いていた。何であんな男に彼女が居るんだと。

初詣以来だが、由梨絵は少し綺麗になった様な気がする。

「久しぶり、由梨絵ちゃん」

「お久しぶりです。安奈さん。初詣以来ですね」

「そうだね。元気だった？」

「はい。元気でした」

私と由梨絵はそんな会話で盛り上がっていた。暫くして、和幸がやってきた。小型バスに乗って。

私達は荷物をバスに乗せ、バスに乗り込んだ。

結構、車内は広々としていて、快適だった。私はもちろん雅之と隣りあわせて座った。

その後には、恵利と由梨絵が座って、何故か健介は一人ぼっちに取り残されていた。

「いいの？ 健介と一緒にじゃなくて」

雅之が寂しそうにしている健介を気遣って由梨絵にそう聞いたが、由梨絵は笑顔で答えた。

「帰りは隣に座るんで大丈夫です」

そう言う問題じゃないと私は思ったが、何だか面白かった。
私が笑っていると、恵利が不思議そうに訊く。

「そう言えば、前々から訊こうと思ってた事なんですけど、安奈さんはお兄ちゃんの何処に惹かれたんですか？」

「エッ、何処って……」

「アーッ。私もそれ気になってた。何で今まで聞かなかったんだろっ？」

などと、久美子が不思議そうに首を傾げる。何故か私に集まる皆の視線。

私の頭は混乱し考える事が出来ず、頭の中が真っ白になった。

その後、何と言ったか覚えていないが車内に笑いが起きたのだけは覚えている。

高校三年 夏休み―2 (加藤 健介)

数時間後、俺達は和彦のおじさんのやる旅館に到着した。

少々古びた感じの佇まいは、昔ながらの味を出しており、代々続いてきた旅館と言う感じをかもち出している。

外から見た感じじゃ分らないが、中は広々としており床はピカピカに磨かれ、下を向いたら自分の顔が映るんじゃないかと思うほどだった。

こんな場違いな所で、俺なんか手伝いなんてやっていけるのか
と思い不安を募らせていると、背後から雅之が声を掛けた。

「どうかした？ 急に黙り込んで」

「べ、別にどうもしねえ」

少し強気な口調でそう言ったが、声が少し裏返ってしまった。しまったと思った時には、既に笑いが周りを取り巻いていた。

恥かしくなり汗顔する。そんな俺の肩を叩いた和彦は、笑いながら言う。

「そんなに緊張する事ないさ。健介は風呂掃除とか裏方だから。そんなに難しい仕事じゃないよ」

「わ、わかってるさ！」

少し慌てながらそう言うが、未だ皆の笑い声が微かに聞こえていた。取り合えず、荷物を自分達の部屋に運んだ。俺は、雅之と二人部屋で、結構広々としていた。

窓から見える海がまた綺麗で、静かに聞こえてくる波の音なんて本当に最高だった。鞆を隅に置いた俺は、早速渡された指定の服を身にまとった。

雅之はのん気にお茶を啜りながら、服を着替える俺に不思議そうに訊く。

「あのさ。何で着替えてんの？」

「はあ？ 何でって、これから仕事手伝うんだろ？」

「ううん。仕事を手伝うのは明日からだけど？」

軽く首を左右に振り、そう言った。もちろん、俺は慌てた。

完全に今日からだと思いついていたからだ。俺はすぐに大声で笑った。

そんな俺を訝しげに見据える雅之は、ゆっくりと口を開く。

「もしかして――」

俺は雅之が最後まで言い切る前に、その場を乗り切ろうと更に大声で笑い、

「又ハハハハッ。じよ、冗談に決まってるだろ！ 又ハッ、又ハハハハッ！ 俺が知らないわけ無いだろ？ お前を騙そうとしたんだよ。軽いドッキリさ」

と、言い放った。もちろん、雅之がそんな簡単な言い訳で納得するはずも無く、更に目を細め怪しむように俺の顔を見る

額に薄らと汗をかき始めていた俺が、笑い続けていると、雅之がゆっくり口を開く。

「本当かな？ 第一、健介って又ハハハハッて笑ったっけ？」

「又ハッ、又ハハッ。当たり前じゃないか！」

「それじゃあ。今度、由梨絵に聞いてみるよ」

「わっ、ま、ま待て！ それだけは、勘弁してくれ！」

「冗談だよ。冗談。冗談に決まってるじゃないか。ハハハハハッ」

冗談と連呼しながら雅之はお茶を啜った。まあ、雅之は案外口が堅いから信用していいと俺はホッとして普段着に着替えなおした。暫しテーブルを挟み向かい合っていた俺と雅之は、老夫婦の様に
お茶を啜っていた。

しかし、こうして雅之と二人になると、中々喋ることが見つからないものだと、感じた。

沈黙が続いた後、急に雅之がピタッと動きを止めた。電池を抜かれたおもちゃの様にジッと動かない雅之に、俺は少し不気味に思った。

意外と俺って雅之の事知らなかったんだと、思った。それから、数分後、雅之が欠伸をしてまたお茶を啜った。俺は少し気になり訊く事にした。

「なあ。さっき何してたんだ？」

「さっき？ さっきって？」

「何か急に動きとめただろ？」

「ああ。あれね。ちよつと、心配事があつてさ、それを考えてたんだ」

ニコヤカに笑いそう答える雅之は、またお茶を啜った。

「それで、考え事って、安奈ちゃんの事か？」

「うーん。まあ、それもあるけどさ……」

苦笑しながら雅之が頭を掻く。俺は首を傾げ更に訊く。

「それ以外って、何か問題でもあるのか？」

「それがさ。僕、仕事で何故か調理場任されてさ……。まあ、食器

洗い位だと思うけど、僕なんかが調理場なんて入っていいのかなってさ」

俺はその言葉に啞然とし、呆れた様にため息を吐き言い放つ。

「何だよ。そんな事かよ……」

「そんな事って、僕にとっては一大事だよ……」

「その割りに、落ち着いてるんだな」

「まあ、決まった事だし、食器洗いだけならって思ってるから……」

「それじゃあ、いいんじゃないか？ それに、お前、料理だけは得意だろ？」

「だけは余計だよ……」

落ち込んだ様に雅之はそう言いたため息をもらした。

高校三年 夏休み―3 (川島 久美子)

翌日、私達は早速旅館の手伝いをする事になった。

私は和美と一緒に温泉の掃除を担当させられ、早速ブラシを持って掃除をしていた。安奈と冷夏は接客業の方に回され、和彦と健介が力仕事、恵利と由梨絵が外回りの掃除をしている。雅之は一人調理場に回され、皿洗いやらゴミ捨てやら雑用を負かされている。

滑りやすい足場に気をつけながら汚れを落としてゆく。初めは黙々と進めていたが、徐々に集中力が途切れ始め、

「あゝっ。めんどくさい！ 早く午後にならないかな」

などと、口走っていた。意外に真面目な和美は文句一つ言わず、少し怠け気味の私に言う。

「あんた、さつきから口ばかり動いてるぞ！ チャツチャと手を動かしな」

「わかってるわよ。全く、真面目に掃除なんかしちゃってさ」

「私は、あんたと違って真面目なの」

私の方を向かずブラシでタイルを磨きながら和美がそう言った。不貞腐れる私は、ブーブーと言いながらもブラシでタイルを磨いた。

二時間ほどで広々とした温泉の男湯女湯両方を掃除し終えた私と和美は、暫しの休憩時間を頂いた。

自分達の部屋に戻り、私は畳みの上に仰向けに倒れこみ息を吐いた。

「はふっつ。疲れた……」

「疲れたって、まだ半分も仕事やってないぞ」

「ヘッ！ そうなの？」

「この後、床磨きがあるでしょ」

「はへっ。嘘でしょ」

「あんたに嘘ついて何の得があるのよ」

和美はそう言って呆れた様にため息を吐いた。

十分間の休憩の後、私と和美は床磨きの仕事に移った。

広々とした旅館内の隅々まで綺麗に磨いてゆく私達の元に、恵利と由梨絵が外回りの掃除を終えて駆けつけてきた。

「外回り済んだんで、私達も床磨き手伝いますね」

「ありがとう。助かるよ」

目に涙を浮かべながら私はそう言った。恵利も由梨絵も楽しそうに床を磨き始めた。

こうしていると、小学校の頃の雑巾掛けを思い出す。よく、みんなで競争した事を。

「ねえ、恵利と由梨絵は、小学校の頃競争とかしなかった？」

「競争？ 何のですか？」

私の言葉に不思議そうに由梨絵が聞いた。

あれ？ と思いつつ私は当然の様に言う。

「雑巾掛け競争だよ。やった事ない？ 端から端まで走っていくやつ」

「私の通ってた小学校って、モップだったんで競争とかは……」

「私の所もモップでした」

由梨絵も恵利も申し訳なさそうにそう言った。

私は世代の違いを何と無く肌を感じた。

それから、時は経ち正午。お昼の時間が回った。私達は皆合流し食堂に来ていた。

皆と言っても雅之以外だ。雅之はまだやる事があるらしく、今はまだ合流できないそうなのだ。

少し落ち込んだ様子を見せる安奈だが、皆を心配させないようにと笑顔で振舞っていた。

「今日は疲れた。もう、動けない……」

私はテーブルに凭れながらそう言っていると、和彦がすまなそうに言った。

「ごめんな。コッチの事情で色々と扱き使って」

「いいって、あいつの場合はもっとと扱き使っても」

「かゝずゝみゝ。私は奴隷じゃないんだぞ」

私は和美に向って自分の出る一番低い声でそう言った。

そんな私達に、調理場から出てきた男の人が全員分のコップと冷たいお茶を運んできた。

「お疲れ様」

男の人がそう言ってコップを置くと同時に安奈が悲鳴に近い声を上げた。

「ま、マサ！」

その声に、皆顔を上げた。以下にも板前見習いの様な格好の雅之

の姿は、別人の様な印象があつた。

驚き目を丸くする私達に、ニコヤカに微笑む雅之は首を傾げ、

「どうかした？」

と、一言言つた。

その言葉にすぐに答えたのは安奈だつた。

「凄い、似合つてるよ！」

「そ…そうかな？」

安奈の言葉に恥かしそうに頭を掻く雅之。確かに今の雅之の服装は似合つていた。

料理のできる男つて感じの雰囲気をかもちだしていたのだ。恵利もその姿には流石にビックリして言葉も出なかつたらしい。

暫くして、雅之はすぐに調理場に呼び出され戻っていったが、何だか生き生きしているように私は見えた。

「しかし、マサの奴、似合つてたな」

「そうですね。倉田先輩、こういう仕事向いてそうですね」

健介の言葉に笑顔で賛同する由梨絵。この二人は昨日からベタベタしていて、見ているだけで無償にイライラする。

まあ、それは私のただの僻みなのだが……。

「それより、お昼はまだなのか？」

和美が少々不満そうにそう言うと、和彦は時計を見て不思議そうに首をかしげた。

「可笑しいな。いつもなら、この時間はお昼なんだけど……。何かあったのかな？」

「おい。マジかよ。コッチは空腹で死にそうだって言うのに」

「でも、何でもお腹を空かせて食べた方がより一層美味しく頂けますのよ」

落ち着いた口振りで冷夏がそう言つと、和美も小さな声で「まあ、それもあるけどよ」と呟いた。

私もさつきからお腹が鳴りっ放しで、もうそろそろ限界を迎えそうだった。

そんな時だった。調理場から雅之が料理を運んでやってきたのは。

「お待たせ。何だか時間掛かつちゃって」

笑みを浮かべながらオカズの盛つてある皿を皆の前に置き、御椀とご飯の入った桶の様なものを運んできた。

雅之は御椀にご飯をよそつて皆に回した。そして、皆手を合わせて「いただきます」と言つてからご飯を食べ始めた。

午後。

皆は颯爽と海に行く準備を済ませ、海に出て行った。

雅之は、まだ少し仕事が残っているらしく、俺は雅之を食堂で待っていた。

もちろん、安奈も一緒だった。何だか嬉しそうな安奈は、ニコニコと微笑んでいた。

そんな安奈を見ると、本当に幸せそうに思える。

俺が、ふと笑うと安奈がそれに気付कि恥かしそうに言った。

「い、今、私の事見て笑った？ 私そんなに変な顔してた？」

「違うよ。幸せそうだなって思ってたさ」

「エッ？」

俺の言葉に少し首を傾げた安奈は、その意味を悟り赤面しながらも笑みを浮かべ答えた。

「うん。今、とっても幸せだよ。人生で一番」

「人生で一番か。でも、人生まだまだ長いぞ？ 今が一番幸せで良いのか？」

「うん。マサと一緒に居られるこの時間が、私にとっては一番幸せな時だと思うから」

「そっか。やっぱり、鈴木はユキと一緒にになって正解だったかもな」「エッ？」

「ほら、鈴木もユキと出会って中学の時よりも何か生き生きしてる感じがするし、ユキも鈴木と会ってから凄く生き生きしてるし、羨ましいね」

「和彦君も、春奈が居るじゃない？」

安奈がニコニコ笑いそう言うが、その言葉が俺の胸にグサリと突き刺さる。

最近、まともに会う事も出来ず、これ以上春奈とやっていけないの
だらうかと、悩んでいたのだ。

その為、少し表情を曇らせた俺に、安奈がすぐに気付いた。

「どうかしたの？」

「いや。ちよつとな」

「私で良ければ、相談に乗るけど？」

「そうだな。一人で抱え込むより、話した方が楽になるかもな」

「うんうん。そうだよ。さあ、話して」

急かすように安奈がそう言う。俺は思っていた事を全て安奈に話した。

すると、呆然とした表情で安奈が言う。

「へっつ。和彦君も寂しいって思ったりするんだね」

「そりゃ、人間だからな」

「そうだよな。和彦君も一応人間だもんね」

「んっつ。俺の事今まで何だと思ってたんだ？」

「そりゃ、何でも出来る天才君？」

「何でも出来るね……」

俺は少し呆れた。そんな俺に、安奈は微笑んでいた。

そこに、丁度仕事を終え雅之がやってきた。すぐにイスに腰を下ろして「はふっつ」と息を吐いていた。

安奈はニコニコ微笑ながら雅之に声を掛けた。

「お疲れ様。どうだった？」

「大変だったよ。色々」

笑顔を見せる安奈に、雅之も笑顔を返す。ニコニコと微笑みあう二人が、俺は少し羨ましかった。

羨ましそうにそれを見ていた俺に気付いた安奈と雅之は、急に恥かしそうに目を背け俺の方に目をやった。

俺がニコツと微笑むと、雅之が微笑み言う。

「そ、そういうえば、何の話してたの？　僕が来る前、二人で話してたみたいけど」

誤魔化そうと雅之がそう言う。俺はそれが可笑しく、笑いながら雅之を見据える。

雅之は少々焦りながら俺に言った。

「な、何だよ。笑う事無いだろ！」

「そうだよ。笑う事無いじゃない」

「いや。何だか誤魔化し方が下手だなんて思ってた。二人ともよく似てるよそう言う所」

俺がそう言うと、雅之と安奈は顔を見合わせ赤面した。

この二人を見ていると俺の悩みなど、何処か吹っ飛んでいった。

「さあ、俺達も海に行こう。皆待っているから」

「エッ！　でも、さっきの話の続きは？」

安奈が驚いたように声を上げるが、俺は笑いながら答えた。

「もういいんだよ。二人を見てると、俺もまだ上手くいける気がするんだ」

「何の話？」

「だから、もういいんだって。ユキの気にするような事じゃないさ」

「えっつ。教えてくれてもいいいだろ？ 友達じゃない」

「さあ、行くぞ！」

「ちよ、ちよっと待ってよ二人とも！」

俺と雅之にそう叫んで安奈が駆け寄った。その後、俺達は海に行き日が暮れるまで遊んだ。

青々と広がる海に立つ白波を見据え、私は堤防の上に腰を下ろしていた。

浜には大勢の人がおりビーチパラソルを幾つも立ててあった。Ｔシャツを着たままの私は、ボートとそんな砂浜を眺めている。別に何か興味のある物があるわけでもなく、ただボートと眺めていた。海辺では恵利と由梨絵が「キャーキャー」と、騒いでおり、遠くの方では健介が水飛沫を上げながら泳いでいた。冷夏と久美子は――。何処に行つたのか分からない。まあ、こつも人が一杯居れば分からなくなるのは当然なんだろうけど……。

ボートとしてゐる私は沢山の声の中、微かに安奈の声が聞こえた。それに遅れて、雅之と和彦の声も。

私はすぐに振り返り安奈を探す。だが、人が多く見つけることは出来ない。

その時、突如強い風が吹き、堤防の上に立っていた私は、体を煽られ堤防から足を滑らせた。

「キャッ！」

久し振りに女の子の様な悲鳴を上げたその時、

「オット」

と、声がして私の体を誰かが受け止める。お姫様抱つこの様な状態だと、分からない私は恐る恐る目を開いた。

私の視界に飛び込んだのは、和彦の顔で心配そうに言う。

「大丈夫か？ 怪我とかしてないだろうな？」

何故か、胸がドキドキと鼓動を打つ。

頭はもう真っ白で言葉も出ない。そんな時、安奈と雅之が駆け寄る。

「カズちゃん、大丈夫？ 駄目だよ、あんな所でボーツとしてたら」

「でも、和彦も凄いな。見事に受け止めて」

「いや。たまたま通りがかったら、宮沢さんが振ってきてとっさに体が――。それで、買って来たジュースを投げて……」

和彦がそこまで言っただけで、何処からか悲鳴が響いた。きっと、和彦の投げたジュースを頭から被ったのだらう。氷も入ってただらうから、とても冷たかったと思う。

私達はバレない様にその場を後にした。もちろん、和彦にお姫様抱っこされたままで。

暫く走り、落ち着いた所で私を降ろした和彦は、あんなに走ったのに息を乱さずに言う。

「いやー。ビックリしたね。ハハハハッ」

「わ、笑い事じゃないよ……。僕…もう走れないよ」

「相変わらず、体力が無いな」

「しょうがないだろ。滅多に運動なんてしないんだから」

「まあ、これで少しは運動になっただろ？」

和彦と雅之の二人がそんな会話をしている中でも、私の胸は鼓動を早めていた。

大人しくしていた私を心配してか、安奈が小声で話しかけてきた。

「どうかした？ 今日は、何だかいつものカズちゃんっぽくないよ」
「だ、大丈夫。心配しなくていいよ。私は全然平気だから」

焦りながら早口でそう言った私を、さらに心配そうな目で見つめる安奈。失敗したと、私は思った。

いつもなら、冷静に対処できたのに、今日は何処かが可笑しかった。

そんな私に、安奈が更に問い詰めるように言う。

「さっき、落ちた時に何処か怪我したの？」

「怪我はないって。大丈夫だ。心配しすぎなんだよ安奈は」

「そう？　なら、いいんだけど……」

そっいいながらも、心配そうな目の安奈に私は微笑んだ。

海で一杯遊んだ私達は、辺りが暗くなり始めたため旅館に戻ってきていた。

そして、疲れを癒すため温泉に入っていた。皆、笑顔ではしゃぎまわる中、和美一人が浮かない顔をしていた。

温泉に浸かったまま、ボートとしていて時折ため息を吐く。いつもと何か違う感じのする。

それは、温泉から出てもそうだった。部屋に戻っても、心ここにあらずと言った感じで、ずっと外を見据えたまま何度もため息を吐いていた。

流石にこれは何かあると、思った私はこっそり部屋を抜け出し安奈と久美子の部屋に急いだ。

安奈と久美子は、私が部屋に来ると、不思議そうな表情で私の方を見て言う。

「どうかしたの？」

「まさか、和美を怒らせた？ あゝあ。知らないぞ。和美を怒らせたなら、もう止められないよ」

茶化すような感じで久美子がそう言い、私はすぐに首を左右に振り答えた。

「ワタクシが何で和美を怒らせるんですの！ それよりも、和美が変なのよ」

「和美が変？ いつもの事じゃない？」

「久美ちゃん！ いつも変なのは久美ちゃんの方でしょ！」

本人は無意識に出た言葉なのだろうが、その言葉で久美子がか

りへこんでいた。

安奈も悪気があるわけじゃないのだろう。多分、その場を盛り上げようとしたのだ。

結果、それが裏目に出たわけだが――。

「それで、どういう風に変なの？」

「何て言うか。こう、心ここにあらず、見たいな感じ」

「あつ、もしかしていつに無くぼんやりしてるとか？」

「そう！ そうなのよ！ 何だか、年老いた老人みたいな感じで、外を見たまま動かないのよ」

「やっぱり、カズちゃん何かあったのかな？」

「心当たりでもあるの？」

「うん。今日、海で――」

私と安奈はへこむ久美子を無視して話を進めた。安奈から海であった事を聞き、私は何と無く確信した。

もしや、これは“恋”なのではないだろうか。

そして、私がその事を安奈に言うと同時に、へこんでいた久美子が、水を得た魚の様に勢いを取り戻し、興味津々といった感じで参加してきた。

「恋！ ドーンと来い！ なんちゃって！」

「それで、カズちゃん誰に恋してるのかな？」

「うん。誰だろう？ これだけだと、まだわからないですわ」

「ちよつと、私は無視ですか？」

「やっぱり、本人に直接聞いた方が良いかな？」

「聞いた所で、教えてくださるでしょうか？」

「コラコラ、完全に私の存在を消さない」

何と無く、久美子が変わると話がややこしくなると思った私と安

奈は、完全に久美子の存在を無視してその後も話を進めた。

和美が一体誰を好きになったのか、考える私達だが結局、この時その答えが出る事は無く、私は部屋に戻った。

部屋に戻ると、相変わらず外を見据えたままの和美が、私に気付き声を掛けた。

「どこ行つてたの？」

「ちょっと、安奈の所に」

「安奈の所？ 何しに？」

「今日の夕飯はなにか？ ツて感じかな？」

「ふん。そう言えば夕飯まだだったな」

今思い出したように和美はそう言った。そして、また外を見てポーツとしていた。

夕飯の時間になり、皆は食堂に集まった。ポーツとする和美は夕飯の時も、一人でポーツとしながら箸を進めていた。

その異様な雰囲気、集まった皆が可笑しいと気付いていた。

「和美の奴、ちょっと可笑しくないか？」

「そうだね。何と無くポーツとしているって感じ」

「何かとんでもない事のおきる前触れなんじゃないか？」

「まさか、そんなわけ無いよ」

健介の言葉に雅之が笑いながらそう言う。その話を聞いていた私達（私と安奈と久美子の三人）は、ヒソヒソと話をした。

「健介の言うとおり、何かが起きる前触れじゃない？」

「久美ちゃん。そんな縁起でもない事言っちゃだめだよ」

「そうですね。和美はただの恋なんですもの」

「ただの恋かしら？」

「どういう意味よ？」

久美子の意味ありげな発言に、眉を顰めながら安奈がそう言った。久美子は不適に笑いゆつくりと口を開く。

「もしかすると、結婚してる人かもよ」

「ありえない」

「ワタクシも、ありえないと思いますわ。和美が可笑しいのは、ここに来てからですもの」

「エッ、それじゃあ、このメンバーの中に！」

驚いたように久美子がそういい、雅之、健介、和彦の順に見回す。その瞬間、ハツとした表情を見せた安奈は焦ったように言い放つ。

「ま、まさか、マサじゃないよね？ あこの公園の事もあるし——」

「まず。それはありえないと思うわ」

「ワタクシも久美子の意見に賛成ですわ」

「よかった。違うんだ」

「大体、あんなの好きになるのはあんた位よ」

「何それ！」

久美子の言葉に膨れっ面になる安奈は、唇を尖らせブーブーと言いつ出した。

私と久美子はそんな安奈の顔を見て笑った。

和彦先輩のおじさんの旅館の手伝いも、もう今日で終わりとなった。

相変わらず、私は由梨絵と外回りの掃除をしていた。特に散らかっているというわけでもないが、これがこの旅館の日課らしい。

お兄ちゃんは相変わらず調理場の仕事をしていた、仕事が増やされたとぼやいていた。それだけ、頑張っているって事なんだろうね。健介先輩や和彦先輩は、裏で力仕事をさせられていて、何だか一段とたくましくなった様な気がする。安奈さんや冷夏さんは、接客業に随分と慣れた様子でいつも楽しそうだ。久美子さんと和美さんは、相変わらずと言った感じです。

外回りの掃除を終えた私と由梨絵は少し自分の部屋で休んでいた。

「ふっ。疲れたね」

「うん。でも、これも今日で終わりだね」

「大変な事もあったけど、結構楽しかったね」

微笑みそう言う私は、由梨絵の方を見た。

すると、由梨絵も私のほうを見て微笑んだ。

色々な話で盛り上がっていたが、休憩時間が終わった事に気付き、床磨きの仕事へと移った。

「ごめんなさい。遅れてしまって!」

既に、床磨きをしていた久美子さんと和美さんに私達は頭を下げた。

久美子さんは笑顔で、

「気にしないで。いつもは、私達が遅れてるんだし」

と、軽い口調でそう言った。一方の和美さんは、床を磨いたまま遠くを見るような目をしていた。

何処と無くぼんやりとしている様な感じ。

不思議に思った私は、その事を久美子さんに聞いた。

「久美子さん。和美さん、何かあったんですか？」

「ソッ？ どうして？」

「何だか、ここ最近変って言うか、ぼんやりしてるって言うか」

「やっぱり、分かつちゃう。そうなんだよね。何か、ぼんやりしちゃってさ。私達は恋なんじゃないかって、思ってるね」

「恋？ ですか」

「そう。そうに違いないわ」

久美子さんは強気にそう言う。何を根拠にそう言うのかは分からないが、多分女の勘って奴なのかもしれない。

私は感心しつつ、和美さんの方を見る。相変わらずぼんやりとしていて、何だか心配だった。その時、水の入ったバケツを由梨絵が間違って蹴飛ばした。

私と久美子さんが声を出す暇も無く、バケツの水はぶちまけられ、蹴飛ばされたバケツが和美さんの頭を直撃した。

バケツがランランと床の上を転がり、和美さんが床に倒れた。私達三人はすぐに和美さんに駆け寄った。

「か、和美さん！」

「ご、ごごごごめんなさい！」

「ふ、二人はここ拭いといて、私和美を部屋に連れてくから」
「お願いします」

久美子さんが和美さんの体を抱え、自分の部屋へと運んでゆく。
私と由梨絵はその間に床に広がる水を雑巾で拭き取った。

これで、五度目くらいになるだろう。由梨絵は申し訳なさそうに
俯き私に謝る。

「ごめん。何度も何度も」

「気にしないでよ。失敗は成功の母って言うでしょ?」

「それって、失敗は成功の元じゃ?」

「母とも言っの」

「そうなんだ。勉強になるね」

首を軽く曲げてニツコリと微笑む由梨絵は、本当にのんびりとしていた。

こういうのをマイペースって言うんだろう。私とはちょっと違う
タイプって感じ。

床をようやく綺麗に拭き終えた私と由梨絵の所に久美子さんが戻
ってきた。

「どうでした?」

「大丈夫。部屋で寝てるよ。何処も怪我してないし、心配する事無
いよ」

「本当、すみません」

「いいって、いつもならあんなの軽く避けるんだから」
「いつもなら?」

不思議そうに由梨絵が首を傾げると、久美子さんも軽く首を傾げ
る。

そんな二人の間に挟まれた私は、苦笑する。すると、久美子が不
思議そうに言う。

「もしかして、気付いてなかった？」

「何をですか？」

「由梨絵って、マイペースなんですよ」

「そうなの……」

呆れた様に久美子さんがそう言った。由梨絵は何の事なのか分からず頭を捻らせていた。

私と久美子さんは、和美が少し変だと言う事を由梨絵に話す。すると、腕組みをしながら唸り声を上げていった。

「そうだったんですか。初耳ですね」

「普通、気付くでしょ？」

「気付きませんよ」

「由梨絵だけだよ。気付いてなかったの」

「えっつ。そうですか？」

由梨絵は不満そうにそう言う。私と久美子さんは呆れて何もいえなかった。

高校三年 夏休み―8 (鈴川 由梨絵)

健介先輩のお友達である白川先輩の旅館の手伝いが終わり、平凡な夏休みに戻り数日が過ぎた。

その間に行われた三年生最後の大会は、結局勝つ事は出来ず、甲子園の夢は打ち砕かれた。健介先輩は相変わらず、笑っていたが本当は泣きたいほど悔しかったと思う。

それもあつたため、今日は健介先輩とデートをする事になっている。

待ち合わせの場所は、近くの公園。私にとって近くでも、健介先輩にとっては結構遠い公園。

公園の門の前でのんびりと待っていた私は、ふと向こう側の歩道を歩く宮沢先輩の姿が見えた。

何だかぼんやりしていて、何だか元気が無い様に見える。

と、そこにいつもの様に明るい声で健介先輩が駆けてきた。

「おゝっそくなつてごめんな」

「あつ、健介先輩。あれ見てください」

「あれ？」

私の指差す先を見る健介先輩は、不思議そうに声を上げた。

「あれって……。和美だろ？ 何でこんな所に？」

「夏休みで実家に返ってきてるとか？」

「そうなのか？ でも、それにしても変じゃないか？」

「変？ ――ですか？」

首を傾げた私に、健介先輩が軽く頷く。暫く向いから宮沢先輩の事を見据える私と健介先輩は、いつしか宮沢先輩を尾行していた。

デートはどうなったんだろう？ とか、私は少し思っていたが、尾行している内にコッチの方が楽しくなっていた。

本当はいけない事なんだろうけど、もう止められなかった。

「本屋に入って行っただな」

「そうですね。どんな本読むんでしょうね？」

「気になるな。行ってみるか」

「はい。それじゃあ、変装しましょう。これじゃあ、バレちゃいますから」

「変装って、そんな道具もってないぞ」

健介先輩がそう言うと同時に、私はバッグからサングラス・付け髭・帽子の三点セットを取り出した。

顔を引き攣らせる健介先輩は、呆れた様な声で聞く。

「何で、こんなものを持ち歩いてんだ？」

「いざと言う時の為ですよ」

私はニツコリと微笑んだ。

本当の事を言うと、健介先輩にドッキリを仕掛ける為に買って置いた物なのだが、ここは何とか誤魔化した。

殆ど強引にだけど。

取り合えず変装する私と健介先輩は、本屋に入っていった。

本屋に入ると同時に、何やら視線が集まる。きっと、私と健介先輩が怪しいのだろう。

そんなこんなで、私と健介先輩はようやく宮沢先輩を発見した。

「何か、本を読んでもぞ」

「人が邪魔でよく見えませんね」

「もう少し近付いてみるか？」

「危なくありません？」

「大丈夫だろ。この完璧な変装なら」

自信ありげにそう言う健介先輩だが、そう思っているのは多分健介先輩だけだと私は思う。

ゆつくりと、人と人との間をくぐり宮沢先輩へと近寄る健介先輩と私は、ようやく本の表紙が見える位置まで移動できた。

多分、これ以上近付くと、宮沢先輩にバレると言うぎりぎりの位置まで近付いていた。

近くにあつた本を開き顔を隠す私と健介先輩は、宮沢先輩の読む本の表紙を見ようとしたその時、その間にちよつと小太りの男が入り込み、結局本の表紙は見えなかった。

「あのデブ！ 何邪魔してんだ！」

「まあまあ、仕方ないですよ」

その後、宮沢先輩がすぐ本屋を出て行き、私と健介先輩もそれを追って出て行った。

どんな本を読んでいるのか気になっていた健介先輩は間に入ってきた小太りの男の人の事を、未だ根に持っていた。

まあ、私も少しくらい気になっていたが、それよりも今は宮沢先輩が何処に向っているのか気になっていた。

私と健介先輩が宮沢先輩を影から見ていると、背後から急に声を掛けられた。

「何やってるの？」

私と健介先輩は飛び上がるほど驚いた。

今日は、安奈と一緒に街に買い物に来ていた。特に何か買いたい物があると言う訳でもないが、ブラブラと店を回っていた。

そんな時、安奈がある二人組みを発見した。それは、怪しい格好をした健介と由梨絵の二人だった。

深々と帽子を被り、物凄く場違いで怪しい格好の二人に僕も安奈も軽く首をかしげた。

「何してるのかな？」

「さあ？ ストーキングじゃない？」

「えゝつ。それは無いでしょ？」

「まあ、無いとは思うけどさ」

結局、健介と由梨絵が何をしているのか分からず、僕と安奈は直接聞く事にした。

こっそりと二人の背後に忍び寄る僕と安奈。そして、安奈が驚かすように声を掛ける。

「何やってるの？」

安奈が声を掛けると同時に、健介と由梨絵が跳び上がるほど驚く。まさか、そこまで大げさに驚くと思わなかった僕と安奈は啞然とした。

その後、落ち着いた健介から事情を聞き、安奈が不思議そうに首を捻る。

「どうかした？」

「うん。ちょっと」

僕の言葉に軽く言葉を返した安奈は、腕を組んだまま何かを考え込んでいた。

何を考えているのか、僕には分からないがきつと重要な事なんだとソツとしておく事にした。

「でも、何で和美の尾行を？」

僕がそう聞くと、健介はめんどくさいと言った感じの表情を見せ、苛立ったような声で言う。

「さっき話しただろ！ 何か、様子が可笑しいから尾行してるって！」

「あつ、そうだったけ？」

「何度も言わせるなよ！」

ムスツとした表情で前を歩く和美をこっそりと覗き見る健介。そんな時、安奈が口を開いた。

「やっぱり変だよ」

「何が変なの？」

安奈の言葉にすぐに反応した僕に顔を向ける安奈は、落ち着いた様子で言う。

「だって、カズちゃんの実家はこの辺じゃないし、この辺りに知り合いはそんなに居ないはずだもの」

「でも、どうしてこんな所を歩いてるんでしょうね？ 待ち合わせの時間が余ったんですかね？」

「待ち合わせって、あいつ彼氏とか居るのか？」

健介が由梨絵の言葉に少々不満そうにそう言うが、その言葉に安奈が怒ったように言う。

「失礼だよ！ カズちゃんだって、彼氏の一人や二人……」

「それじゃあ、二股になっちゃうよ」

「あつ、そっか」

僕の言葉に納得した安奈は軽く笑った。それから暫く僕達四人は和美の尾行を続けた。

けど、結局何事もなく和美は駅へと向っていった。まあ、僕らの無駄足で終ったって感じた。

僕ら四人はまだ時間があつたので、あの喫茶店で一緒に一休みする事にした。

「結局、無駄足だったな」

「そうですね。でも、何しにきてたんでしょう？」

「さあな。まあ、どうせ俺らには関係ないことだろうけどな」

健介はそう言いながら、メニューと睨み合っていた。そんな健介を見て、笑みを浮かべながらメニューに目を落とした僕は、ふと初めてこの喫茶店に来た時のことを思い出した。

確か、安奈と初めて対面して、緊張のあまりジャンボパフェを頼んで、凍え死にそうになった記憶が。

まあ、今となれば良い思い出だが、あれ以来この喫茶店では結構有名になっていた。一人でジャンボパフェを平らげた男だと。

そのため、この喫茶店は大分行き着けのお店になっていた。

「思い出すね。初めて会った日の事」

「えっ。そ、そうだね」

僕の心を見透かした様な安奈の言葉に、驚きながらそう言った。嬉しそうに微笑む安奈は、急にクスクスと笑い出した。

何と無く笑った理由が分かっていたが、僕は聞く。

「急にどうしたの？」

「ウン……。初めて会った時、マサここでジャンボパフェ平らげたんだよね。それも一人で」

やっぱりと思いながら僕は苦笑いを浮かべる。すると、由梨絵が興味津々で食いついてきた。

「エッ！ 倉田先輩、ここのジャンボパフェ一人で平らげたんですか！」

「ま、まあ……」

「凄かったんだよ。もう、一心不乱って感じでジャンボパフェを口に運んじやって。ビックリしたんだから。その体で平らげちゃうの？ って」

「凄すぎです。私も一度食べましたが、あれは一人で食べられる物じゃありませんよ。結局、皆に手伝ってもらいましたよ」

「そ、そうなんだ……」

僕以外にも、ジャンボパフェを頼んだ人がこんなに身近に居るなんてと、呆れながらそう言った。

すると、急に意を決した様に健介が言う。

「よし、マサが食べたなら俺もいける！ 俺も挑戦する！」

「エエエエエッ！」

僕ら三人は驚きに声を上げた。喫茶店の客も店員も皆、僕らの声

に驚き視線が集まる。

店員を呼ばうとする健介を僕は必死で止めて説得する。

「け、健介。あれはやばいって。止めたほうがいいって」

「何言ってるんだ。お前でもいけたんだろ？　なら、俺もいけるさ！」

「いや、何か根本的に間違ってる気がするんだけど」

「なぐに、大丈夫だ。お前に食えて俺に食えんものは無い！」

「そう言う問題じゃ……」

僕は助けを求める様に由梨絵と安奈に視線を送った。だが、由梨絵も安奈も何か楽しそうに笑っていた。

そして、由梨絵の言った言葉が健介のやる気を更に強めた。

「ジャンボパフェ食べきったら、カッコいいですよ健介先輩」

「おう。お前の為に食べきってやるぜ。店員さん。ジャンボパフェ！」

目をきらめかし健介を見つめる由梨絵は、もう期待に満ち溢れていて健介もその期待に答えようとやる気満々といった感じだった。だが、僕は知っている。あのジャンボパフェの苦しみを。

健介の前にあのジャンボパフェがゆつくりと置かれた。

その大きさと盛り付けが懐かしく思える私は、何だか笑みがこぼれた。

流石の健介もこの量には、驚いた表情をして表情が少し引き攣っていた。

暫し圧倒される健介を横目に、雅之は呆れた様にため息を吐いた。その時、健介は自分の前に置かれたジャンボパフェを、雅之の前へと移動させ店員に叫ぶ。

「ジャンボパフェもう一つ！」

私と雅之の間に置かれたジャンボパフェで、私達はお互いの顔を見ることは出来なくなっていた。

自分の前にジャンボパフェを置かれた雅之は、少々震えた声で言う。

「何で、僕の前に置くのかな？」

「決まってるだろ？ 俺とお前、どっちがはやく食えるか競争するんだよ」

「僕、そんな事やるっていったかな？」

「俺が決めた。文句あるのか？」

そう言つて健介が雅之を睨む。雅之は渋々と言つた感じでジャンボパフェを見据えていた。

そして、二つのジャンボパフェが並んだ時、二人が同時にスプーンを進めた。

ゆつくりとスプーンを進める雅之は、何度もため息を吐き殆ど手

が進まない。

一方の健介は、豪快にスプーンを進めていく。全くやる気を感じられない雅之は、三分の一を食べた所でスプーンを置いた。

「ふっ」

「もう、食べないんですか？」

「僕、元々そんなに大食いじゃないから」

由梨絵に対し、優しくそう言う雅之はまだ三分の二、残ったジャンボパフェにため息を吐く。

それを見ていた健介は、雅之を挑発するように言葉を発した。

「それで、本当にジャンボパフェを食べきったのか！」

「あれから、一年以上も過ぎてるんだよ。食べきれないわけ無いじゃない」

「フッフッフ。この勝負。俺の勝ちだな」

「はいはい。そうですね」

殆ど投げやりの雅之を私が心配そうな眼差しで見つめていると、一瞬雅之と目が合った。

そして、置いていたスプーンを手に取りまた、ジャンボパフェを口に運び始めた。

「おっ、やる気になったか！」

「別に、残すのは勿体無いからさ」

健介に雅之はそう言って次々とスプーンを進める。そんな雅之を見ていると、何だかあの頃を思い出して嬉しくなった。

「頑張れマサ」

「うん」

「健介先輩も負けないでください！」

「おう。当たり前だ！」

私と由梨絵の声援に答える様に雅之も健介もペースを上げた。だが、徐々に健介のペースが遅くなり、遂に雅之が健介と並んだ。あと、四分の一の所でついに健介の手が止まり、雅之が心配そうに手を止めた。

「大丈夫？」

「う……。大丈夫……」

「大丈夫そうじゃないね。だから、止めとけて言ったのに」

「うるせえ……」

強がる健介だが、もう限界そうだった。唇の色も青ざめていて何だか辛そうだった。

雅之はそんな健介を見ながら、少しずつだがスプーンを口に運んでいた。そんな雅之を見て、健介もスプーンを進めようとするが、もう手が動かないといった感じだった。

心配そうにする由梨絵を見た雅之は、ふと私の方に視線を送った。雅之と視線のぶつかった私は軽く頷く。すると、雅之が急にスプーンを置きお腹を押さえて言う。

「うん。もう限界だ。後は、安奈と由梨絵に任せるよ」

「私も一度食べたかったの」

私はそう言う。物凄く下手な芝居で。

すると、由梨絵も何か気付いたらしく言う。

「そ、それじゃあ、最後は私と安奈先輩の勝負ですね」

「よし。負けないよ」

「私だって負けません」

その後、私と由梨絵が残ったジャンボパフェを最後まで食べつくした。

多分、もうジャンボパフェは頼まないと思う。こんな苦しいのはこれだけで十分だから。

高校三年 二学期―1 (加藤 健介)

夏休みが終わり、二学期に入った。俺は既に、スポーツ推薦である大学への進学が決まっていた。

その為、他の連中よりは気軽に二学期を迎える事が出来た。でも、気は抜かないで勉強も野球も頑張るつもりだ。

大学に行けば、雅之や和彦の二人の様に俺に勉強を教えてくれる奴も居なくなるだろうから、今の内何とか勉強も皆について行けるようにしようと思ったからだ。

まあ、その為に学校の夏期講習見たいのを夏休みの間に受けたが、俺には難しくて理解できず、結局和彦に勉強を教わった。

野球も日々一層努力し、絶対にプロになりたいと思っている。それは、俺の小学校の頃からの夢だから。

のんびり教室で欠伸をしていた俺は、ふと教室の雰囲気ギリギリしているのに気付いた。

皆、大学に行くために必死なんだろう。和彦は当たり前の様に教室からは姿を消しているし、雅之は相変わらずのほほんとしている。

全く何を考えているのか知らないが、一応忠告しようと俺は席を立ち雅之の前の席に移動した。

「なあ、お前進路どうするか決めたのか？ 和彦はともかく、お前そんなに成績よくないんだぞ」

「成績よくないのは健介も一緒じゃない。って、言うか僕もう面接受けたよ」

「面接？ 何の？」

「何って、就職先のだよ」

「エッ——！」

驚いた。知らないうちに雅之が、面接を受けていたと言う事に。何も考えずただボーッとしているだけだと思っていたが、意外と行動的なんだとこの日氣付いた。

それから、聞いた話によると、何処かのホテルの面接を受けたらしく、今はその合否待ちだそうだ。

俺はそれを聞き、腕組みをしながら頷く。そんな俺を見ながら雅之はニコニコと微笑むが、その目は何やら不安そうだ。

だから、俺は元氣付けようと精一杯明るく言う。

「まあ、心配するなつて。ここで落ちたら、次のホテル探せば良いさ。それでも落ちたら、和彦んとこのあの旅館の調理場行けばいいんだし」

「エッッ。それって、何か都合よすぎるんじゃないかな？」

「何言つてんだ。お前の腕があればあそこで料理作つても可笑しくないぞ」

「そうかな？」

不安そうにそう言う雅之に俺は胸を張り堂々と言う。

「当たり前だつて、俺は中学ん時からお前の飯を食った事があるんだ。その腕に自信を持てつて」

「健介に言われると、何だか不安だよ」

冗談交じりでそう言う雅之は、俺を見て笑っていた。

俺も何と無くだが笑った。それが、一番良いと思つたからだ。

多分、教室に居る連中は俺と雅之の事を迷惑だと思っているだろうが、それでも大きな声で笑った。

昼休み、俺は一人屋上に居た。タンクの下は影になっていて、ひんやりと冷たく昼寝をするのには打ってつけの場所だからだ。教室に居てもピリピリとして、居づらいだけだし暫くはこうやって屋上で昼を過す事になるだろう。

冷たい地べたに寝そべって「ふっ」と、一息ついていると、屋上の扉の開く音が聞こえ、誰かがはしごを上がってきた。

俺が体を起こすと同時に、和彦がニツコリと顔を出した。

「よっ！ やっぱここにいたか」

「何だよ。和彦じゃねえか」

「何だとは何だ。折角、話し相手になってやろうと思ったのに」
「別に、話し相手なんて欲しくない」

俺はそう言つて和彦を吐き返すような言葉遣いでそう言い、もう一度寝そべった。

そんな俺を見据える和彦が嬉しそうに言った。

「そういえば、大学推薦で行くらしいな。おめでとう」

「ああ、ありがとう。それで、お前はとうするんだ？ 進路 大学に行くのか？」

「うん。まあ、そうなるかもな」

「大変だなお前も」

「案外余裕だね。君も来年から大学生だろ？」

「俺はスポーツの方一筋だからな。体さえ壊さなきゃなんとかなるさ」

俺はそう言つて笑った。和彦もそれに釣られるように笑う。その後もなんでもない話をし、ただ笑い続けた。思いつきり。

高校三年 二学期―2 (川島 久美子)

二学期になり学校では皆受験モードになっていた。

私は別に大学に行くつもりもないし、専門学校に行くつもりも無く、就職先を探すため、何度か進路指導室に足を運んでいた。そして、今日も何と無く進路指導室で資料を見入っていた。

「うん。どうしたものか……」

ブツブツと独り言を言っていると、進路指導室のドアが開かれ安奈と冷夏が入ってくる。

二人は私に気付き笑顔で歩み寄ると、声を掛けた。

「進路、考えてるの？」

「まあね」

安奈に私はそう答え、持っていた資料を棚に戻す。
そんな私を見ながら冷夏が、何やら不思議そうに言う。

「久美子は、就職ですの？」

「まあ、そうなるかな？ ほら、成績よくないし」

「でも、スポーツ推薦とかはしないの？」

安奈がそう言うが、私は別に大学なんて行く気はない。
陸上も、高校までと決めていたから。

だから、私は明るく笑いながら安奈に答えた。

「うん。私、大学と違って合わないと思うんだ」

「そっか。でも、どういう所に就職するの？」

「うん。まだ、考え中って所かな。安奈と冷夏は進路どうするの？」

私の質問に先に答えたのは冷夏だった。

まあ、私の中では冷夏も安奈もどうせ大学に行くんだろ？ 何て考えがあつたため、冷夏の進路を聞いて驚いた。

「ワタクシは、アメリカに行きます」

「なっ、アメリカ！ 何でまた！」

「お父様が決めた仕来りで、ワタクシの家では高校を卒業と同時にアメリカに行く事になっていました」

「さすが、お嬢様って感じね。ビックリし過ぎて腰が抜けそう」

私はそう言いながら苦笑した。正直、マジで驚いた。

卒業と同時にアメリカがよって、突っ込みたかった。だが、そのスケールの違いにもう、突っ込むどころじゃなくなっていたのだ。

安奈も多少は驚いているようだったが、少し寂しそうな表情をして冷夏を見ていた。

私もすぐに安奈がなぜそんな表情をしたのか気付き、肩を落す。そんな私と安奈を見て、冷夏は明るく振舞いながら言った。

「どうしたんですの？ 二人とも落ち込んで」

「だって、高校卒業したら、あえなくなっちゃうんでしょ？ アメリカいっちゃうんだから」

「そうですね。でも、一生会えなくなる訳じゃないですよ。一ヶ月に何回かは日本に帰って来るんですから」

「でも、寂しくなるね。あんたがアメリカ行っちゃうと」

しみりとした空気が流れ、辺りを静寂が包む。それと、同時に授業開始のチャイムが鳴り響いた。

その音に、私も安奈も冷夏も同時に進路指導室の時計を睨む。時計は針がピクリとも動いておらず、私達三人はその事に初めて気付き大声で叫んだ。

「と、と時計止まってる！」

その声は多分、学校中に響いた。そして、私達が廊下を駆け抜ける足音も。

急いで教室に向った私達だったが、間に合う訳も無く、遅刻と名簿につけられた。

久し振りに思いっきり走り、とっても気持ちよかった。やっぱり、私は陸上を続けたいと心のどこかで思っているんだと、この日感じた。

高校三年 二学期―2 (川島 久美子) (後書き)

やっと、二学期に入ったわけですが、もう恋愛とか関係ないですね。殆ど進路の話になっちゃってます。

まあ、それが高校三年である彼らの悩みなんですけどね。まだ、冬休み・三学期とあるんですが、結構番外編の方が本編より長くなったりするわけですよね(笑)

笑い事じゃないんですけどね。

とある日曜日。

俺は駅前に来ていた。

まあ、待ち合わせの様なものだ。

待つ事十分、待ち合わせの相手が駅から出てきた。

俺は、そいつに向って軽く手を振り名前を呼んだ。

「春奈、コツチだ」

「あゝっ。和彦！ 会いたかったゝ！」

俺を見つけるなり、そう叫び駆けて来る春奈は俺に飛びつこうを
大手を広げる。

そんな春奈の頭を右手で押さえた俺は、呆れ口調で言う。

「止める。人前だぞ。しかも、大勢の。それに、もう少し静かに出
来ないのか？」

「ぶゝっ！ うち、メチャメチャ、寂しかったんよ。もうちよつと、
優しくできるの？」

「あゝのゝなゝ。なら、何で夏休みに連絡しないんだ」

目を細めそう言うと、春奈は不満そうな表情を見せた。

春奈と会うのは、バレンタイン以来で、結構長い間寂しい想いを
していた。

本来は夏休みに会う予定だったが、急に春奈が旅行に行く事にな
り、会えなく却下となったのだ。

しかも、夏休みの間、メールも電話も一切無く、それはそれは寂
しい毎日だった。

「それで、その荷物は何？」

俺は、何やら大きく膨らんだ鞆を指差し質問する。
すると、良くぞ聞いてくれたといわんばかりに声を張り上げ春奈が答えた。

「これな、和彦へのお土産。うち、夏休み旅行行ってな、そりゃ楽しくて」

「はいはい……。それじゃあ、その話はもう少し落ち着いた場所で聞くよ」

「うっつ。うちは、話したくてウズウズしてるん。どこでもいい、静かな場所いこ」

「そうだな」

俺はそう言い、ゆっくり足を進めた。

その間も、少し変わった口調の春奈の言葉を聞きながら、軽い相づちを打つ俺。

傍からから見れば、付き合っている様には見えないが、俺と春奈はこれで結構仲が良い。

それは、俺が春奈のあの変わった口調が好きだと言う事もあるし、何より春奈の話しが聞けるのが嬉しかった。

こうやってやり取りしていると、本当にホッとする。相手の生の声が胸に響き安心出来る。

俺と春奈は遠距離恋愛の為、電話やメールで相手の事を確かめるが、電話やメールでは本当に元気にしているかなんて、分からない。だから、会って話が出来るとこの時が唯一相手の事がよく分かるのかなのだ。

暫く歩いていると公園に着く。

俺は芝の上に腰をおろし、春奈がその横に座った。

「ふっ」

「あゝっ！　ため息吐いた！　うちと居るのは楽しくないん？」

「いや。最近、色々あってね。疲れてるんだよ」

「あっ！　もしかして、あの男か？　あの冴えない」

一瞬誰の事を言っているのか分からなかったが、「冴えない」と言うところで誰の事を言ってるか理解した。

それに、この辺で春奈の知っている人と言えば一人しか居ない。きつと、雅之の事だ。俺はそう思い、笑いながら言う。

「ユキは、別に冴えない男じゃないぞ」

「ちよつと！　ユキって、誰？　うちの前で他の女の名前呼ぶなんて！」

怒った口調でそう言う春奈に、俺は呆然とした。

まあ、確かにユキと聞いたら女の勘違いするのも無理は無いが、『冴えない男』って、言ってるのに――。

呆れながら、俺は少々ため息交じりに言葉を返した。

「あのな。ユキは女じゃない。男。バレンタインの時あったろ？」

あいつが、ユキ」

「えっ！　あいつ、ユキって言うン？　どう見ても女の名前――」

「だから、俺がそう呼んでるだけ、本名は雅之。一々、面倒だな」

「うち、和彦の事心配してるんよ。他の女に取られんかって」

そう言っつて、春奈が泣きそうな目で俺を見る。そんな春奈の顔を見ていると、何だか心が安らぎ口元に自然と笑みが浮かぶ。

この時間が一番の幸せだ。何ヶ月に一回とかしかあえないからこそ、この時を大切にしたいと思った。

高校三年 二学期―3 (白羽 和彦) (後書き)

今回は和彦の恋をちよつとだけお話しました。結構、上手く行ってるんですね。遠距離って大変なのに。うんうん。良い事です。

そろそろ、ラストに向けてスパートを掛けなきゃいけないのに、イマイチ調子に乗らないんですね。やっぱり、連載が終るのは寂しいですから。

でも、どんな物語でも、始まれば終わりが来なければなりませんからね。だからこそ、より一層頑張れるんですね。何か、変な事言ってますが、最後までよろしく願います。

今日も、来た。

目的も無く、電車を降り駅を出る。

ただこの辺を歩いていれば彼に会えるんじゃないかって、そう想いながら。

そう、ただ、彼に会いたくてやってきただけだったのに――。

声がした。彼の声。優しくて暖かな彼の声が。でも、それは私に向けた声ではなかった。

「春奈、コッチだ」

「あゝっ。和彦！ 会いたかった――！」

春奈と呼ばれた女がすぐ返事を返し、和彦に飛びつこうとする。それを、和彦が右手で春奈の頭を掴んで制する。

私はすぐに隠れた。心臓が鼓動を早め、私の頭は混乱した。

誰？

あの娘は？

彼女？

そんな――

もう、何も聞こえない。何も分からない。どうして良いのか。気がついたときには、ストーカーの様に私は二人の後を追っていた。

いつからだろ？ 彼を好きになったのは。

夏休みのあの日から？ ううん。違う。もっと前からきつと彼が好きだった。

ただ、あれがきっかけで好きだと気付いただけ。
本当は、初めて会ったあの日、公園で話した時、私は恋に落ちていたのだ。

必死で二人の後を追いかけた。

二人の関係を知りたくて。でも、本当は分かっている。
ただ、それを信じたくなかった。だから――私は、必死だった。

二人は公園へと入っていった。

静かな公園。ここで、私と彼は初めて言葉を交わした。

その公園で、彼は今他の女と話をしている。何を話しているのか
聞き取れない。

本当はもつと近くに行きたい。でも、これ以上近付くと二人に気
付かれる。だから、私は堪えた。

時はゆっくり過ぎていく。

本当はいつもと変わらないときの流れも、今の私にはとても長く
苦しい。

暫くして、春奈と呼ばれた女が立ち上がった。そして、ニコツと
笑って和彦に手を振る。

和彦も軽く右手を上げて、春奈を見送った。

そして、和彦も立ち上がり私の居るほうに向って歩き出す。

実際は私の方じゃなく、公園の出口に向っているのだが、この時
の私はもう何も考えられず、無我夢中だった。

無我夢中で、知らないうちに和彦の前に出ていた。少々驚いた様
子の和彦は笑いながら言う。

「あれ？ そんな所で何してたの？　もしかして、また鈴木達と一
緒？」

「わ、私、あんたが好きなんだよ！」

突然の告白。

何の前触れも無く、私の口から自然と出た言葉。

流石の和彦も驚いた表情をして、困った様に笑みを見せる。

なんてことを言ってしまったんだと、私はその場を逃げた。全力疾走で。

逃げている途中、何故か涙が溢れ出す。多分、溜りに溜った想いを伝えてしまったから？　だと思う。

そんな私の右腕を、何かがぎゅっと握り締めた。暖かくて優しい何かが。

立ち止まるが、振り返らない。振り返れば、泣いているのがバレるから。そんな私に、和彦が優しく言う。

「ごめん。辛いだろうけどさ、今ここで俺の返事を聞いて欲しい。多分、今言わないと、もっと君が辛い思いをすると思うから」

聞きたくない。どうせ、振られるって知ってるんだから、返事なんて聞きたくない。

耳を塞ぎたかった。そうすれば、聞かなくて済むと思っていたから。

「君も見たと思うけど、俺、彼女が居るんだ。ずっと付き合ってる彼女が。今も好きだし、それはずっと変わらないと思う。だから、俺の事は忘れて欲しい。君の事をこれ以上傷つけないから」

「……」

何も言えない。和彦の気持ちが伝わってくるから。

どうしたら良いのか分からず、私は和彦の手を振り切ってその場を後にした。

今日も、和美が学校を休んだ。

理由は分からないが、今日でもう二週間くらいになる。

先生も連絡が無くて、困っていて、和美の部屋にも言ってみたが電気も消えていて誰か居る様には見えなかった。

私も、久美子も、安奈も、和美の事が心配で、勉強も全く手に付かない。

もうすぐ中間テストだというのに。

「今日で、二週間か。これは、何かあったと見るな」

腕組みをして、渋い表情を見せる久美子は、「むむむむっ」と、唸り声を上げ右手を顎に添えた。

すると、久美子の前に座る安奈が、心配そうに俯きながら、

「このまま、学校辞めたりしないよね？」

と、泣きそうな声で言う。

けど、そこは久美子がその場を盛り上げようと声を上げる。

「大丈夫！ 大丈夫よ。多分、もう少ししたら学校来るよ」

「だけど、今日で二週間だよ。連絡もないし……」

「確かに、連絡が無いのは気になりますわね」

安奈の言葉に私も同意し、久美子の方を見る。

更に渋い表情を見せる久美子は、「うん」と、唸り声を上げ額に右手を添える。

そんな久美子に何かを期待しても、無駄だと思った私はすぐに安

奈の方に顔を向けた。

そんな時だった。急に安奈の携帯が激しく震えたのは。

「な、ななな何？」

「もしかすると、和美からかも！」

「そ、そそそつかも！ お、おおお落ち着かなきゃ！」

期待する久美子と安奈には悪いと思ったが、私は携帯の画面に出ている名前を見てため息を吐き言う。

「和美じゃありませんわ。倉田さんですわ」

「倉田？ だれそれ？ 安奈、倉田って人と知り合い？」

「くらた？ 倉田……。倉田？ うーん……」

急に考え込む安奈は、本気で忘れした様で雅之の苗字が倉田である事に、気がついていなかった。

その間も震え続ける携帯は、急に震えるのをやめ静かになる。多分、留守電に入ったんだと思う。

音が鳴り止むと同時に、思い出したように安奈が電話に出た。

「もしもし！ マサ？ どうしたの？」

ようやく、思い出したようだ。

そんな安奈を見ながら、私と久美子は話した。

「ねえ、普通、彼氏の苗字って忘れるものかしら？」

「どうだろう？ ほら、安奈って、意外と不思議ちゃんって感じじゃない」

「不思議ちゃん……」

何と無く久美子の言う不思議ちゃんと言う言葉に、私も納得してしまった。

確かに、何処と無く安奈は普通の人と違う感じが漂っていたから。暫く電話で話をする安奈を、私と久美子は見ていた。

「うん。今、全然大丈夫だよ。どうして？」

電話の相手である雅之にそんな返事を返す安奈。それから、暫くして、

「エッ！ カズちゃんが！ うん。うん。わかった。ありがとうね」

安奈はそう言い電話を切り、私と久美子の方を見る。

そして、急に席を立ち私と久美子の腕を引つ張り教室を出た。腕を引つ張られる私と久美子は訳も分からず、ただひたすら走った。

走り続け、足と止めた場所は、屋上だった。多分、誰にも聞かれたくない話でもするんだろう。

「ハア…ハア……。じ…実は……」

「あんた……。ハア…ハア……。少し考えて走りなさいよ。冷夏、半分死んでるわよ」

「ゼエ…ハア……。ゼエ…ハア……」

私は元々運動が出来る方じゃない。そのせいで、安奈のペースで走らされ、完全に息が上がっていた。

そんな私に気付いた安奈が、驚いたように言った。

「ご、ごめん！ つい、本気で走っちゃった！」

「だ…だいじょうぶ……」

微かに笑みを浮かべた私だが、心臓は破裂しそうな勢いで鼓動を打っていた。

それから、暫く休んだ後、安奈は話を始めた。

「実は、和彦君がカズちゃんを振ったんだって！」

「はあ！ 何で和美が和彦に！」

「あつ、もしかして、和美は和彦のことを？」

「でも、あの和美がだよ？ ありえないって」

久美子が否定的にそう言い笑うが、私も安奈もムスツとした表情で久美子を睨んだ。

流石の久美子もそれには少し驚いたようで、少し表情を引き攣らせる。

「そ、それじゃあ、今日、確かめに行こう。その方が早いし」

「うん。そうだね。それじゃあ、放課後」

「授業終ってからね」

私達が頷くと同時に、チャイムが鳴った。もちろん、私達は全力で教室に走ったが、結局、遅刻してしまった。

電話を切り、僕は和彦の方を見た。

電話の相手は安奈で、電話をしたのは和彦が和美の事を気に掛けていたから。

僕も、今日、初めて知ったが、和彦がこの前和美に告白されたい。もちろん、彼女がいるため断つたらしいが――。

その事を電話で話すと、安奈も驚いていた。多分、安奈もそのことを僕に言われた知ったんだと思う。もう、授業が始まるチャイムが鳴っているが、僕も和彦も、おまけに健介も屋上から移動するつもりは無かった。

やっぱり、和美の事が心配で勉強する気になれなかった。

「はっつ。和彦に彼女が居なければな……」

深くため息を吐く健介は、フェンスに背中を任せ座り込んだ。僕も和彦もその場に座り込み、暗い面持ちでため息を漏らす。

別に僕が落ち込む事じゃないけど、僕も和彦の気持ち分かるため何だか暗くなってしまったのだ。

暗い僕と和彦に対し、案外いつもと変わらない健介が呆れた様な表情を見せる。

「お前らが落ち込んでどーすんだ。全く」

「皆が皆、お前みたいに能天気じゃないんだよ」

俯いたまま和彦がそう言う。ため息を吐く健介が、僕の方を見て首を振る。

僕も険しい表情をして、ため息を吐いた。

「でもさ、心配だね。安奈達も知らなかったみたいだから」

「そうだな。こんな事なら、もっと早く連絡しとけばよかったな」

「全くだ。大体、何でも今まで黙ってたんだ！」

「お前が五月蠅いからだ」

「何だと！」

今にも喧嘩しそうになる健介と和彦の間に、僕が入りそれを止めた。

「二人が喧嘩してもしようがないよ」

「分かってるけどよ！」

「ごめん。健介」

健介に小さな声で謝る和彦。こんな和彦を見たのは初めてで、僕も健介も少し戸惑った。

いつもなんでも出来ると思ってたから、ちょっとビックリした。

「いいさ。俺だって、少し言い過ぎた」

健介も恥かしそうにそう言った。僕はホッとして、二人を見た。あんな風に言い合いになる事もあるけど、二人は本当は仲が良いと分かっているから。

「何事も無いといいね」

「そうだな。こればかりは、俺達の出る幕じゃないからな」

「しかし、女って不思議だよな」

ふと、健介がそんな事を言い出す。

僕も和彦も何が不思議なのか分からず、首を傾げると僕と和彦の顔を交互に見ながら言う。

「だってよ。女って、簡単に男の事を振るじゃないか。そんなくせ、振られると落ち込んで部屋に閉じこもるって、不思議じゃねえ？」
「そうかな？　男の人にも居るんじゃない？　簡単に女を振る人は」
「でも、そう言う奴は女に振られても、俺には他にも女は居るんだって、すぐ立ち直るだろ？」

「知らないよ。そんな事」

「大体、そんなんだって。それに比べると、女って不思議だろ？」

健介はそんな風に言うが、僕にはあんまり理解できない。元々、恋愛経験も少ないから、そんな事分かるはずが無い。

そんな僕と健介のやりとりを聞いていた和彦は、落ち着いた様子で言う。

「男と女って言うのは複雑だからな。特に恋愛においては」

「なあ、和彦もそう思うだろ？」

「俺は健介の意見に賛成した覚えは無いよ。ただ、女は男よりも恋愛に真剣だからね」

「ふーん。そうなんか？」

和彦の言葉に少々不満そうに健介が頷いた。

僕は何故か何と無くだが、和彦の言葉に納得してしまった。

まあ、それが本当に正しいかなど、僕には分からない。

それに、恋愛には何が正しいという答えなどないと思う。

放課後、私達（私と久美子と冷夏）は足早に寮へと帰った。

もちろん、それは和美に会って話を聞きたためだ。

と、言ってもそう簡単に和美が部屋から出て来るとも思えないし、話をしてくれる保障も無い。

それでも、何とか和美には元気になって欲しいと、私たちは必死だった。

息を切らせながらも、何とか和美の部屋の前に来た私たちは、力強くドアをノックした。

だが、部屋の中は静かで反応は無い。でも、部屋に和美が居るのは確かだ。

「やっぱり、出てこないか……」

「どうする？ 久美ちゃん」

「どうするって、ここは、強行突破でしょ？ 冷夏！ 管理室で鍵借りてきて！」

久美子のその言葉に私も冷夏も驚きを隠せず、戸惑っていると久美子が更に強い口調で言う。

「冷夏！ 急いで！ 容疑者に逃げられるわ！」

「は、はい！ 分かりましたわ！」

何だかよくわかんないけど、久美子の気迫に押され冷夏が管理室に向った。

残された私と久美子は、他の生徒達の視線を集めていた。まあ、あんな事を大声で叫べば、視線を集めるのも分かるが、これは私に堪えられるものじゃなかった。

「久美ちゃん。容疑者って言うのはどうかと思うよ」

「何言ってるの！　こういうのは気持ちから入らなきゃ駄目よ！」

「気持ちからって……」

呆れてこれ以上何もいえなかった。暫く待っていると、冷夏が和美の部屋の鍵を持って戻ってきた。

苦しそうに肩で息をする冷夏を、急かすように久美子は言う。

「さあ！　早く鍵を！」

「す……少し……休ませて……」

「こうしている間にも、容疑者が逃げ――！」

急にドアが開いた。ゴンツと、鈍い音が廊下に響き、久美子の体が仰け反った。

私も冷夏も突然の事で、仰け反る久美子の体を思わず避けてしまい、久美子がそのまま廊下に倒れた。

その時も、ゴンツと鈍い音が響いたため、多分頭部を廊下に打ち付けたのだと、思った。開かれたドアの向うには、目を赤くした和美の姿があり、ボサボサの髪を手で梳いていた。

「容疑者、容疑者って、私は犯罪者か！」

「か、カズちゃん！」　「和美！」

ほぼ同時にそう叫んだ私と冷夏は、涙目で和美の事を見た。

真っ赤な目で私と冷夏を見る和美は、目を細めると横たわる久美子を指差し言った。

「あれ、そのままだとやばいんじゃないか？」

「あーっ！　そうだ！　カズちゃん！　部屋で休ませて良いよね！」

「まあ、散らかってるけど少しなら」

「さあ、冷夏。久美ちゃんを運ぶよ！」

「そうですね。このままじゃまずいですものね」

私と冷夏は廊下で横たわる久美子の体を抱えて和美の部屋へと入った。

部屋は電気が消えてるため薄暗く、少し散らかっている。私と冷夏が久美子を連れて部屋に入ると、和美は少し散らかった部屋を掃除し始めた。

多分、散らかっている部屋を見られるのが嫌だったからだと思う。久美子をベッドに寝かせると、私と冷夏はベッドの横に座った。

ゴミを片付ける和美は、私と冷夏を見て恥かしそうに笑みを浮べる。

「散らかっててごめん。それで、今日はどうしたんだ？」

「和美が、もう二週間近く学校休んでいるから心配になったんですわ」

「そっか。何も連絡してなかったからな。悪い悪い。明日には行くよ」

「もう、大丈夫なの？」

私は心配でたまらなく少し声が震えた。そんな私に笑いながら和美は言う。

「大丈夫だって。そんなに心配するような事じゃないさ」

和美は笑うが、その目はまだ少し悲しげだった。まだ、立ち直れてないのだと、分かった。

でも、私は何て言って良いのか分からず俯いた。何だか涙がこぼれそうだった。何も出来ない私が情けなくて。

そんな時、冷夏が静かに口を開いた。

「話は全部聞きましたわ。雅之達から」

その言葉を聞くなり、和美が動きを止めた。

「そう。それじゃあ、私が振られたのも聞いたんだ」

「ええ。聞きましたわ」

「でも、もう大丈夫。振られるのは知ってたし」

「もっと早く相談してくださればよかったのに。私たち友達でしょ？」

急な話しの展開に和美が目丸くする。それでも、冷夏は話を進める。

「諦めては駄目ですわ。恋は持久戦ですよ。一度振られても、また、次がありますわ。その時までチャンスを窺うんですわ！」

「チャンスって、あっちは彼女がいるからな」

「何を仰るの！ 彼女がいるなら、彼女と別れるまで待つんですわ」「それって、いつになるかわかんないだろ」

「私は決して諦めませんわ！」

「あーっ。わかったわかった。もういいって。私も大分泣いたからもう元気になったし、ちゃんと明日から学校行くって」

和美がめんどくさそうにそう言うと、冷夏が「駄目ですわ！」と、言い出しその後延々と冷夏の恋の話を聞かされた。

でも、その話を聞いている時の和美は楽しそうで、何だか安心した。

もう、二学期も終盤に差し掛かった。

終盤と言つよりも殆ど終わりに近いが、俺はある事で頭を悩ましていた。

そのある事とは、今年ももうすぐやってくるクリスマスの事だ。去年は手作りオルゴールをプレゼントしたが、果たして今年は――何を上げるべきか。

だから、俺はこの悩みを解消すべきため、今日も雅之の席の前に居た。

「ウムムツ！ どうしたものか！」

「あのさ、何でいつも僕の席の前で考えるんだよ」

少々迷惑そうな表情を見せる雅之は、俺の方をジッと見てため息を吐いた。

それでも、俺はその場を笑い退け言葉を続ける。

「ナハハハッ！ 気にすんな！ それに、お前も安奈ちゃんへのプレゼント決まっていんだろ？」

「まあ、そうだけどさ」

「だろだろ。だから、一緒に考えようぜ！」

「そこで、何で一緒に考える事になるんだよ」

呆れた様に雅之がそう言い頬杖をつく。

そんな雅之を宥めながら、俺はピリピリとする教室を見回した。

この行動には二つの理由がある。

一つ目はこの教室内の様子を窺う事。

二つ目はある男を探す事。

だが、その男はこの教室内には居なかった。

「チツ、奴は居ないか」

「奴？ 多分、屋上だと思うよ。健介の探してる人って」

「またか……。しょうがねえ、行くぞ雅之」

「何で僕まで」

「いいからこい！」

ほぼ無理やり強制的に雅之を教室から連れ出し、屋上へと向った。廊下を歩いている者など限りなくゼロに近く、屋上に着くまですれ違ったのは一人の先生とだけだった。

それだけ、三年生はピリピリしているのだ。

屋上のドアをあけると同時に、俺は目の前の男に声を掛けた。

「また、屋上でお昼寝か？ 和彦」

和彦はその言葉にスツと体を起こすと、呆れた様な口振りで、

「またとは何だ？ それじゃあ、俺が毎日昼寝してるみたいだろ？」

と、言った。だが、ここ最近、和彦はよく屋上で昼寝をしている。

ここ最近と言うよりも、二学期後半に入ってほぼ毎日と言っているほど屋上で寝ている。

その為、探す手間も省けるし、色々とコッチにとっては都合がいい。

「それで、何か様か？ ユキまで連れて」

「それがよ。今年のクリスマスプレゼントの事で相談を」

「今年も？ 今年は自分で考えたほうがいいんじゃないか？」

「五月蠅いな！ 来年は自分で考えるから、今年まで参考にさせる

よ！」

「来年まで付き合ってるかな？」

ふと雅之がそんな事を洩らした。その瞬間、俺はギロリと雅之の事を睨んだ。

すると、雅之は苦笑いを浮かべ、距離をとった。多分、殴られると思ったんだろう。

俺もそのつもりだったから。だが、俺が殴る前に和彦が雅之の額にデコピンをくらわせた。

バチンと、凄いい音がし雅之が「ギャツ！」と、変な悲鳴を上げて額を押さえたまま蹲る。

「ううっ。和彦。不意打ちなんて汚いよ」

「今のはユキが悪いんだぞ。変な事いうから」

「でも、時々不安になるんだよ。いつか振られるんじゃないかって」

少し深刻そうな表情でそう言う雅之に、和彦が大分呆れた様に言う。

「大丈夫だって。お前と鈴木の場合は。お互いがお互いの事を思ってるんだからな」

「そうだな。俺もマサと安奈ちゃんは、何だかいつまでも一緒に居そうな感じがするな」

「多分、今頃、鈴木もユキとおんなじこと言ってるような気がするな」

冗談ぽくそう言った和彦は、大きな声で笑った。

俺も和彦に負けじと大声で笑ったが、「うるさいよ」と、雅之に言われてしまった。

高校三年 二学期―9 (川島 久美子)

朝から安奈がため息を吐いていた。

学校に着くまで何かを考え込む様に、俯いたままで、何回電柱にぶつかっていただろう。

大抵、こういう時はろくでもない悩みを胸に秘めているのだ。

その為、今日は安奈を誘って屋上で昼食を食べる事になった。もちろん、和美や冷夏も一緒だ。

「それで、今日は何？ また、安奈か？」

「エッ！ またって、それじゃあ、私がいつも迷惑掛けてるみたいじゃない！」

「うゝん。まあ、ほぼ当たってるかな」

「久美ちゃんまで！ 酷いよゝ」

私に助けを求めるような視線を送る安奈に、私は苦笑してみせた。落ち着いた様子の冷夏と和美は、弁当を広げそれを口に運びながら私と安奈の方を見ている。

「それで、今日はどういたしましたの？」

「私、あんまり寒いのが好きじゃないんだ。早く用件を話してくれよ」

確かに十二月で冷え込み、屋上は結構寒かった。私も本当はあんまり寒いのは好きじゃない。

だから、さっさと話を済ませようと、安奈の両肩に手を置き訊く。

「それで、今日はどうした？ 朝からため息ばかり吐いて、電柱には激突して。もしかして、雅之の事か？」

「まあ、それもあるけど……。実は、クリスマスプレゼントどうし

ようかなって」

「そうですね。もうじきクリスマスですね」

少し嬉しそうな声でそう言う冷夏は、目を輝かせながら安奈の方を見つめている。

一方、和美は全く興味が無いといった感じで、私の方を見ていた。私も安奈に言われるまで、もうじきクリスマスだと言う事に気付かなかった。

「そっか。もうそんな季節か」

「それで、何あげようかな？」

「知らん！ いっそ、私がプレゼントって言ってみたらどうだ？」

早めに話を切り上げようと、和美がそんな事を言った。すると、安奈が真顔で考え込んだ。

「ちょ、ちょっと！ あんた、本当にするつもりじゃないでしょうね！」

「エッ？ 駄目？」

「駄目に決まってるでしょ！ 何言っちゃってるのよ！」

焦りながら私は安奈を止めた。少し残念そうな表情を見せる安奈は「じゃあ、何がいいかな？」と、私の目を見つめながら言う。

そんな事、私に聞かれても思っている、冷夏が不思議そうに問う。

「去年は何をプレゼントしたんですの？」

「去年は、手編みのマフラーをプレゼントしたんだ。マサ今も持ってるかな？」

ちよつと不安そうな表情を見せる安奈は、ため息を吐き暗い表情に変わった。

多分、何か嫌な想像でもしたのだろう。私も、和美もそんな安奈の行動に少々呆れていたが、冷夏だけは違った。
優しく安奈の頭をなで、

「大丈夫ですわ。安奈が好きになった人ですもの。きっと大切にしていますわ」

と、優しい口調で言った。安奈は少し目を潤ませながら頷くと、明るく笑いながら言う。

「うん。そうだよ。ありがとう冷夏ちゃん」

笑顔の安奈に冷夏も笑顔を返した。私も和美もこの二人の間に入ることが出来ず啞然とした様子で二人を見据えていた。

その後も、安奈と冷夏はプレゼントの話をしていて、かやの外の私と和美は弁当を食べて話しに加わる事は無かった。

高校三年 クリスマスパティー―1 (倉田 雅之)

遂に、クリスマスがやってきた。

結局、プレゼントを何にするか悩んだ末、綺麗な星のネックレスにした。

そのせいで、今回僕に予算が無く、今年のクリスマスは僕の家でパーティーをする事にしたのだ。

恵利はパーティーをする事に対し、大賛成してくれ安奈の他にも色んな人を誘おうと提案した。

もちろん、僕は反対するはずだったが、結局、恵利が反対する前に安奈にメールを送ってしまったため、それも叶わなくなっていた。その為、今日は僕と安奈、恵利のほかに、健介と由梨絵、和彦、和美、久美子、冷夏の六名が僕の家を集まっていた。

いつもは広く感じる家もこんなにも大勢の人が集まると小さく感じる。

テーブルに並べられる料理は、全て僕の手作りで皆は料理を食べながら大騒ぎしていた。

「うめえ〜っ！ 流石はマサだ！ 料理の腕だけは凄いな！」

「健介。もう少し静かに食えないのか？」

「お前、クリスマスパーティーだぞ！ もう少し盛り上がりうぜ！ 酒もってこい！」

「俺達は未成年だぞ」

騒ぐ健介と対照的で、少し静かに料理を口に運ぶ和彦は健介に思いつき絡まれている。

その為、とっても迷惑そうな表情を浮かべていて、何だか少し可哀想だった。

一方、健介の彼女である由梨絵は、同学年の恵利となにやら楽し

げに話しをしていて、嬉しそうに笑っていた。

安奈も、いつものメンバーと料理を摘みながら話をしていて、僕はキッチンからその様子を見つめていた。

なぜ、キッチンにいるかと言うと、まだ僕にはやる事があったからだ。

そのやる事とは、ケーキのデコレーションだった。料理を作るのに夢中になっていて、肝心のケーキのデコレーションがまだだったのだ。

その為、皆が楽しんでいる中、僕は一人でキッチンに立っているのだ。

でも、その作業もようやく終わり、僕はケーキを冷蔵庫に入れて一息ついた。

「ふっ。やっと一段落ついた……」

「お疲れ様。これで、マサもパーティに参加できるね」

突然キッチンに顔を出した安奈が、笑顔で僕の方を見つめる。

「うわっ！ あ、安奈！」

突然の事に、妙な声を上げて僕はイスから落っこちた。そして、僕はそのまま頭を床にぶつけた。

鈍い音が家の中に響き、騒いでいた皆が少し静かになったのが分かる。僕は頭を擦りながら半笑いし、安奈を見て言う。

「急に出てきたからビックリしたよ」

「そんなに驚く事ないじゃない。まるで、幽霊を見た様な顔してたよ」

「そんなじゃないよ。ただ、僕の事なんて気にしてない様だったから」

「もう。私、ずっと気にしてたよ。このままパーティー終るんじゃないかって」

少し怒った様に頬を膨らませる安奈。こんな表情を見たのは、いつ振りだろう。

何だかそれが可愛くて、僕は思わず笑ってしまった。

「フフフツ」

「何よ！ 人の顔見て笑っちゃって！ もういいよ。マサなんて知らない！」

「ごめん。別にそんなつもりじゃなかったんだって！」

キッチンを出て行く安奈を僕は追いかけた。だが、キッチンを出てすぐ僕は健介に捕まった。

「マサ！ やつと終わったか。よし！ お前も飲むぞ！」

「ぼ、僕はいいつて。それより——」

「うるせー！ 俺の誘いを断るのか！」

「エッ！ そうじゃないけど……。って、言うか酔ってるの？」

安奈の方も気になったが、何故か少し顔の赤い健介が心配になり僕はそう訊く。

だが、健介は「ガハハハッ」と、大笑いするだけで僕の質問には答えない。

その為、僕は健介の後ろに立つ和彦の方を見る。和彦は少し呆れた様に肩を少し上げた。

僕は大笑いする健介に軽く愛想笑いして、その後ろの和彦の方へと移動する。

「ガハハハハッ！ さあ！ 皆で騒ぐぞ！」

「ちょ、ちよつと、和彦！ 健介、酔っ払ってるんじゃないよね？」

「俺に言われてもな。さつきからあの調子だぞ」

「ガハハハッ！ 何、コソコソはなしてるんだ！」

「や、止めるよ！ 健介。重いつて！」

僕と和彦の肩に腕を乗せ、体重を乗せる健介に僕はそう叫ぶ。

だが、健介は笑いながら更に体重を乗つけてくる。僕と和彦は結局健介の体を支える事は出来ず、そのまま床に押し倒された。

高校三年 クリスマスパーティー―2 (鈴木 安奈)

パーティーを抜け出し、近くの公園まで来ていた。

十二月の夜は流石に冷え込んで、薄着で雅之の家を飛び出してしまい、私は少し後悔した。

でも、何であんな事で怒っちゃったりしたんだろう？

今考えると不思議で、呆れて言葉もでない。

身を縮めベンチに座った私は、白息を吐きながらふと夜の公園を見回す。

所々に立つライトが穏やかな光を放ち、虫がその周りに漂っていた。そんなライトの光を見つめた後、私は空を見上げた。

真っ黒な空に、点々そ光を放つ星々。月は微かに光を放ち、他の星々よりも明るく輝く。

そんな夜空に見惚れていると、首に暖かいものが触れた。と、同時に雅之の声がする。

「そんな薄着で外に出ると、風邪引いちゃうよ」

振り返るとそこに雅之が居た。ニッコリ笑い、私を心配するような目をしていた。

私の首には、去年のクリスマスに私がプレゼントしたマフラーが。

「これって……」

「そう。去年貰ったやつ。校則で学校にマフラーとか持ってけないけど、普段外に出る時はいつも巻いてるんだ。ずっと、安奈と居られる気がするから」

「マサ……。ありがとう」

何か感激だった。こんな下手なマフラーを、いつも持ち歩いている

なんてと思うと。

涙が出そうになるがそこは堪え、私は微笑んだ。

少し呼吸の荒い雅之は、私の隣に座り深々と息を吐いた。
私を探すために走っていたのだろう。

「ごめんね。私——」

「何で謝るの？」

「エッ、だって、私が勝手に怒って——」

「何言ってるんだよ。そのおかげで、こうして二人っきりになれたんだよ」

雅之の言葉に少しドキツとした。

まさか！ 襲われるんじゃない！

何て私は考え頭の中は混乱する。

そんな私に、夜空を見上げながら、

「何だか、久し振りだよ。こうして、二人だけでゆっくり話すのって。最近、色んな人達と一緒にだったから」

と、笑顔で言う。

確かに、三年に上がってから、私と雅之の二人だけで居るのは少なくなっていた。

だから、こうしてゆっくりと話しをする事は極端に少なくなっていたのだ。

「それに、色々忙しくてメールのやり取りも少なくなってたし、話したいこと沢山あるし」

「そう言われてみれば、そうだよ。私達、進路の事とかで忙しかつたもんね」

何だか、メールのやり取りを沢山している日々の事を懐かしく思いながら、私はそう言った。

その後、私と雅之は今まで話せなかったことを話した。
沢山沢山今までにないくらい話した。

暫く話して、雅之は思い出したように声を上げる。

「あつ、そうだ。忘れない内に、これ」

小さな正方形の綺麗に包装された箱を私に手渡す。

私の事をニコニコしながら見る雅之に、私も微笑を返して包みを開いた。

包みを開くと小さな木箱があり、私はその蓋をゆっくりと開く。
箱の中央には小さく綺麗に煌く星のネックレスが寝かされていた。
私はそれを手に取り、

「うわっ。可愛い。ありがとう、マサ」

と、言った。雅之は嬉しそうに微笑んで答える

「いいよ。安奈が喜んでくれて」

「それじゃあ、私からは——」

私はそこまで言ってから、軽く雅之の唇に唇を重ねる。

一瞬時が止まった様に周りが静まり返り、風で揺れる木々の葉の音だけが響いた。

高校三年 冬休み―1 (加藤 健介)

冬休みに入り幾日が過ぎ、大晦日がやってきた。

もう、毎年恒例となった雅之の家の大掃除を手伝うため、俺は朝も早くから家を飛び出した。

家の大掃除をやりたくないという理由もあるが、一番の理由は雅之の作る年越しそばを食べるためだ。

雅之の家に向って歩いていると、曲がり角から丁度安奈が出てきた。

「あつ！ 健介君」

「おつ。安奈ちゃんもマサの家に行くのか？」

「うん。大掃除の手伝いに。健介君も？」

「まあね。家に居ると色々させられるからな。それに、マサの作る年越しそばを食いたいから」

俺がそう言うと安奈が口を隠しながら笑う。

別に変な事を言っただつものない俺は、それが不思議でしょうがなかった。

そんな俺の気持ちを悟ったのか、安奈は答える。

「健介君の気持ちも分かるな。確かに、家に居ると色々させられちゃうもんね」

楽しげに安奈はそう言う。

その後、俺と安奈は何と無く盛り上がり、雅之の家に到着した。

「今年も来たんだ」

到着早々、不満そうな表情で俺を見ながら恵利が言う。
そして、安奈の方に顔を向けると笑顔を見せ言う。

「おはようございます。安奈さん。今日は忙しいのに手伝いに来てくれてありがとうございます」

「別に、忙しくなんかないよ」

「さあ、入ってください」

俺とは対照的な扱いの安奈は、恵利に連れられ家の中へと入っていった。

一人取り残された俺は、虚しくその場に立ち尽くし一言。

「何か、俺の扱いひどくねえ？」

それから、俺は雅之と家の外回りの掃除を開始した。寒い中、冷たい水をホースから出しながら、窓掃除をしていた。

毎年の事だが、この寒さはやっぱり辛い。それは、雅之も一緒だと思うが、雅之は嬉しそうに笑みを浮かべながら、鼻歌なんか歌って窓を拭いている。

「ふふふん。ふん」

「お前さ、寒くないのか？」

鼻歌を歌う雅之に、俺は不満げに訊く。その質問に、雅之は笑顔で答える。

「寒いけどさ、今年も安奈が来てくれたのが嬉しくてさ」

「そうかい。そりゃよかったな」

「どうかしたの？ 何だか不満そうだけど」

少々、首を傾げ雅之が聞く。

まあ、不満といえは不満だ。

何でも俺と安奈の扱いが違っんだ。

そう言いたかったが、何と無く言っちゃ悪い気がし、それはいかなかった。

「別に、不満じゃないさ。今年は去年よりも冷えると思ってさ」

「あゝあ。そうだね。今年は結構寒いね」

「だから、さつさと窓掃除終らして中入ろうぜ！」

「でも、早く終わると、中の掃除も手伝う事になるけど？」

俺の方を見てニコニコと微笑む雅之に、俺はガツクリと肩を落としたため息をついた。

そんな俺を元氣付けようとしたのか、雅之が思い出したように、

「でもさ、早く大掃除終われば、早く年越しそばが食べられるかもよ」

と、言い笑顔を俺の方に向ける。

年越しそばか……と、思いながら俺の頭の中に雅之の作った年越しそばの映像が映る。

その瞬間、俺の心の奥底からやる気がジワジワと湧いてきて、一気に爆発した。

「ウオオオオツ！ そうだ！ 俺は、年越しそばの為に今日は来ただんだ！ さつさと終らして年越しそばを食うぞ！」

「うんうん。そのいきだよ。頑張れ」

完全に雅之に乗せられ俺は黙々と窓を拭いた。

今年の大晦日も、奴が来た。

奴と言うのはもう毎年日課の様に大晦日にやってきて、年越しそばを食べてゆく加藤 健介の事だ。

確かに大掃除を手伝ってくれるのはありがたい。でも、その分食費がかさむ。

毎度の事ながら、大掃除が終った後の年越しそばを人一倍食べる。その分働いてくれればいいのだが、殆ど私とお兄ちゃんで終らせている様なものだ。

まあ、力仕事はお兄ちゃんより頼りに成るから、助かるけどもう少し働いて欲しい。

お兄ちゃんはその事全く気にはしていない様だし、私としてもお兄ちゃんが気にしないならそれでいいかなって最近思う。

でも、今年は――。

「それでさ、安奈ちゃん、聞いてくれよ」

「う、うん。き、聞いているよ」

「おう。マサ！ お茶くれ！」

「はいはい。わかってるって」

って、何であんたが安奈さんと並んで座ってんのよ！

大掃除が終わり、休憩を取る事になり健介先輩は迷わず安奈さんの隣にすわった。

普通、彼氏のお兄ちゃんが横に座るのが当然だと、私は思うがそんな事お兄ちゃんは気にしていない。

と、言うより少し鈍いのだ。

今度と言う今度ばかりは、私が何とかしなくては。

私はそう思い即座に玄関の方に向かい携帯のボタンをプッシュす

る。

何度か呼び鈴が鳴り、向うから声が。

『もしもし。どうしたの？』

「由梨絵？　今、忙しい？」

『今？　別にだよ。大掃除も終ったし、今は暇かな』

「それじゃあさ、家来ない？」

『えっ？　恵利ちゃんの家には？　でも、迷惑じゃない？』

「大丈夫。家にすでに迷惑な人が来てるし、由梨絵にはその人をひきつけてもらいたいわけよ」

私がそう言っていると、暫し唸り声が響いた後明るい声が聞こえる。

『うん。わかった。すぐ行くね』

「ありがとう。助かるわ」

電話を切り、私は思わずガッツポーズをする。

これで、お兄ちゃんと安奈さんの恋愛を邪魔する奴は消える。そう思うと私は自然と笑みがこぼれた。

リビングに戻ってくると、普通に三人でお茶を飲んでいた。

「恵利もお茶飲むか？」

「ううん。私はいいや」

「そう」

それから、暫く四人で喋った。

私は早く由梨絵が来ないかと、時間を気にする。

そんな時、室内にチャイムが鳴り響いた。私は由梨絵だと思い、すぐに玄関に走った。

「いらつしゃい！」

私が玄関を開けると、そこには由梨絵ではなく和彦先輩の姿があった。

「どうも。いつも、元気だね」

「あつ、か、か、かか和彦先輩！」

「フフフツ。びっくりした？」

「由梨絵！」

和彦先輩の後ろからヒョコツと顔を出す由梨絵は、ドッキリ成功と、小さな声で言い私の顔を見てニコニコと笑う。

「途中でばったりあっちゃったんで、一緒に連れてきちゃいました」

「それなら、そうといってよ！ ビックリするでしょ！」

「報告しちゃったら、ドッキリにならないでしょ？」

和彦先輩の後ろに隠れながら由梨絵がそう言い、和彦先輩が少し困った様な表情を見せる。

それに気付き、私はすぐさま和彦先輩を家に招く。

「ど、どうぞ。す、すいません。和彦先輩にため口なんて」

「いいんだよ。それに、俺の方も気にしてないし。ため口の方が俺もらくだからさ」

「えっ、で、でも」

戸惑う私に由梨絵が悪戯っぽく笑いながら言う。

「顔真っ赤にしてる。駄目だよ。和彦先輩には彼女がいるんだから」
「し、知ってるわよ！ それくらい！」

「キャツ。怒った怒った！」

「人を馬鹿にして！」

完全に由梨絵のペースに飲み込まれた。

二人をリビングに連れてくと、お兄ちゃんも安奈さんも驚いた様子で、健介先輩にいたってはお茶を零していた。

高校三年 冬休み―2 (倉田 恵利) (後書き)

間違いメール番外編が遂に70話を突破しました。安奈編から様々な物語を語ってきましたが、まさか本編よりも長くなるなんて、思っても見ませんでした。

読者の皆さん、本当にありがとうございます。あとわずかで終わりますが、最後までよろしく願いします。

高校三年 冬休み―3 (白羽 和彦)

由梨絵に連れられ、雅之の家に来ていた。

雅之も驚いた様で、目を丸くしていた。

俺も安奈と健介が居る事に驚いたが、それ以上に健介は由梨絵が来た事に驚いていた。

ソファーから立ち上がり、すぐにその場を離れた健介は、引き攣った笑いを由梨絵にむけている。

「もしかして、恵利ちゃんが言ってた迷惑な人って健介先輩だったんですか」

「そうなのよ。迷惑なのよ」

「駄目ですよ。健介先輩。迷惑掛けちゃ」

「お、俺は迷惑なんてなあ」

健介が雅之を見てそう言うが、雅之は何の反応も見せずお茶を啜っていた。

そんな雅之を見て、安奈は軽く苦笑する。由梨絵はすぐさま健介の傍に移動し、なにやら説教を初めていた。

お茶を啜っていた雅之はソファーから立ち上がると、俺の方を見て軽い口調で言う。

「何か飲む？ って、言ってもお茶しかないけどね」

「それじゃあ、お茶貰おうかな」

「来るなら、来るで言うてくれれば飲み物用意してたのに」

「いや。来るつもりじゃなかったんだけど、由梨絵ちゃんに捕まっ
てな」

「そうなんだ。それじゃあ、今日は年越しそば食べていってよ。毎年、僕が作ってるんだ」

少し自慢そうに雅之がそう言う。それだけ、腕に自信があるんだろ。

俺も少し興味があつたので、雅之の作る年越しそばを食べる事にした。

まだ、外は明るく、年越しそばを作るまでまだ時間があると言う事で、皆で雑談を楽しんだ。

それから、暫くして、恵利が安奈と由梨絵を連れて買い物に出かけた。

連れてと言うよりか、二人が着いて行つたと、言う方が正しいだろう。

残された、俺と雅之と健介は、のんびりと話をしていた。

「しかし、ビックリだぜ。まさか、由梨絵が来るとは」

「俺もビックリだよ。由梨絵に会ってユキの家に連れてこられるなんて」

「そうだね。まさか、和彦まで大晦日に来るなんて思わなかったよ」

「悪いな。忙しいのに」

「別に、大して忙しくはないけどね」

雅之はそう言い微笑む。それに対し、不満そうな表情を浮かべる

健介は、ため息を吐く。

軽く首を傾げる雅之はそんな健介に訊く。

「どうかした？」

「いや。大して忙しくないって言ったからさ」

「忙しくなかったでしょ？」

「いや。結構大変だったぞ。大掃除。それに、手伝ってないのに、和彦まで食うのか？ 年越しそば」

かなり不満そうな表情だ。

引き攣った笑いを浮かべる俺は、雅之に目で助けを求めた。すると、それに気付いたのか雅之が言う。

「まあまあ。和彦には色々お世話になってるし、僕としても皆で美味しく年越したいし、いいじゃない」

「でもよ。俺、大掃除手伝ったんだぜ」

「だって、健介はその分、年越しそば一杯食べるじゃない」

「まあ、そうだけどさ」

不満そうに唇を尖らす健介は、小声でブツクサと言いながらお茶を口にはこんだ。

雅之はクスクスと笑っていたが、俺は何だか申し訳なかった。

偶然、由梨絵にあって来ただけなのに、年越しそばをご馳走になるなんて思っで。

帰ろうとも考えたが、それでも興味があつたのだ。雅之の作る年越しそばに。

近くのお店まで買出しに出ていた。

買うものは兎に角一杯あるらしく、私と安奈さんは恵利ちゃんについてきたのだ。

恵利ちゃんは、「大丈夫だよ」と言っていたが、安奈さんは「いいよ。一緒に行くよ。去年大変だったから」と、笑顔で言い、恵利ちゃんが負けたといった感じが見受けられた。

お店では色々な調味料を買いだめしていた。安い時に一杯買っておくのが、倉田家の決まりなんだって、恵利ちゃんは言ってたけど、多分今日のは買い過ぎだと思う。

私も安奈さんも恵利ちゃんも両手一杯に袋を持っていて、その袋の中は調味料だらけだった。

「ちょっと、買いすぎちゃったかな」

「恵利ちゃん。ちょっと所じゃないよ。砂糖なんて五キロ分買ってるよ」

「砂糖はすぐになくなっちゃうの。だから、それ位買いだめしておくのがいいのよ」

「本当？」

「本当よ」

半信半疑の私に、胸を張り堂々とそう言う恵利は、白い歯を見せて微笑んだ。

やっぱり、買いすぎたんだ。と、私は思い笑みを返した。

安奈さんはそんな私と恵利ちゃんの会話を聞いて「フッフッフッて、含み笑いをしている。」

「どうかしたんですか？ 安奈さん」

「うっん。別に大した事じゃないの。ただ、二人とも仲が良いんだなって、思って」

「そうですね。大親友ですよ」

安奈さんの言葉に、私はそう答え「へへへッ」って笑い声を上げた。

三人で何と無く笑って、細い街道を歩いていった。でも、やっぱり大量の調味料は重く、両手は痛くてたまらなかった。

「た、ただいま」

疲れ切った声で恵利ちゃんが玄関を開け叫ぶ。
すると、明るい声で返事が返ってくる。

「おかえり、冷たいお茶が用意されてるよ」

白羽先輩だった。何て気の利く先輩なんだろう。
それに比べて、健介先輩は――。何をしているんだ。

と、思いながら、リビングに向った。すると、何と健介先輩が倉田先輩（雅之）にソバの麵打ちを教わっていた。

私も安奈さんも恵利ちゃんも驚いた表情をしていたのだろう、白羽先輩が笑いながら答える。

「驚いたろ。来年は来れるか分からないから、今の内に雅之のそばの作り方を覚えるんだってさ」

「そんな、一朝一夕で覚えられるものじゃないよ」

「そうだね。それでも、諦めないって所が彼らしいけどね」

落ち着き払い少し笑みを見せる白羽先輩。

健介先輩と違い、こちら辺はカッコいいって感じる。

暫く麵打ちをする健介先輩を私達は眺めていた。

汗を滲ませながら、必死に麵打つ健介先輩は、少しだけカッコよく見えた。

それから、何時間かが過ぎ、ようやく年越しソバが完成した。

汁は倉田先輩が作ったが、麵は健介先輩が作ったので、太さがバラバラで太いのがあれば、細いのもあった。

「初めてにしては、良い感じだよ。僕なんて、食べられるものじゃなかったからね」

少し落ち込む健介先輩を励ますように、倉田先輩はそう言った。白羽先輩も「誰だって、初めから上手くいくことはないさ」と、いつて笑って年越しソバを食べていた。

でも、倉田先輩の作った年越しソバが食べられなくて少し残念そうだった。

私も倉田先輩の作る年越しソバが食べられなくてちょっぴり残念な気持ちになったが、健介先輩が一生懸命打った麵は美味しく感じた。

高校三年 冬休み―5 (倉田 雅之)

一月一日。

年も明け、朝から神社の前で大勢の人に囲まれていた。

今年も初詣に来ていたのだ。だが、去年と違い今年は一人で、安奈は隣に居ない。

ちよつと訳有りで、安奈とここで待ち合わせているのだ。でも、この混雑では見つける事は難しいだろう。

健介と由梨絵ともこの神社で会う予定だが、果たして会えるのだろうか。

そんな不安を頭に過ぎらせながら、大勢の人に流されてゆく。完全に流れに身を任せる僕は、遠くで名前を呼ばれたのに気付き足を止めた。

何処からか分らないが、確かに安奈が僕を呼ぶ声が――。
辺りをキョロキョロしていると、突然右手首をガツチリとつかまれ、引っ張られた。

「うわっ！」

驚きの声を上げた瞬間、目の前に安奈の顔が現れた。

「やっと捕まえた。もう、見つけるの大変だったんだから」

着物姿の安奈の姿に見惚れる僕は、完全に安奈の言葉など耳に届いていなかった。

少し首を傾げる安奈は、僕が話を聞いていないのに気付いたのか、頬を膨らます。

「もう！ 私の話しきいてないでしょ！」

「あつ、ごめん。つい、見惚れちゃって――」

我に返った僕がそう言うと、安奈は恥かしそうに赤面し顔を隠す様にする。

「うゝゝ。恥かしいよ。そんな事言われちゃ」

「だって、本当のことだし」

「もう、マサッたら」

安奈が軽く僕の右肩を叩いた。

そんなに強くないが、僕はフラフラッと後ろに一步下がってしまった。

その瞬間、人の波にさらわれ流されてゆく。

ビックリした様に、安奈は僕の後を追いかけてきた。

「もう。ビックリしちゃったよ」

「僕もビックリだよ。まさか、流されるなんて」

何とか合流できた僕と安奈は、ようやくお賽銭を投げ入れ手を合わせた。

去年はどんな事を願ったかな、何て考えながら今年も安奈と一緒に居られますようにと願う。

安奈は何を願っているのか、随分と長い間手を合わせていた。

お賽銭の後は、去年と同じ様におみくじを引いた。

去年は吉だったが、今年はどうだろう。そんな事を考えながらおみくじを引くと、何と大吉だった。

「おっ！ 大吉だ。新年早々、嬉しいな」

嬉しさのあまり笑みが自然とこぼれた。

そんな僕を見つめる安奈は、羨ましそうに言う。

「いいな〜っ。よいい。私も大吉引くぞ！」

張り切りながら安奈がおみくじを引いた。

結果は――。

「やった！ マサと同じ大吉だ！」

そついいながら安奈が抱きついた。一瞬ドキツとした。

顔はみるみる赤くなり、恥かしくなり安奈の顔を直視できなかった。

安奈はそんなの気にしていない様で、嬉しそうにおみくじを見ている。

「恋愛は、相手を愛すべしだって。マサのはどう？」

「僕のは、相手を信じればよしだって」

僕は自分の恋愛の項目に書かれた言葉を読む。

すると、少し悲しそうな表情を浮かべ、安奈が聞く。

「マサ、私の事信じてる？」

「エッ。当たり前じゃない。疑う事なんて無いよ」

「本当に？」

「本当だって」

僕がそう言つて微笑むと、安奈も安心したように笑みを零した。

それから、何とか健介と由梨絵と合流し、のんびりと家でおせちなんかを食べて過した。

もう三学期になった。

あつと言つ間に卒業しちゃうんだと、考えると何だか少し切ない。久美子・和美・冷夏の三人と会えるのも、もうあとわずかなんだと。

ぼんやり窓の外を見ていると、廊下から久美子と冷夏に呼ばれた。何の様かも分からず、私は席を立ち廊下に出る。

「何？」

「私、就職決まったんだ」

「エッ、本当？」

久美子の言葉を疑う訳じゃない。ただ、驚いたのだ。

胸を張る久美子は、「本当」と力強く言い笑みを浮かべる。

久美子の就職が決まり、私は嬉しかった。これで、全員進路が決まったから。

「それで、どんな所？」

「それが、陸上部のある会社でさ。面接で思いつき走りたいですつて言ったら、何か合格しちゃった」

「本当、強運の持ち主ですわね」

「これで、みんな進路が決まったんだね」

笑顔で私が言う。

すると、不思議そうな表情を冷夏と久美子が見せた。何故か分からず、私が首を傾げると、冷夏が聞く。

「安奈は、進路決まってたんですの？」

「うん。就職、決まったよ。言ってなかった？」

「聞いてないよ。何時決まったのよ！」

「冬休み始まる前くらい？」

そう。冬休み前には既に就職が決まっていた。

でも、クリスマスで忙しかったから、皆に言っのを忘れていたのだ。

久美子も冷夏も少し不満そうな顔をしていたが、すぐに笑顔に変わる。

四人全員の進路が決まった嬉しさから。

放課後までその余韻が残り、帰りも皆で喜んでいた。

「でも、皆進路決まってよかったね」

「それは、そうと、安奈は報告しなくていいわけ？」

「報告？ 誰に？」

「あんたの彼氏よ」

久美子と和美に言われたハツとする。

そう言えば、雅之には進路の話をまだしていないのだ。

雅之の進路については聞いていたけど、自分の進路は一度も話していない。

これは、すぐに報告しなくてはと、私は携帯を取り出した。

「今、報告するんですの？」

「うん。心配してるかも知れないし」

そう言いながらメールを打つ。

『マサ。報告遅れたけど、私進路決まったんだよ。冬休み前には決まってたんだけど、色々あって言っのを忘れちゃってたんだ。ごめん

ね
』

メールを送信して、私は携帯を閉じ「よし」と小声で言った。
それから、暫くして、雅之からのメールが届く。

『よかったね。コッチは、和彦が大学受験受けるんだって。和彦の
事だから心配はしないけどね』

メールを読んだ後、「大学受験か……」と、呟く。
和彦も大変だなんて、思いながら私は返事を送る。

『そっか。和彦君受験するんだ。大変だね。でも、和彦君だったら、
余裕かな』

そのメールにすぐに雅之の返事が返ってくる。

『アハハハハッ。まあ、確かに余裕かも知れないね。でも、本人い
わく、油断すると足元すくわれるだって。受験が終わるまで何が起こ
るかわからないから、気を引き締めるんだっていったよ。うーん。
僕ももう少し和彦を見習わなきゃいけないね』

このメールの内容に、私も少し笑った。

和彦らしいな。と、思ったから。

私も、和彦を見習わないといけないと思った。

今日で、高校も終わりだ。明日からは卒業式まで三年生は、休みだ。

その為、今日は午前中で学校が終った。

することも無く暇だった俺は、いつもの様に雅之の家に來ていた。

「なあ、何かする事無いか？」

「する事？ 勉強でもする？」

「何で勉強になるんだ！ 何か楽しい事だよ」

「何か楽しい事？ うゝん。テレビでも見る？」

「テレビ見てるだけで楽しいか？」

俺が不満の声を上げると、迷惑そうな表情を見せた雅之は、暫く考えて答える。

「それじゃあ、健介は何か楽しい事思いつく？」

「うゝん。そうだな。彼女とデートとか？」

「由梨絵はまだ学校だよ」

「そうだったな。じゃあ」

俺は唸り声を上げながら考える。

あーでもない、こーでもないと考える俺を尻目に、雅之ののん気に家の掃除をしていた。

俺の目の前を掃除機が横切り、ゴミを吸い取ってゆく。

その後は、キッチンの方から水の流れる音と食器のぶつかる音が聞こえる。

きつと、皿を洗っていたのだろう。

考える俺は雅之がそれらの仕事を終えて戻ってきた時に、口を開

く。

「よく考えたが、何も思いつかねえ」

「まだ、考えてたんだ」

少し驚いた様に雅之が答えた。

もちろん、俺は少し力チンと来た。

「何だと、お前、何も考えてなかったのか！」

「そりゃ、僕は掃除しなきゃいけなかったから」

「何だそりゃ！ お前、人に考えさせて何やってんだ」

「だって、健介が何かやる事無いのかって聞いたんでしょ？ 僕に言われても困るよ」

「ふざけんな！ 誰が聞いたとかあるか！」

俺は怒鳴り立ち上がった。一方の雅之は何故か落ち着いていて、ゆっくり立ち上がりキッチンに向う。

最近、雅之が俺の事を怖がらなくなった。

まあ、それだけ親しい仲になったんだと、実感する。

雅之がキッチンに行き、一人残された俺は戸惑い怒りも冷めた。ため息を漏らし、もう一度ソファに腰を下ろし頬杖をつく。

「はあ〜っ。あいつのペースだと、怒りも冷めてしまう」

「でも、怒りながらだと、ケーキも不味くなっちゃうよ」

そう言いながら雅之がケーキを二皿持って来る。

そのケーキが視界に入ると、俺はもうさっきまで何を考えてたのか忘れ、ケーキだけをジッと見ていた。

俺の前にケーキが置かれ俺は、すぐさまフォークを手に取り手を合わせる。

「いただきまーす」

「あつ、言うの忘れたけど、それ由梨絵が作ったのだから——って、遅いか」

「ウガアアアッ！」

俺はケーキを口に運びその塩辛さに呻き声をあげた。

そんな俺を見ながら、雅之は右肩を落としながら半笑いを浮かべため息を漏らす。

流石に俺もこれには怒りが頂点に上った。

「てめえ！ 何食わしとんのじゃ！」

「人の話を聞かないから、そうなるんだよ。それは、昨日由梨絵が一番最初に作った物で、僕が作り方を教えながら何度も作り直して完成したのがコツチだよって、言おうとしたら健介が勝手に——」

「目の前に置かれたら、食っていいと思うだろうが！ 普通」

「言われてみれば、そうかもしれないね」

笑顔で雅之がそう言う。言われなくても分かるだろう！ と、ツッコミを入れたかったが、そんな元気はなくなっていた。喉がヒリヒリとしていて、もう声も出したくなかった。

「これ、食べる？」

雅之がもう一つのケーキを見せる。流石に由梨絵が作ったと、聞いていたためこればかりは食いたくねえと思っていると、

「一応、試食したけど、最後のこれは美味しかったよ」

と、言い微笑む。

まあ、雅之が嘘をつく訳もないと、俺は恐る恐るケーキに手を伸ばす。

フォークで少しだけケーキを切り、ゆっくり口に運ぶ。
先程と違って、ケーキの甘さが口いっぱいに広がった。

「ウメエ！　おい、これ本当に由梨絵が？」

「そうだよ。何でも、卒業式の人にケーキ作って驚かせるんだって
言ってたよ。あつ、これって、言っちゃいけなかったのかな？」

「お前、知らないぞ。由梨絵怒ると怖いんだぜ」

「あゝつ。まあ、いいや。健介、ここであつた事は聞かなかった事
に」

雅之はそう言い笑った。

まあ、俺も別に由梨絵に言うつもりもないし、由梨絵の考えたド
ッキリに引つかかってやろうと思っていた。

高校三年 三学期―3 (川島 久美子)

三年生は休みに入った。

卒業式まで、何してよう。

別にする事もないし、部屋でごろごろしてるのも。

って、言うか寮はもう出てかなきゃいけないし。

色々大変だな。

悩みは絶えません。

安奈はもう実家に荷物を送ったらしいし、冷夏も荷物をまとめて明日実家に送るらしいし、和美はとりあえず大学の方の寮に移るらしい。

皆、色々大変なんだ。

私も、荷物まとめなきゃならんのだが、色々と大変な訳だ。

それでも、のんびりと部屋で寛いでいる。

「片付け……。めんどくさい！」

枕に顔を埋めそんな事を叫んでいると、部屋のドアが急に開かれ安奈の声が響いた。

「ウワツ！ 久美ちゃん！ まだ、荷物まとめてないの！」

「安奈。勝手にドア開けちゃ駄目なんだ」

「何言ってるのよ。電話したのに出ないから心配して来たのに！」

「電話？ そういえば、携帯何処おいたっけ？」

「私に聞かれても知らないわよ」

安奈が少し力強い声でそう言う。

まあ、当然といったら当然だ。だから、私は辺りを見回し携帯を探す。

呆れた様子の安奈は、右手に携帯を持ちそれを耳に当てる。すると、何処からか着信音が――。

「音鳴らしてるけど、何処からかな？」

「うん。音からすると、近くにある気がする」

「じゃあ、早く見つけてよ」

「わかったわよ。今探すから」

私はそう言い音のする方を探す。

着信音が徐々に近づく。そして、携帯が布団のしたから顔を出した。

私は携帯を手に取り電話に出る。

「見つかった」

「うん。分かってるよ。目の前に居るんだから。別に電話に出て言う事じゃないよ」

「そうだね。じゃあ、切るわ」

私はそう言つて電話を切り携帯を置んだ。

安奈もすぐ携帯をしまい、私の傍に座る。

ゆっくりと落ち着いた感じで部屋を見回す安奈は、あまりの散らかりっぷりに啞然としていた。

「ねえ、久美ちゃん。もう、この寮から出ていかないといけないけど、少し荷物まとめなきゃ」

「わかつちゃいるんだけどね」。どうにも片付かなくてね」

「それは、片付けようとしなからじゃないの？」

意外とそう言う所は鋭い安奈。

私の心を見透かした様にズバツと本心を言い当てる。

引き攣った笑いを見せた私は、「その通り」と、開き直ったように言い放ち、安奈が呆れたようにため息を漏らした。

「その通りじゃないよ。私も手伝うからさ。早く片付けすませちゃお」

「そうね。安奈がそう言うなら」

「あのね！ 久美ちゃん」

「冗談よ。冗談」

怒った様子の安奈に、私は笑いながらそう言う。

すると、安奈は「もう」と小さく呟き頬を膨らした。

まるでフグの様な顔の安奈を見て、私は爆笑した。

その後、何故か和美がやってきて、「うるせえ！」と一喝した後、私は一発殴られた。

意識は遠退き、結局この日は荷物をまとめる事なんて出来なかった。

もうすぐ、卒業式だ。

大学入試も終わり、合格発表を待つだけとなった俺は、息抜きのため公園に来ていたが、そこで思わぬ人物と鉢合わせになった。

「おつ、和彦。何してるんだ？」

ゴツゴツした声の男 健介。

彼がこの公園で何をしているか分からないが、暇だったため話をする事にした。

「俺は、軽い息抜きだ。お前は何してるんだ？」

「素振りだ。練習とかサボつてると、腕がなまるだろ？ だから、こうして素振りする様にしてるんだ」

「バッテリーセンター近くにあるだろ。そこで、球打った方が良いんじゃないか？」

俺のこの発言に健介が呆れたように首を振り不適に笑みを浮かべ答えた。

「お金がありゃ、そっちに行ってるさ。今、金欠で苦しいんだよ」

「そうなのか。それじゃあ、俺がおこつてやるよ」

何と無く、受験で溜ったストレスを発散させたかった。

その為、バッテリーセンターに行こうと誘ったのだ。

俺の言葉に少し嬉しそうに笑みを浮かべる健介は、明るく答えた。

「良いのか！ おこつてもらって！」

「ああ。俺も、少しストレス解消したいからな」

「珍しいな。お前がストレスなんて」

「受験で色々モヤモヤしててな」

俺がそう言つて苦笑いを浮かべると、健介は「そうか」と小さな声で言い、なにやら表情を変え力強く言う。

「よし。俺が、スカツとするバッティングの仕方を教えてやる」
「いや。いい」

健介が言い終わる前に、俺は即答した。
教えてもらうと、何だか余計にモヤモヤするだけだ。
それに、自分が思いつきり振ればそれで良いと思う。
少し落ち込み気味の健介を連れ、バッティングセンターに来た。

「さて、まずは健介の腕前でも見せてもらおうかな？」
「見せてやろうじゃないか。俺の腕前を！」

自信満々で健介は140キロの場所に入っていく。
結構、近くで目の当たりにすると、140キロは速く感じる。
俺には多分打てないだろう。

そう思っている矢先、快音が響く。

流石は元野球部。軽々と球を打ち返してゆく。

「凄いな」

「な〜に。この程度、この俺に取っちゃ朝飯前だぜ」

「それじゃあ、俺は100キロ位から挑戦するかな」

「初心者はその方が良いぞ」

俺を小ばかにする健介に、少し腹が立った。

そして、その怒りを全てボールにぶつける。

快音が連続で鳴り響く。すると、健介の「おおっ」と、驚いた様な声が聞こえる。

最後の一球も軽々と弾き返した俺は、自信満々に健介の方に行く。

「やつぱり、一年の時に野球部に誘つとくべきだったな」

「誘つても入らないつて。元々、部活入る気はなかったから」

「ムムッ！ なぜ、そんなに運動出来て部活に入らん」

「事情は色々さ。それより、練習しないのか？」

「ムッ！ やるさ！ やるに決まってるではないか！」

健介はズカズカと歩いてゆき、また140キロの球を打ち返していた。

その後も、俺と健介はバッティングセンターに快音を響かせた。

いよいよ、明日は卒業式だ。

この三年間、色々あった。特に、二年・三年と続け様に色んな事があった。

思い返せば、全ては安奈と出会ってから全てが始まった気がする。そんな事を考えながらベッドに横になっていると、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

何と無く愛想よく返事をする私。

ドアを開けると、久美子の顔がアップで映る。

その瞬間、ドアを閉めようとするが、久美子の右足がそれを阻止する。

「何でしめんのよ!」

「あんたが来ると、ろくな事無いんだよ」

「私が疫病神だって言いたいわけ?」

「そう言ってるつもりだけど、伝わらない?」

ニツコリ笑い私がそう言うと、久美子もニツコリと笑みを浮かべ「友達でしょ?」と言う。

やはり、何か嫌な予感がする。

これは、関るとまずいと、私の頭の中で判決が下る。

「友達だけど、何か嫌なにおいが漂ってるから、近付かないでくれ」
「ちゃんとお風呂には入ってるわよ!」

いや、そう言う意味で言ったわけじゃない。
イライラとする私は、歯を食い縛りながら言う。

「なに？ 何か用なのか？」

「用があるから、来てるんでしょ」

歯を食い縛り笑みを浮かべながら私と久美子は睨み合っていた。
お互い、力一杯にノブを引っ張り合うが、そこに安奈の声が響いた。

「くゝみちゃん。何してるの？」

「あっ！ 安奈！ 安奈も手伝って！」

「手伝うって……。何を？」

「良いから、引っ張るのよ！」

久美子がそう言うのが聞こえた。

その瞬間、私はノブから手を放す。

ドアは勢いよく開かれ、久美子は転げる。長い廊下を。

大きく開かれたドアの向うに安奈がニッコリ笑みを浮かべていた。

「どうした？ 安奈も私に用か？」

「うん。まあ、そうかな。明日の事でちょっと聞きたい事あってさ」

「明日の事？ 明日は卒業式だろ？」

「そうだよ。それで、明日は来れそう？」

「来れそうって、卒業パーティーの事？」

私がそう聞くと、安奈が少し悩む。

そして、ニッコリ笑顔を見せ、「ちょっと違うかな」と言った。
首を傾げる私は問う。

「卒業パーティー意外に何かあるのか？」

「うん。マサ達と一緒に、パーティーしたいな〜って」

「へ〜っ。それは、決まったの？」

「うん。もう、マサとは話しは済んだよ。あと、カズちゃんの返事を聞くだけだよ」

「皆は行くって？」

私が聞くと、安奈は笑顔で「うん」と答えた。

なら、私だけ断るのは申し訳ないし、別に断る理由もないので、快くオーケーした。

すると、安奈は嬉しそうに私に飛びつき、「ありがとう」とささやいた。

私と安奈は完全に久美子の事を忘れていた。

高校三年 卒業式（前編）

卒業式当日。

いつもより早く目を覚ました安奈は、暫し天井を見つめていた。だが、ジツとしていると落ち着かず、安奈はベッドから立ち上がり制服に着替えていた。

「卒業式か……。緊張するな……」

制服のボタンをとめながらそんな事を呟く安奈は、ふと携帯を手にとった。

『マサ、起きてるかな？』と、思いながら携帯を開く。すると、携帯が急に激しく震えた。驚いた拍子に、携帯が宙に舞う。

左手で携帯を取ろうとしたが、それは空を切り、何とか右手を伸ばして携帯をキャッチする。

間一髪だ。

ホッと胸を撫で下ろす安奈は、弾みで閉じた携帯を開いた。

メールのマークが着いている事から、メールが届いたのだと気付く。

「誰だろう？ 朝早くから」

そんな事を呟きながらメールを開いた。そこには、マサと名前が打っており、雅之からのメールだと気付いた。

「マサ、起きてたんだ」

少し嬉しそうに、安奈はメールを読んだ。

『おはよう。まだ、寝てたかな？　ちよつと、早く目が覚めてさ。何だか緊張気味。卒業証書貰う時こけたらどうしようとか考えちゃうよ。あゝ…不安だらけだ』

「フフフツ。なぐんだ。マサも私と同じだ」

嬉しそうに含み笑いをしながら、安奈はメールの返事を打ち返した。

『おはよう。私も、今日はちよつぴり早く目が覚めたんだ。マサにメール送ろうか悩んでたら、マサからメールが！　びっくりして思わず携帯を投げちゃったよ。何とかキャッチしたけどね。そうそう、私も卒業式が不安なんだ。大勢の前で恥じはかきたくないよ』

メールを送った後、安奈は朝食の準備をする。

その間も、雅之と何度かメールのやり取りをかわしあった。

楽しい時間と言うのはアツと言う間で、すぐに久美子が部屋の前まで迎えに来る。

「安奈ゝ。早く！　早く！」

「分かつてる！　そう言うなら、もっと早く来れば良いのに……」

軽く愚痴を零す安奈は、ちゃんと戸締りしたか確認して、靴を履き外にでた。

少し苛立った様子の久美子に、「お待ちせ！」と、笑顔で言う。呆れた様のため息をつく久美子は「急ぐわよ！」と、言って歩き出した。

安奈はそんな久美子の背中を見て、軽く笑い後を追った。朝から上機嫌の安奈に対し、ちよつと不満そうな表情の久美子。少し久美子の事が気になった安奈は訊く。

「久美ちゃん。どうかしたの？」

「別に」。何処かの誰かが、朝からイチヤイチャメール何かしてるからさ！」

「イチヤイチャって、何でメールしてたの分かったの？」

「そりゃ分かるわよ。あんたが、いつも以上に上機嫌だから」

「でも、イチヤイチャなんかしてないもん」

安奈はそう言い頬を膨らます。すると、久美子が振り返り呆れたようにため息をつく。

「はいはい。わかったわよ。イチヤイチャしてないのね」

「何よ。その投げやりな言葉は」

「さあゝっ、卒業式頑張ろう！」

「もう！ 話し聞いている」

「聞いてます、聞いてますよゝ」

投げやりな態度でそう言う久美子は、安奈に背を向け歩き出す。その時、安奈はふと向こう側の歩道に目が行く。向こう側の歩道を二人組みの小学生が歩いていたのだ。

二人とも小学校低学年と言った感じで、何だか淒く危なっかしい。今にも道路に飛び出しそうだったから。

「何だか、心配だな」

ふと、そんな事を呟いた安奈は、車のエンジン音に気付き振り返った。結構大型のトラックが、これまた結構なスピードで走っている。

子供達はそれに気付いたくない様で、未だじゃれあっている。その時、一人の男の子がバランスを崩し道路へと体が投げ出され

た。

『危ない！』と、思った時には体が動いていた。

高校三年 卒業式 (前編) (後書き)

卒業式……。

色々な事を思い出します。楽しかった思い出や、辛かった思い出。いよいよ、次回で『間違いメール 番外編集』も、幕を閉じます。長かったです、最後まで読んでもらえると、嬉しいです。

高校三年 卒業式（後編）

雅之は運動場で整列していた。

もうすぐ、卒業式の会場である体育館に入場するからだ。

落ち着かない様子の雅之は、何度も手の平に人と言う字を書き飲み込んでいた。

その時、不意に背後から声を掛けられる。

「何、緊張してんだ？」

突然の事に雅之は驚き飛び上がる。その驚き方に声を掛けた健介も少し驚いた。

「そんなに驚く事ないだろ？」

「だ、だって！ 急に声掛けるからさ」

「何の話？」

雅之と健介の間に、和彦が笑顔で乱入してきた。もちろん、雅之は「うわっ」と、驚きの声をあげ、健介と和彦は変な目で雅之を見ていた。

二人に背を向け、手の平に人と言う字を書く雅之は、何度もそれを飲み続けた。

「ユキの奴何してるんだ？」

「あれだ。緊張を解そうとしてるんだとさ」

「あれって、効果あるか？」

「さあ？ 本人の気持ち次第じゃないか？」

呆れた様子の健介は、目を細め雅之の背中を見据えていた。和彦

は「ふん」と言いながら軽く首を縦に振った。
その時、列の前方から担任の声が聞こえる。

「オイ！　そこ、ちゃんと並ばんか！」

もちろん、この声は健介と和彦に向けられたもので、二人は担任の死角へと隠れた。

「完全に、俺等に向けた言葉だったな」
「そうみたいだね」

和彦がそう言い微笑んだ時、身近で携帯の着信音を鳴らしている者がいた。

何と無く聞き覚えのある着信音だが、健介も和彦も電源を切っているため自分のではないとすぐに気づき、辺りを見回す。

「誰だよ。携帯の音鳴らしてるの」
「マナーにするか電源切るか、どっちかに出来ないのかな？」

健介と和彦がそう言った時、目の前で携帯を取り出した者がいた。その人物とは、先程まで手の平に人と言う字を書いていた雅之だった。

もちろん、その携帯からは着信音が鳴り響いていて、周りの生徒が迷惑そうな目を向けていた。

「アハハハハッ。僕のだった」

笑いながら健介と和彦の方に携帯を向ける雅之に、呆れたようにため息を吐く二人は「早く出る」とほぼ同時に言った。

笑顔を見せる雅之が携帯を開くと、画面に見覚えのない電話番号

が映っていた。

「うゝん」と唸り声を上げる雅之が、軽く首を傾げた時、また前方から担任の声が響く。

「誰だ！ 携帯を鳴らしてるのは！」

その声に健介は、

「マサ！ 何やってんだ！ 早く出るか切るかどっちかにしろ！」
「うゝん。そうだね」

少し焦りを見せながら、雅之は電話に出た。

「もしもし？」

恐る恐るそう言つと、オドオドと慌てた様な声が聞こえてくる。
何処か聞き覚えのある声。

眉間にシワを寄せる雅之に、和彦が問う。

「誰からだ？」

「聞き覚えがあるんだけど……」

そう言つた次の瞬間、

『わ、私よ！ 久美子！』

と、携帯の向うから聞こえた。

その言葉で、ようやく声の主が久美子だと分かった雅之は、「あゝあ」と、言い大きく頷くと、笑顔で和彦に「久美子からだよ」と、伝えた。

何と無く気分が落ち着いた様子の雅之は、なぜ電話をしてきたのか聞く。

「どうかしたの？ 慌ててる様だけど」

『そ、それが！ 安奈が――』

一瞬で雅之の表情が変わる。明らかに先程までとは違う顔付きの雅之に、健介も和彦も不安になった。

ゆつくりと、右手を下ろし電話を切った雅之は、暫く俯くと、そこに担任がやってきて怒鳴りつける。

「お前か！ 携帯の音を鳴らしていたのは！」

担任は雅之に怒鳴る。だが、反応は無い。担任はそんな雅之にもう一度声を上げた。

「倉田！ 人の話を訊いている――！」

その時、突然雅之が走りだした。

「お、オイ！ 倉田！ お前！」

「雅之は、俺と和彦が！」

「ま、待て！ 加藤！ 白羽！」

担任の声など無視し、健介と和彦は雅之の後を追った。

もちろん、走るのがそんなに速いわけじゃない雅之に、健介も和彦もすぐに追いつく事が出来た。

だが、雅之がどこに向っているのか二人には分からない。ただ、ひたすら雅之についていった。

暫く走り、人通りの多い駅前につく。この瞬間、健介も和彦も何

処へ向うかおおよそ予測がつき、切符を買う前に雅之に問う。

「ユキ！ 何があつたか説明しろよ！ 卒業式を駄目にしてまで行かなきゃいけない事なのか？」

強い口調でそう言う和彦に、雅之は返事を返さない。それどころか、切符を買ってそそくさと駅の中に行くこととする。

そんな雅之の右肩を健介は力強く掴んだ。

「おい！ 待てよ。何で無視すんだ」

「ごめん。でも、急がないと……」

何だか泣きそうな声の雅之に、健介も和彦も顔を見合す。

そして、和彦は静かにため息を吐き、切符を二枚買い一枚を健介に手渡した。

薄らと目に涙を浮かべる雅之は、二人の顔を見て震えた声で言う。

「健介、和彦」

「それより、急ぐんだろ？ あつ、でも、ちゃんと事情は聞かせてもらうぞ。電車の中で」

「うん。わかった」

「ま、待てよ。俺も行くのか？ 卒業式はどうすんだ！」

歩き出した二人に、健介がそう言う。だが、和彦が微笑みながら言う。

「今、戻っても式には間に合わないよ。こうなつたからには三人仲良く校長室で卒業証書を貰うしかないよ」

「けどよ。由梨絵や親になんて言えば……」

「まあ、そこは上手く誤魔化せば良いさ」

「あのなら」

少し怒った様な表情を見せた健介だったが、渋々と言った感じで二人の後に続いた。

何とか電車に乗り込んだ。健介と和彦はそこで、やっと雅之から事情を聞いた。

「それじゃあ、今病院なのか？」

「うん。久美子が言うには」

「でも、鈴木が事故に……」

「何でも、道路に飛び出した男の子を助けようとしたとか……」

少し泣きそうになる雅之に、健介は励ましの声を掛けようと思っただが、言葉が見つからなかった。

それから暫く、電車に揺られ続けようやく駅に辿り着いた。相変わらず、乗り物酔いでフラフラの足取りの雅之は健介と和彦に支えられ駅を出た。

「それで、何処の病院だ？」

「ウウツ……。確か、青山病院とか……」

「何処だよ、その病院！」

健介がそう叫んだ時、和彦が一人の若い人に声を掛けその場所を聞き出した。

「青山病院は向うらしい！ 急ぐぞ！」

「ああ。って、言うか俺は、コイツが心配なんだが」

「ぼ、僕は……平気だよ……」

顔色を悪くしながらそう言う雅之は、フラフラの足取りで和彦の

指差した道を走り出した。

そんな雅之を心配しつつ、健介と和彦は後に続いた。額から汗を流しながら走り続けた三人は、ようやく青山病院へとたどりついた。雅之はすぐさま受付へと急ぐ。

「す、すみません！　ここに、す、すす、鈴木　安奈さんがいるって！」

焦りながらもそう伝えたその時、雅之の背後から驚いた様子の声が聞こえた。

「えっ、ま、マサ！」

安奈の声。雅之はその声に振り返る。

そこには、腕に包帯を巻いた安奈の姿があった。

「あ、安奈？」

「どうしたの？　そんなに慌てて。あれ？　今、式の最中じゃないの？」

落ち着いた様子の安奈に少々戸惑う健介と和彦。雅之の方は、ホツとしたのか何だか目に涙を浮かべている。

首を傾げる安奈に、和彦は疑問をぶつける。

「鈴木。お前、事故にあったんじゃないのか？」

「事故？　私が？　誰が、そんな事」

「久美子から、連絡あったんだよ。マサの携帯に」

「久美ちゃんから？」

安奈がそう言った時、久美子と冷夏と和美的の三人が病院に駆け込

んでくる。慌てた様子の三人が受付に行くのが見えた安奈は、呆れた様にため息を吐き言う。

「はあゝっ。こんなに軽い怪我なのに、こんなに多くの人を巻き込んでんじやって」

慌てる三人に安奈が駆け寄ると、三人は驚きの声を上げた。

その後、久美子から事情を聞いた結果、久美子が慌てて大げさに皆に連絡した事が分かった。

男の子を突き飛ばし、倒れた拍子にちよつと腕を痛めただけで、トラックは安奈に衝突はしなかったとの事。だが、トラックの前に倒れ動かない安奈を目撃した久美子は、安奈がトラックにはねられたと思い、病院に電話し、雅之に連絡して急いで学校へ行き、冷夏と和美を連れてきたとの事。

もちろん、この後久美子は和美の鉄拳をあびた。集まった皆の大切な卒業式を駄目にしたのだから――。

「かんぱゝい！」

雅之の家では、予定通り卒業パーティーが行われていた。卒業証書は後日校長室で受け取る事になるが、今日が卒業式だったと言う事は変わり無い為、パーティーを開催したのだ。

テーブルの上に並べられた料理を食べる健介。その横には、由梨絵の姿があり嬉しそうに微笑んでいる。

その向かいには和彦と恵利が楽しげに話しており、その横では、久美子がテーブルの料理と睨み合っていた。

ソファアに座る和美と冷夏は、コップに注がれたジュースを飲みながら、料理と睨み合う久美子をまっていた。

そして、雅之と安奈は――。

「腕は、大丈夫？」

「うん。平気だよ。体は丈夫だから」

明るい笑みを雅之に見せる。中と違い静かな庭で二人は話をしていた。

「でも、ビックリしたよ。事故にあったって聞いて」

「ごめんね。久美ちゃんの早とちりで、卒業式駄目にして」

「ううん。いいよ。全然気にして無いから」

雅之がニコツと微笑んだ。それと同時に安奈も微笑む。

「卒業したんだよね。私達」

「そうだね。お互い違う高校だったけど、何だか同じ高校に通ってたみたいに見えるよ」

「うん。皆、よくマサの家に集まったもんね」

「卒業して、皆それぞれの道を歩んで行くけど、また、こうして集まれるかな？」

雅之が少し寂しそうな瞳でそう言うと、安奈が不意に雅之に軽く口付けする。

少し驚いた表情の雅之に、安奈は優しく微笑み言う。

「大丈夫だよ。私はいつまでもマサと一緒にだもん」

笑みを浮かべる安奈に雅之も笑みを浮かべた。その瞬間、窓から皆がコツチを見ているのに気付いた。

「な、なにしてるの？」

「何じゃない二人だけでもりあがんな！」

久美子はそう言い安奈の腕を引く。

それから、皆で騒いだ。今までの沢山の思い出を言い合いながら。また、ここで皆で騒ごうと、誓った。

高校三年 卒業式（後編）（後書き）

『間違いメール 番外編集』と、題しまして、これまで色々物語をお送りいたしました。遂に終幕を迎えました。

これまで、数々の感想やメッセージをいただき誠に嬉しく思い感謝しております。

読者の皆様、この物語を最後まで読んで下さりありがとうございました。まだまだ、人に感動を与えたりする作品は書けません。人に感動を与えられる作品が書ける様努力したいと思います。

本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248a/>

間違いメール 番外編集

2011年10月3日02時04分発行